邪馬台国はどこですか？

鯨統一郎

創元推理文庫

邪馬台国はどこですか？

鯨統一郎

創元推理文庫

カバーイラスト●松尾かおる
カバーデザイン●小倉敏夫

邪馬台国はどこですか？　鯨統一郎

M く 3 1
創元推理文庫
422 01
本体660

9784488422011

ISBN4-488-42201-2

C0193 ¥660E

定価（本体660円＋税）

1920193006605

このところバーテンダーの松永は忙しい。常連の三人がいきなり歴史検証バトルを始めてしまうので油断は禁物。話についていくため予習に励む一方、機を捉えて煽ることも。そつなく酒肴を供して商売も忘れず、苦しまぎれのフォローを試み……。またもや宮田六郎の独擅場か、幕引きのカシスシャーベットがお出ましに。三谷教授はいつもながら従容不迫、おおっと静香が切札を出した！

創元推理文庫

創元推理文庫

邪馬台国はどこですか？

鯨　統一郎

邪馬台国はどこですか？

鯨　統一郎

邪馬台国はどこですか？

鯨　統一郎

カウンター席だけの地下一階の店に客が三人。三谷敦彦教授と助手の早乙女静香，そして在野の研究家らしき宮田六郎。初顔合わせとなったその日，「ブッダは悟りなんか開いてない」という宮田の爆弾発言を契機に歴史談義が始まった……。回を追うごとに話は熱を帯び，バーテンダーの松永も教科書を読んで予備知識を蓄えつつ，彼らの論戦を心待ちにする。ブッダの悟り，邪馬台国の比定地，聖徳太子の正体，光秀謀叛の動機，明治維新の黒幕，イエスの復活――を俎上に載せ，歴史の常識にコペルニクス的転回を迫る，大胆不敵かつ奇想天外なデビュー作品集。

邪馬台国はどこですか？

鯨　統一郎

創元推理文庫

WHERE IS YAMATAI?

by

Toichiro Kujira

1998

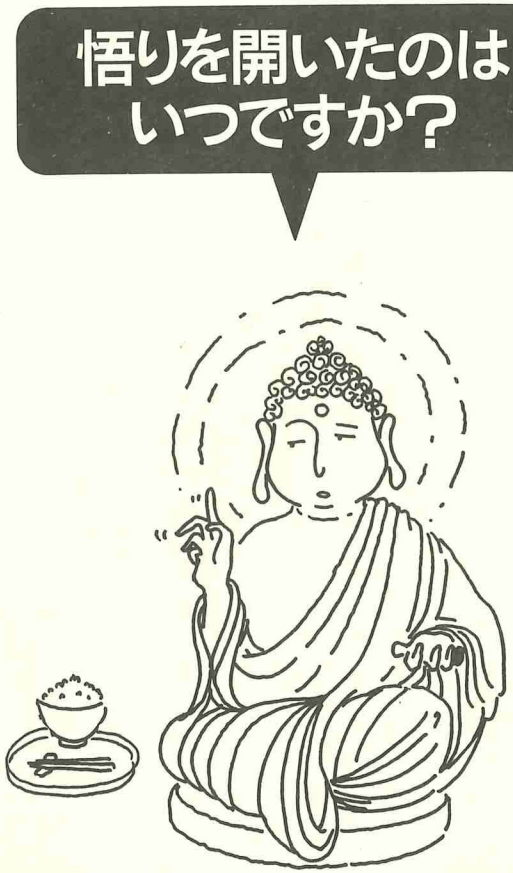
目次

悟りを開いたのはいつですか？　九
邪馬台国はどこですか？　三五
聖徳太子はだれですか？　一一
謀叛の動機はなんですか？　一五九
維新が起きたのはなぜですか？　二〇九
奇蹟はどのようになされたのですか？　二三五

解説　橋本直樹　二〇六

邪馬台国はどこですか？

イラスト　松尾かおる
デザイン　小倉敏夫



この作品がフィクションであるという保証はどこにもありません。

鯨　統一郎

「ねえ、このお店にはワインは置いてないの？」
静香（しずか）が壁の酒棚を見ながら言った。
松永（まつなが）は内心ドキリとした。
静香に指摘されるまで、ワインという酒の存在を失念していたのである。
「はあ、置いてないですね」
松永は腋の下にびっしりと汗が吹き出すのを感じる。
「どうして置いてないのよ」
「ええ、オーナーの方針といいますか、その、」
松永は静香と、その隣の三谷（みたに）を見ながら取り繕おうとする。
「今度いれといてよ」
「判りました」
静香の追及が思ったよりも軽く済んだので、松永はほっとした。
テレビなどで見かける静香は穏和で優しげで、大和撫子の典型のような印象なのだが、アルコールが入ると語気がややきつくなることを松永は知っていた。
「カクテルなら注文してもいいんでしょ？」

「もちろんです」
松永はふたたび緊張した。
松永の頭の中にあるカクテルのレシピは五種類だけだ。
五大カクテルといわれるマティーニ、ニューヨーク、ギムレット、サイドカー、ホワイトレディー、である。
一流のバーテンダーならレシピの二百や三百は頭の中に入れておくものだ。
ただ、自分がはたしてバーテンダーなのか、松永自身にもよく判ってはいなかった。
バーテンダーとして正式の勉強をしたわけではない。
手先の器用さと、おそらくは愛敬のある顔をオーナーに見込まれて店を任されたにすぎない。
「ホワイトレディーをちょうだい」
松永のごつごつとした顔に安堵の笑顔が戻った。
背は低く、いわゆるずんぐりむっくり型（タイプ）、クマソ系の太い眉の松永の笑顔は、真面目な性格が滲み出るのか、人に安心感を与える。
客からは名前で呼ばれることが多いが、マスターと呼ばれることもある。
こだわる性格ではないので、客の呼びたいようにさせている。
「ぼくにはドライマティーニを」
もうひとりの客の宮田（みやた）が松永に声をかける。
「かしこまりました」

「ステア（混ぜる）じゃなくシェイクで」
これはジェームズ・ボンドのセリフである。
静香の眉間がわずかに険しくなる。
「ねえ、あたしのホワイトレディーもありきたりのものじゃダメよ」
「え？」
「何かひねりを利かせてくれなきゃ」
「は、はあ」
むずかしい注文である。
小気味よくスナップを利かせて〝8の字〟に振るというシェイカーの振り方を、ようやく松永はマスターしたばかりだ。
そのうえに何かひねりを加えるとなると……。
普段は水割りしか頼まない静香なのに、なぜ今日はカクテルなど頼むのだろう、と松永は心の中で泣き言をいった。
朝からの雨が静香に心境の変化をもたらしたのだろうか。
カウンター席だけの地下一階の店に、客は三人。
まず、静香と三谷教授。
三谷敦彦（あつひこ）は某私立大学文学部教授で、専攻は日本古代史。
ロマンスグレーの髪がダンディな印象を与える温厚な紳士だ。

早乙女静香は同じ大学の文学部助手。
専攻は世界史。
ふつう大学の史学科では、日本史、西洋史、東洋史という区分けをしているが、静香はその三史を同時に研究しなければ歴史の本質は見えてこないという観点から、自ら〝世界史〟という区分を創り上げた一種の天才である。
二十七歳という若さ、女優にも引けをとらない美貌という条件が重なって、マスコミに取り上げられる機会も少なくない。
静香の椅子ひとつ隔てた隣に、宮田六郎が坐っている。
彼について松永はあまりよく知らない。
以前、雑誌のライターをしているという話を聞いたような気がするが、ハッキリとは覚えていない。
年齢はおそらく三十歳前後。
松永より十歳は若いだろう。
だが松永は、宮田の冷静な話しぶりに好感を抱いていた。
彼とはよくサッカーやプロ野球の話をする。
「ところで、最近、景気の方はどうですか」
三谷教授が松永に話しかけた。
「どうもよくないですね。四苦八苦してますよ」

松永が、体全体でリズムを取るような独特の喋り方で答える。
「いま言った四苦八苦って言葉、仏教用語だって知ってた?」
静香が珍しく松永に話しかけた。
澄んではいるが、力強くもある声だ。
「へえ、そうなんですか?」
松永の声は静香に話しかけられた嬉しさからか少し震えている。
「仏教ではね、生、老、病、死の四つの悩みを四苦というの。それに怨憎会苦、愛別離苦、求不得苦、五陰盛苦、の四つを加えて八苦とするのよ」
「勉強になりますね」
「アミダくじの語源が阿弥陀如来だっていうことは知ってる?」
「いえ」
「アミダくじはもともと放射状に書かれていたの。その形が阿弥陀如来の〝光背〟に似てるからアミダくじって呼ばれるようになったのよ」
「そういえば〝光背〟を背負った仏像をよく見ますね。手でOKサインを作っている」
「あれはOKサインじゃなくて〝印相〟というの。真理に到達する道を示す尊いサインよ」
松永は手許で〝印相〟を作ってみた。
お金のマークにも見える。
「今あたしはね、仏陀の悟りが世界にとってどんな意味があるのかを研究しているの」

松永は静香の視野の広さに感心した。
松永は仏教と聞いても、日本のお寺の印象しか湧いてこない。
世界はおろかインドまでも思いが行かないのである。
「宮田さんは、早乙女さんをご存じでしたっけ？」
そう言った瞬間、意外にもこの両者は今日が初対面だということに松永は気がついた。
「ご紹介します。日本古代史の権威、三谷教授と、若き天才歴史家、早乙女静香さんです」
三谷は苦笑しながら会釈をした。
「こちらは宮田さん。たしか雑誌のライター、ですよね」
「ぼくも歴史家です」
「あら」
静香の口調がいくぶん和らいだ。
「ご専門は？」
「日本古代史です」
「ほう」
今度は三谷が身を乗り出した。
「その中でも特に日本人の起源に興味がありますね」
「ねえ、日本人って混血じゃなくって？　北方系と南方系の」
「もちろんそうだけど、北方系も南方系も突き詰めればアフリカの原始人に行き当たる」

「げ、原始人？」
松永はいささか心配になってきた。
宮田は決して冗談を言っているのではないが、それがはたして静香にどうとられるだろうか。
「その前は猿です」
「サル?!」
静香の目が瞬時にして吊り上がる。
「その前は小さなキツネ。さらに爬虫類、両棲類と遡れます」
「君は歴史をそんなところまで掘り下げているのかね？」
「ええ。最終的には生命の起源、そしてビッグ・バン以前まで究明したいと思っています」
「それで、今はどの辺りをやっていらっしゃるの？」
静香が白けきった表情で訊いた。
「魚、原生動物と済んで、いまは単細胞生物だ」
「まあ。やっとご自分のところまで辿り着いたのね」
静香は目を閉じた。
宮田を自分の世界からシャットアウトするかのように。
「り、輪廻（りんね）転生と通ずるところがありますね」
松永が慌ててフォローする。
静香が目を開ける。

「そうね。この方も前世の因縁で苦しんでいらっしゃるのかもしれないわね」
別に苦しんでいるわけではないのだろうが、静香が会話に戻ってきたのは松永にとって嬉しいことだった。
「私も仏教徒なんですよ」
松永が話をつなぐ。
「あら、そうなの」
「ええ。ただ家が日蓮宗というだけで、あまり熱心な信者というわけではないんですが」
熱心でないどころか、実はお題目も唱えたことがない。
「宮田さん、宗教は何かやってますか？」
松永は確認しておこうと思った。
答えによっては話題を切り換えなくてはならない。
だいたい、酒の席で宗教の話などしない方が無難だ。
だが、三谷と静香にとっては、仏教はあくまで〝歴史〟なのだろう。
「ぼくは無神論者ですよ」
「あら、あなたそれ外国では口にしない方がいいわよ」
静香は、宮田のゆるめたネクタイを見つめて付け足した。
「あなたが外国へ行くことがあれば、の話ですけど」
「無宗教がいけないのかい？」

「あたり前でしょ。外国では宗教は知性の証よ。無宗教だなんて告白したら知性を疑われるわよ」
「じゃあ君は宗教に入ってるのか？」
「あたしはバリバリの仏教徒よ」
「仏教が宗教とは思えないけどな」
「なんですって」
宮田とは関わり合いたくないと思っていたであろう静香は、しかし意に反して宮田との会話にはまりこみつつある。
「そもそも宗教とは、ひと言でいって何だと思う？」
「あなたバカじゃない。宗教を説明しようと思ったらそれだけで上下二冊分の本が書けるわよ」
松永は静香の激しい言葉に仰天していた。
たったいま知り合ったばかりの相手をバカ呼ばわりとは……。
しかし宮田は気にする様子もないようだ。
「むずかしく考えることはない。宗教とは神を信じることだ。そうだろ？」
松永は宮田の言葉に感心した。
たしかにそのひと言で宗教の本質が明らかになっている。
「キリスト教にしてもイスラム教にしても、神の存在抜きには語れない。でも仏教はどうだろ

う？　仏教の信仰の対象であるホトケ様というのは、歴史上の人物である仏陀のことだろ？　つまり神ではなく人間だ」

「イエスやマホメット（ムハンマド）と一緒じゃない」

「いや、彼らは預言者だよ。あくまで唯一絶対たる神の言葉を預かる者にすぎない。ところがブッダは、自ら悟りを開いてしまった……らしい」

「あなた宗教には無知みたいだから教えてあげるけど、仏教にも唯一絶対神はあるのよ」

「君が言いたいのは梵天だか大日如来だかのことだろう？　唯一という言い方が妥当かどうかは別にして」

「そ、そうよ」

インド・アーリア人の最古の聖典、『リグ・ヴェーダ』での最高神はインドラ（帝釈天）だった。

ところが時代が下り、『リグ・ヴェーダ』の付属文献である『ウパニシャッド（奥義書）』に至って思想が発展し、ブラフマンという絶対真理を考えるようになった。このブラフマン（宇宙の根本原理）を人格神化したものが梵天なのである。

大日如来とは、はるかに下って七世紀ごろに大乗仏教から発展した『密教』の信奉者たちが創造した宇宙神のことである。

「梵天はもともとヒンズー教の神だし、大日如来はブッダの時代にはなかった概念だ」

「だから何だっていうのよ。仏教は世界三大宗教のひとつなのよ」

「ブッダの本質は、宗教家というより哲学者だと思う。さしずめ君は哲学者の弟子といったところだ」

「まあ」

虚を衝かれた恰好の静香は、子もちししゃもにかけていたレモンを落としてしまった。

「あなた、ブッダの真の弟子はあたししかいないというのね？　ブッダの悟りを引き継ぐ者はあたしだけだと？」

たぶんそこまでの意味はないだろうと松永は思う。

「ブッダは、本当に悟りを開いたのだろうか？」

宮田がぽつりとつぶやいた。

「ごめんなさい。聞こえなかったわ。あなた今なんて言ったの？」

「ブッダは本当に悟りを開いたのだろうか？　ぼくが常々感じている疑問なんだ」

静香は子もちししゃもの頭を噛み砕いた。

「まさか本気でそんなこと言ってるんじゃないでしょうね」

「本気だよ。ブッダは悟りなんか開いてない。ぼくはそう思う」

静香は露出している両腕を押さえた。

「あたしなんだか寒気がしてきたわ。松永さん、悪いけどおあいそしてくれる？　それから、宮田さんとかいったわね。いい病院を紹介するわ。山と湖に囲まれたところだから、静養には持ってこいの筈よ」

「でも、悟りを開いた人物が、その後どうして三か月も座禅なんかしたんだろう?」
静香の長い眉がぴくりと動いた。
「どういうことなんだね、宮田君」
三谷が宮田の言葉に興味を示す。
「ブッダは悟りを開いたあとに、三か月の禅定をしているんです。食事を運ぶただ一人の弟子以外は残らず人払いをして、まったく説法をしないで、誰にも会わずに三か月も禅を続けた」
「それが、どういう意味を持つのかね」
「禅というのは悟りを開くためにするものです。いわば自分のためにするものです。その結果、解脱の境地に達したら——悟りを開いたら、今度はそれを他人に伝えなければいけません。これが説法です。他人のために説法できて初めて宗教活動といえるわけです」
宮田はいったん言葉を切った。
「ところがブッダは三か月間、この説法を放棄してしまった。他人のための説法を行わないで、自分のための禅定に没入してしまった。これはすなわち、悟りを開いていなかったということではないでしょうか」
松永は、宮田が仏教に造詣が深いと知って驚いた。
「とんだへ理屈をかましてくれるわねあなた。ブッダの深いお考えがあなたなんかに判るわけないでしょ。ブッダが悟りを開いていなかったなんていうのはね、徳川家康が江戸幕府を開いていなかったというのと同じくらいナンセンスなことなのよ」

静香は勢い余ってジャーマンポテトを注文した。
ついさっきおあいそと言ったことは忘れてしまったようである。
「だけど、どんなに仏典を探してみても、ブッダが悟った瞬間のことを記した文章は一行だって見つからない」
「え、あなた今、なんておっしゃったの?」
「仏典には、悟りの瞬間やその内容についての記述は一切ないと言ったんだ」
「恐い。恐いわ、あたし。角川文庫読むよりあなたの話聞いてる方がよっぽど恐いわよ。いいことあなた。厖大な仏典の中でも、ブッダが悟りを開いた瞬間を記した箇所はいちばん有名な見せ場なのよ」
静香はカウンターの下に置いてあった大きなバッグからごそごそと書類を取り出した。
「あなた、仏四大事って知らないでしょ。出生・正覚(悟りを開いた瞬間)・初転法輪(初めての説法)・入滅(ブッダの死)のことよ。この四つの出来事は仏典の中でも特に念入りに書かれてるのよ」
静香は書類の束を宮田に渡した。
「あたしの書いたメモよ。もったいないけど見せてあげるわ。醤油のシミなんかつけないでよ」
書類のいちばん上には、女性にしては珍しく子どものような字で次の一文が記されていた。

——如是我聞（にょぜがもん）——

はじめて正覚を成就したまえる世尊は、ある時、ウルヴェラ村のネランジャラ河のほとりの菩提樹のもとにましました。その時、世尊は、一たび結跏趺坐（けっかふざ）したままで、七日間、解脱のたのしみを享（う）けつつ坐したもうた。

「いい？　これは自説経（ウダーナ）という仏典の中にある言葉よ。正覚を成就したまえる世尊は、ってあるでしょ。これはね、悟りを開いたブッダは、ってことなのよ」

「如是我聞って何だい？」

「おどろかせてくれるわねあなた。さんざん『スター・ウォーズ』についての話（ディスカッション）をしたあとで『ところでジョージ・ルーカスってだれ？』って訊くようなもんよ、それ」

宮田は苦笑した。

「ほとんどの仏典はこの言葉で始まるからよく覚えておきなさい。如是我聞ていうのはね、『わたしはこう聞いた』という意味よ」

「じゃあ又聞きか」

「なんですって」

「ブッダの説法というのは、弟子たちが直々に聴聞したわけじゃない。みんな又聞きなのさ」

「あなた、如是我聞の意味を知ってあたしに訊いたのね」

静香の体全体から目に見えぬ激しい怒りのオーラのようなものが発せられたのを松永は感じた。

「別にそういうわけじゃない。『如是我聞』だけなぜ口語体に訳してないのかという素朴な疑問を指摘したまでだ」

宮田はあくまで落ち着いている。

「ブッダは悟りを開いていないなんて言葉、今すぐ取り消しなさい。さもないとあなたの身にとてつもない不幸がふりかかるわよ」

とても仏教徒の言葉とは思えない。

今まで、「心優しき仏教徒（ブディスト）」とばかり思い込んでいた静香の、全く別の一面を見せられて松永は愕然としていた。

「そもそも、悟りって何だろう？」

「あなた、そんな根元的なことも判らないの？」

静香は自分の手許にあった書類を何気なくパラパラとめくり、あるところで止めると宮田に隠すように答えた。

「悟りというのはね、心の迷いが解けて真理を会得することよ」

「岩波の国語辞典の定義か。ぼくだって心の迷いが解けて真理を会得したことはあるよ」

「あんたとブッダを一緒にしないでよ！」

静香がとつぜん大声を出した。

その剣幕に松永は度肝を抜かれる。

「マーク・トゥエインの言葉にこういうのがある。『禁煙は簡単だ。なぜならぼくはもう百回もやっている』」
「何がいいたいの？」
「悟りを開いた、と思える瞬間は、ブッダほどの人だからたしかにあったかもしれない。でもそれは真の悟りではなくて、しばらくするとまた迷いの境地にはまりこんでしまうようなものだったんじゃないだろうか」
「なんでそんなことがいえるのよ」
「だって、さっきも言っただろう、ブッダは悟りを開いたあとでまた、悟りを開くための禅をしてるんだよ」
禅とは、真理に到達するために古来よりインドで行われていた方法である。
禅を教義の根本に据えたのが六世紀の達磨大師（だるまだいし）だ。
「ところで、ブッダはなぜ出家しようなんて気になったんだろう？」
宮田は牛タンの鉄板焼を注文しながら話を展開させた。
「あら、ド素人（シロウト）にしてはいい質問ね」
静香も負けずにサイコロステーキを注文する。
この店は松永が任された当時はたしかに『バー』だったのだが、彼のこだわらない性格のせいか、最近は食事の品数が『スナック』並みに増加しつつある。
「たしかに王家の子ども、つまり王子であるブッダがなに不自由のない暮らしを捨てて出家の

道に入ったなんて、あなたみたいな俗物には逆立ちしたって理解できないでしょうね」
「え、ブッダって王子だったんですか？」
「しっかりしてよ、松永さん」
「すみません」
「まあ松永さんは知ったかぶりしないだけましよ」
静香は宮田に鋭い視線を送った。
「いい？　松永さん。ブッダの本名はゴータマ・シッダールタというの」
「ゴータマ・シッダールタ……」
「そう。それでね、シャーキャ族の王子だったのよ。このシャーキャというのはサンスクリット語なんだけど、これを音写して釈迦という字を当てたの。だからブッダのことをお釈迦さまというのよ」
「へえ、釈迦というのは種族の名前だったんですか」
「そうよ」
「でも、ブッダというのは？」
「ブッダっていうのはね、〝目覚めた人〟、つまり悟った人という意味のサンスクリット語よ。それを仏陀と音写したの」
「ははあ」
松永は静香の前にカクテルグラスを置いた。

「そのサンスクリット語というのは何です、古代インド語ですか？」
「サンスクリット語はアーリア人の言葉よ。インドにはもともと先住民族がいたんだけど、そこに西洋人の血を引くアーリア人が割り込んできたの。だからサンスクリット語って、ギリシャ語やラテン語に似てるわよ」
松永はインド人の顔が現代でも、どこか西洋人的であることを思い起こした。
「ブッダもアーリア人なんですか？」
「ブッダは釈迦族だって言ったでしょ」
「じゃあ先住インド人？」
「ねえ、変わりばえしないわね、このホワイトレディー。もう一杯、ひねりの利いたのを作ってくれない？」
静香は松永の質問を無視して言った。
「わ、わかりました」
「ブッダはネパール人だよ」
牛タンを半分ほど平らげた宮田が口を挟んだ。
「ブッダが生まれたのはルンビニーという所だけど——仏教系の幼稚園によくルンビニ幼稚園ってあるだろ、これは現在のネパールさ」
「でも、民族的には？」
松永はカクテルグラスを宮田に渡しながら訊く。

「ネパールの支配階級はアーリア人だけど、釈迦族がどういう人種だったかは実はよく判っていない。なにしろ紀元前四〇〇年ごろの話だからね」
ブッダの生年自体、確定していない。
南方系の伝承では、紀元前五六三年に生まれて紀元前四八三年に没したことになっている。これが北方系の伝承だと、紀元前四六三年に生まれて紀元前三八三年に没したとされている。ちょうど百年、時代が新しくなるわけだ。
ちなみに南方系とは、インドより南（スリランカや東南アジア）へ流伝した仏教であり、北方系とはインドより北（中国、チベット、韓国、日本など）へ流伝した仏教だ。
南方系仏教は、ブッダの教えを忠実に再現・研究、もしくは実践することを信条とし、主に自ら悟りの境地に達することを目的とした。
これに対して北方系仏教は、ブッダの真意は狭い範囲に留まらず、自分だけでなくすべての者に安らぎを与えることだと考えた。
この北方系仏教の担い手たちは自らの仏教運動を大乗（大きな乗り物）と称し、南方系仏教を小乗と呼んだ。
もちろん小乗というのは貶称（へん）だから、現在はこの語は用いず部派仏教、あるいはアビダルマ仏教などと呼ばれている。
「釈迦族が何民族だったかなんてどうでもいいでしょ。モンゴル人だと言おうがアーリア人だと言おうが誰にも証明できないのよ」

「もっともだ」
「それよりも大事なことはね、ブッダが王子でありながら、人生について深い悩みを持っていたということよ。人はなぜ老いるのか？　人はなぜ死ぬのか？」
「とても三十歳の男の悩みとは思えないな」
「え？」
「ブッダが出家したのは三十歳前後といわれてるだろ？」
「そうよ」
「ぼくも思春期には人生について悩んだことがあるよ。中学生、高校生の頃……。でもね、二十歳を過ぎれば、まして三十歳にもなったら、悩みはもっと現実的なものになってくる筈だ」
「ねえ。あなた、ブッダとその辺のオヤジを一緒にしてない？」
松永は静香のホワイトレディーにとりかかり、シェイカーを〝8の字〟に振り出す。
「ぼくはね、ブッダの本当の悩みは、人生とか生とか死とかじゃなくて、奥さんの浮気だったと思ってる」
松永は思わずシェイカーを落としそうになった。
「それに、ブッダは王子じゃない。たぶん商人の子だろう」
突然、静香は笑い声をあげた。
「悔しいけどおもしろいわ。そのナンセンス・ジョーク」
「別にジョークじゃない。本気さ」

「だとしたらあなた本物のバカよ」
静香は笑顔を引っ込め真顔に戻ると、「ここ読んでみなさいよ」と自分のメモの一文を宮田に示した。

修行者ゴータマは、高貴にして破られざる王族の家から出家した。彼は繁栄していて大財産あり、非常に富裕な家から出家した。

松永がおそるおそる二杯目のホワイトレディーを静香に差し出す。
静香はそれを一口飲む。
「うん。この味よ。ひねりが利いた新しいホワイトレディー」
どうやら気に入ったようである。
「このカクテルを〝ホワイトレディー・静香〟と名付けてもいいわよ」
「君がどの仏典から引用したのか知らないけど、仏典を鵜呑みにはできないよ」
静香のメモを読み終えた宮田が口を開いた。
「なんでよ」
「もし仏典の記述を全部信じるなら、ブッダは母親の腋の下から生まれて、生まれた瞬間『天上天下唯我独尊』と喋ったことになる」
「あなたには常識ってものがないの？　そんな荒唐無稽なものはウソに決まってるでしょう

が」
「じゃあ、ブッダが王家の出であることが荒唐無稽でないとなぜいえる？」
「すべての仏典に明記されてるからよ」
「しかし仏典といっても、ブッダ自身が書いたわけじゃない」
ブッダの没後百年ぐらい経ってから、その教えの確認と編纂の作業（いわゆる結集）が原始仏教徒の間で始まった。
八万四千にものぼるといわれるブッダの教えが集成され、その全体は経蔵と名付けられた。つまり仏典とはこの経蔵のことで、原語はパーリ語、漢訳したものを阿含経という。
ブッダの前世の物語や、誕生、正覚、初転法輪、入滅などの出来事はすべてこの仏典の中に記されている。
紀元前一世紀あたりに大乗仏教運動が起こると、彼らの思想も『経』という形で表明された。『般若経』『法華経』『華厳経』などである。
「『経』と呼ばれる仏典はブッダが直接書いたものではないし、まして紀元前の記録なんだから鵜呑みにはできない」
「あなたみたいに何でも疑ってかかる人って、絶対シュリーマンにはなれないわね」
ハインリヒ・シュリーマン。
ホメロスの神話物語『イリアス』『オデュッセイア』が事実に基づいているという信念のもとに、ついにトロイの遺跡を発掘した、十九世紀後半のドイツのアマチュア学者である。

「ぼくは、古代の記録には見方があるといいたいだけだ」
「見方？」
「そう。つまりね、対象者を神格化するような記述は創作である可能性が高い。逆にそうでないものは事実と認定できるのではないか」
なるほど、と松永が思っていると、
「大雑把な括り方だが、おおむね肯定できる意見だね」
今までナンコツを噛み続けていた三谷教授が、ようやく呑み下したのか口を開いた。
「あなた、『釈迦族の王子』というのが神格化だっていうの」
「冷静に考えればそう思える」
「かわいそうな人ね」
「ブッダは少年時代に学校に通っていた」
「いいことじゃないの」
「王様の子どもだったら教師を自分の宮殿に呼びつけるよ。まちがっても学校へ通うなんてことはするわけがない」
静香は返事ができない。
宮田は追い討ちをかけた。
「おまけにブッダが石板で文字を習っている彫刻が、パキスタン北部のガンダーラで見つかっている」

『♬ガンダーラ』は松永の得意のナンバーである。
「当時、王族やバラモン（僧侶）は字を習わないんだ。ソクラテスと同じで、すべて口頭による暗記で済ませている。字を必要としたのは商人なんだ。暗記だけだともめごとの元になるからね。だからぼくはブッダは商人の子どもではないかと考えたんだ」
「だって仏典が、」
「古い仏典ほど、ブッダの幼時のことには触れていないよ」
三谷が注文したドーナッツ形のつみれだんごができあがった。
「そういえば、プレスリーが晩年太り過ぎたのはドーナッツの食べ過ぎが原因だったらしい。貧乏時代に食べられなかったドーナッツを、金持ちになってから狂ったように食べたんだ」
「ねえ、いま話題が激しく飛ばなかった？」
「ブッダの父親、つまり釈迦族の王の名はシュッドーダナだね。これは漢訳すると浄飯王（じょうぼんおう）となる。浄飯は白米のことだ」
「王様だから白米を食べていたんでしょ」
「そうかな。王様が白米を食べるのは当然だからわざわざ名前にするとは思えない。これはプレスリーのドーナッツと同じで、むかし食べられなかったものが財を成して食べられるようになった……その喜びが現れたものだとぼくは思う」
「あなた感受性強すぎるんじゃない？」
「むしろ鈍感だから、事実をひねらないでありのままに見られるのさ」

宮田は静香から渡されたままになっているメモの一部をめくった。
「ほら、これは梵天がブッダに語った言葉だよ」

起て、健き人よ、戦勝者よ、隊商の主よ、負債なき人よ、世間を歩みたまえ。世尊よ、法を設きたまえ。

「ブッダの父親は王様ではなくて、成り上がりの富豪だったことを暗示している文章だと思うね。それから、説くという字をまちがえてるよ」
松永はだんだんブッダが商人の子であったような気がしてきた。
「宮田さん」
宮田は松永に顔を向けた。
「さっき、ブッダの真の悩みは奥さんの浮気だとか、」
「判ったわ！」
静香が大きな声を出した。
「もしかしたらそれ、あなた自身の悩みなんじゃない？」
三谷が水割りを飲もうとしてむせかえった。
あまりにも失礼な言い草である。
「ぼくは独身だよ」

「でしょうね」
静香も自分のペースを取り戻しつつあるようだ。
「でも、ブッダには妻も子もあった」
ブッダにはヤショーダラー姫という妻がいて、彼女との間に一子ラーフラを儲けている。
「ブッダはなぜ、妻も子も捨てて出家しなければならなかったのか？」
「人類救済のためよ」
「人類救済はあくまで大乗仏教になってからの話だろ？　初期の仏教は、ましてブッダ自身は、自分自身の救済、つまり悟りを開くことが目的であった筈だ」
「いいじゃない、別に」
「でも、自分自身を救済するために妻も子も捨てるなんて、ずいぶん無責任な話だと思うよ」
「あなたみたいな俗人には判らない深いお考えがあってのことよ」
「そうかな。ぼくは自分の子どもがいるわけじゃないから判らないけど、でも常識的に考えれば自分のかわいい子どもを捨ててゆくなんてできないんじゃないかな」
「出家とはそういうものよ」
「そうだとしても、慈悲の人であるブッダが妻子を捨てるなんて、ぼくには納得できない」
「ブッダはそれをやったのよ」
「それはラーフラが、彼の本当の子どもではないからだと思う」
「なんですって」

「妻子を捨てるなんて、妻子に少しでも愛情があればできないと思う。それが捨てられたということは、妻子に対して冷めた感情を抱いていた証拠だよ」
「あ、あなた、罰があたるわよ」
静香は小声で般若心経を唱え出した。
「宮田君。ラーフラが自分の子ではないなんて、いったいブッダにどうして判ったというんだね？」
「それはたぶん、ブッダが性的不能者だったからです」
静香が口を開けたまま般若心経の読経をやめた。
「ブッダは王宮で、多くの女官たちに囲まれて暮らしていた、そしてその女官たちのしどけない姿に幻滅したというのが、出家のきっかけでしたね？」
「多くの仏典にはそう記されている」
「この〝王宮〟というのは〝豪邸〟と読み替える必要がありますが、〈女官たちのしどけない姿に幻滅した〉という伝承は、いったいどういう事実を反映しているのでしょうか」
「それは、」
「ぼくはブッダが、若い女性に興味がなかった、あるいは反応できなかったという事実を表しているのだと思います。健康な若い男性だったら、若い女性に囲まれていれば喜びますよ」
「ブッダをその辺のオヤジと一緒にすんなって言ってるのよ！」
静香の怒りが爆発した。

「でもそう考えれば、ブッダが妻子を捨てた理由が納得できる。自分が性的不能者であれば、ヤショーダラー姫の子が自分の子でないことは自明の理だからね」
「そんなバカなことがあるわけないでしょう！」
「じゃあなぜブッダは、自分の子どもにラーフラなんて名前をつけたんだ？」
ラーフラ……。
「宮田さん。どんな意味なんですか？　ラーフラって」
「悪魔さ」
「あ、悪魔……」
松永は絶句した。
まさかブッダが自分の子どもにそんな名前をつけていようとは。
これはたしかに異常事態と言わざるを得ない。
「悪魔なんて少し言い過ぎじゃないかしら。たしかにもともとは悪魔っていう意味だったんでしょうけど、ブッダの時代には〝障り〟とか〝邪魔者〟ぐらいの意味に和らげられてると思うわ」
「そんなことは判らないさ。仮にそうだとしても、なぜ自分の子が〝邪魔者〟なんだい？」
「そ、それは、自分の子が出家のさまたげになるから……」
「子どもが生まれた瞬間にそんなことを思って名付けたのかい？　だったら最初から生まないようにすればいい。矛盾してるよ。それに、子どもに罪のないことはブッダも判ってるじゃないか。ブッダが慈悲の人であれば自分の都合だけで〝邪魔者〟なんて名を子どもにつけるわけがない。ということは、」
宮田は水割りを一口飲んだ。
「解釈はひとつしかない。ラーフラはブッダの子どもではなかったんだ。ヤショーダラー姫の浮気の結果の子なんだよ。だからこそブッダは恨みを込めて〝悪魔〟〝邪魔者〟と名付けたんだ」
松永は衝撃を受けていた。
慈悲の人、というブッダの印象が根底から覆された。
「ブッダは悩んだだろう。浮気相手に対する恨みもある。人間不信もある。肉体的な悩みもある。ヤショーダラー姫を許せない自分自身に対する責めもあっただろう。悩んで悩んで悩み抜いたに違いない。その結果の出家だよ。決して〝人生とは？　生とは？　死とは？〟といった抽象的な悩みが漠然と浮かんだわけじゃない。血の涙を流すような切実な苦悩があったんだ。だからこそ、あそこまでの高みに達することができたのだと思う」
「あらあなた。問うに落ちず語るに落ちたわね」
静香が古風なセリフを吐いた。
「今、あなたはブッダが悟りを開いたことは認めたのよ」
「高みに達したと言っただけだ。たしかに前人未到の高さではあるのかもしれないけど、決して永久不変の悟りではない。悟ったあとでまた禅を組まなければならなかった悟りだ」

「あなたブッダに恨みでもあるの」
「逆さ。ぼくはブッダが好きなんだ。その人間くさいところがね」
「これだから素人は困るわね」
静香は松永にカンパリソーダを注文した。
「仏陀の『仏』の字は本来『佛』と書くのよ。『弗』は漢文では『〜にあらず』って読むでしょ。つまり否定の意味よ。水を沸騰させるとお湯になる、この『沸』は水にあらざるものという意味。仏陀の仏（佛）もそうよ。人でありながら人にあらざるもの。悟りを開いて人間くさからは脱した人ってことよ」
博学では静香も宮田に負けていなかった。
「じゃあ訊くけど、ブッダはいったいどんな悟りを開いたっていうんだい？」
「あ、あなた、そんなことも知らないの？」
静香の眼が「ジョージ・ルーカスってだれ？」と言っている。
「般若心経って聞いたことある？」
「一時、写経に凝ってね。毎日のように般若心経を書き写していたことがある」
「ジジくさい男ね」
般若心経とは『般若経』と総称される一群の大乗経典のうちの一つである。
『般若経』の中には『大般若経』のように全六百巻という厖大なものもあるが、般若心経は全文わずか二六二字である。

しかしその二六二字の中に、仏教の教えの根本原理が言い尽くされているともいわれている。
静香は自分のメモの中から般若心経を記した一枚を取り出した。

摩訶般若波羅蜜多心経

観自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。舎利子。
色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識。亦復如是。舎利子。是
諸法空相。不生不滅。不垢不浄。不増不減。是故空中。無色無受想行識。無
眼耳鼻舌身意。無色声香味触法。無限界乃至無意識界。無無明亦無無
明尽。乃至無老死。亦無老死尽。無苦集滅道。無智亦無得。以無所得故。菩
提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顚
倒夢想。究竟涅槃。三世諸仏。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩
提。故知般若波羅蜜多。是大神呪。是大明呪。是無上呪。是無等等呪。能除
一切苦。真実不虚。故説般若波羅蜜多呪。即説呪。曰。羯諦羯諦。波羅羯
諦。波羅僧羯諦。菩提娑婆訶。

般若心経

「般若心経を知ってるんなら判るでしょうが。仏教の教えを一言でいえば〝執着心を捨てろ〟ということよ」

人はなぜ苦しむのか？

愛を得たいと思っても得られない時に苦しむのである。

死にたくないと思っても死ななければならない時に苦しむのである。

また、別れたくないと思っても別れなければならない時に苦しむのである。

ならば、愛を得たい、死にたくない、別れたくないという執着心を捨てれば、悩みは消え去る筈である。

「般若心経の中に〈色即是空（しきそくぜくう）〉という言葉があるでしょ。色というのはこの世のあらゆる現象のことよ。それがすなわち空、実体などないのだと説いてるわけ。だから執着心なんて捨てた方がいいの。ブッダはね、〝執着心を捨てろ〟という悟りを実践するために家族への執着も捨てたのよ」

静香は話しているうちにブッダが家を出た理由に思い至ったらしい。

「でもブッダが出家したのは悟りを開く前だぜ。それに人類がみんなブッダと同じ悟りに達して家を捨てたら、社会が成り立たなくなってしまう」

松永は思わず吹き出しそうになった。

「仏教の『空』の思想というのはお葬式には向いてるだろうね。でも結婚式は教会の方が感じ

が出る。初詣や七五三はやっぱり神社がいい」

「あなたお願いだから、絶対に外国人にはその話、しないでよ。同じ日本人として恥ずかしいわ」

たしかに仏教とキリスト教と神道の行事をひとりの人物が行っていると聞いたら、外国人はびっくりするだろうと松永は思った。

だが宮田は意に介した風もない。

「ブッダが悟りを開いたのはいつだい？」

「三十五歳の時よ。ブッダガヤーの地（ウルヴェラ村のネランジャラ河のほとり）の菩提樹（ピッパラ樹）の下で座禅をしていて大覚成就（だいかく）されたのよ」

「しかしその内容を記した仏典はない」

「あるわよ！」

「般若心経は大乗運動が起こってから記された仏典だぜ」

「あなたが手にしているあたしのメモの二十七ページを見てごらんなさい」

よく見ると静香は自分のメモにノンブルを振っていた。

「自説経（ウダーナ）の一節よ。最近漢訳されたばかりだからあなた読んだことないでしょ」

無明に縁（よ）りて行がある。行により て識がある。識により て名色がある。名色により て六処がある。六処によりて触がある。触によって受がある。受によって愛がある。愛により

て取がある。取によって有がある。有によりて生がある。生によりて老死がある。

「これは十二縁起の法といってね、あなたにも判るように簡単にいえば〝世の中の出来事にはすべて避けがたい原因がある〟ということよ。避けがたいのだから自分の力ではどうにもならない。だから〝執着心を捨てろ〟という般若心経の教えにもつながってゆくのよ」

「知ってるさ。『縁起』という言葉は〝縁(よ)りて起こる〟だからね。ぼくと君がこうやって出会ったのも過去の因縁によるのかもしれない」

「やめてくれる、そういう言い方」

「でもね。ブッダが何を悟ったかなんて仏典によって内容がぜんぜん違うんだよ。十二縁起の法だって、仏典によって八縁起だったり四縁起だったり、三縁起だったり十縁起だったりする」

静香の旗色が悪くなってきた。

「つまりこれは、ブッダの悟りの内容なんて誰も正確には把握していなかったってことだろ?」

「悟りなんてもともと人に教えられるもんじゃないのよ。自分で気づくしかないの。だからといってブッダが悟りを開いていなかったなんてことにはならないわよ」

「サンユッタ・ニカーヤはどこかにあるかい?」

松永はドキリとした。

カクテルの名前だろうか?

「知ったかぶりしてパーリ語で言わないでよ。雑阿含経(ざつあごん)・相応部のことじゃない。静香メモの五十六ページを見てごらんなさい」

いつのまにか自分のメモに〝静香メモ〟という名前をつけている。

「これによると悪魔がいろいろな形をしてブッダを誘惑したことになってるだろ」

「そうよ。ブッダはその誘惑を退けて悟りを開いたのよ」

「サンユッタ・ニカーヤによれば、悪魔は少女から熟女までのあらゆる年齢層の女性四百人をブッダに送って誘惑したけど、ブッダは気にも留めなかったそうだ」

「あなたには想像できないでしょうね」

「いや、このことはぼくのブッダ不能説を証明しているよ」

「あなたやけに不能にこだわるわね。もしかしたらあなたこそ、」

さしもの静香も後の言葉は呑み込んだ。

「ぼくが言いたいのは、ブッダが悟りを開いた後も悪魔の誘惑を受けていることだ」

「それで?」

「悪魔は本当にいたんだろうか?」

「アブナイわね、あなた。比喩に決まってるでしょう。悪魔というのは心の迷いを表してるのよ」

「そうか。じゃあ悟りを開いた後で悪魔の誘惑を受けたということは、その時点でもまだ心の

迷いがあったということだね。つまりブッダの悟りは本当の悟りではなかったということだ」

松永は再び衝撃を受けた。

『サンユッタ・ニカーヤ』という仏典に、ブッダの悟りが本物でなかったという証拠が記されていることになるではないか。

「君の方こそ語るに落ちたようだね」

宮田は〝静香メモ〟をパラパラとめくる。

「ほら、アングッタラ・ニカーヤのこの部分を読んでごらん。漢訳でいえば増一阿含経だ」

苦労してやっと証得したものを
なぜまた人に説かねばならぬのか

「宮田さん、まさかそれ」

「悟りを開いた後のブッダの言葉さ」

慈悲の人というブッダの印象とは、やけにかけはなれた言葉である。

「でも、ブッダはその後で梵天に説得されて説法の道を進まれてるのよ」

「ということは、悟りを開いた後でも態度を転換しているということだね。つまりここにも迷いが読み取れる」

仏典の中に証拠があるのだから静香も分が悪い。

「だいたいブッダが輪廻の輪から抜け出したなんていうのも後世の創作だろう」

インドでは古来より、魂は輪廻転生を永遠に繰り返すという思想がある。

肉体が滅んでも、魂の方は虫になったり獣になったり終わることがない。

仏教では生きることを〝苦〟と規定しているから、輪廻を繰り返している限り〝苦〟から逃れられないことになる。

逆にいえば悟りを開くとは、この輪廻の輪から抜け出すことを意味する。

仏典（中阿含経）にもブッダの言葉として、

わたしの心の解脱は不動である。これは最後の出生である。再び迷いの生存を繰り返すことはない。

という記述がある。

「君はブッダをその辺のオヤジと一緒にするなって言ったけど、ぼくはブッダを愛すべきオヤジだと思ってる」

「オヤジなんて言葉はやめてくれる？　男性といえば済むことでしょうが」

もっともである。

「まずブッダの偉いところは、苦行をやめたところだね」

当時の出家者はみな苦行をした。

人間の持つ雑念や煩悩（ぼんのう）は、肉体が原因だと思われていたからである。
肉体の力を落とせば、逆に精神性は高まるだろうというわけだ。
苦行の内容は断食が主流だが、風変わりな修行も数多くあった。
鶴の行といって何か月も片足で暮らしたり、あるいは亀の行といって何か月も亀のように丸まったまま暮らしたり。
また、茨（いばら）の上に寝たり、何年間も立ったまま生活したり、中には地面に立てた棒の上で生活するものもいた。
いずれも常人にはできない、文字通り苦しい行いである。
ブッダはこの苦行に挑戦して、そしてあっさりとやめてしまった。
断食をしてへとへとになったブッダが、村の娘スジャータから乳粥をもらった時がブッダにおける苦行の終わりである。
「たしかにその英断はブッダの偉大さを表しているわね。快楽を求めてもよくない、苦しみを求めるのも決して真実への道ではない。〝中道〟を行きなさいという仏教の根本思想がこのとき確立されたのよ」
「ぼくはただ、修行が苦しかっただけだと思うぜ」
「なんですって」
「だからこそ偉大なのさ。当時それをハッキリと指摘できる人はいなかったからね」
三谷は専門外の話題のせいか、あまり口を挟まない。

「単に修行が苦しかっただけなのに、ちゃっかり修行をやめたことに、もっともらしい理屈をつけて仏教の根本原理としてしまった。たしかにある意味ではブッダは天才かもしれないな」
「あんたそれ誉めてんの」
「それにね、悟りを開いたのはもしかしたら弟子のコーンダンニャの方かもしれないとぼくは思ってるんだ」
「ええ？」
静香はわざとらしく大きな声を出した。
「ブッダは悟りを開いた後、最初の説法の相手としてかつての苦行仲間五人を選んでるね」
「そうよ」
「本来は苦労をかけた家族にまず伝えるのが人情だと思うけど、妻と子には恨みがあるからそれはしなかった」
「しつこいわねあんた」
「その五人のうちのコーンダンニャが、ついに悟りに達した」
そのときブッダは歓喜の声をあげて仰せられた。
「コーンダンニャが悟った、コーンダンニャが悟った、」
——雑阿含経——
「これはね、ブッダ自身は悟りに達していなかったんだけど、コーンダンニャが悟ったのをい

いことに、その手柄を自分のものにしてしまったと読めなくもない」
「ねえ教えてくれる。どうやったらそんなひねくれた見方ができるの」
「秘密はブッダ入滅のときの記述にある」
静香の皮肉を宮田は聞き流した。
「ブッダは八十歳になって死期が近づいたことを感じると、ふるさとのネパールへ向かって旅立った。これはジョン・デンバーの『ふるさとへ帰りたい』を思い起こさせる」
「だれ、その人。学者？」
「歌手さ」
静香は肩をすくめた。
ジョン・デンバーは一九九七年、自分の飛行機で天国へ還っていった。
「このことは、『執着心を捨てろ』と説いたブッダ自身が、故郷への執着心を断ち切れなかったことを表している」
松永は、「ブッダは悟りを開いていない」という宮田の説がおそらく正しいのだろうと思った。
だが、どこかにホッとした気持ちもあった。
ブッダの人間くささが見えてきたからである。
「旅の途中でのブッダの言動が『スッタ・ニパータ註釈』に詳しく出てるね」
「『経集』でしょ。これは最古の仏典ともいわれているわ」

「それだけに最も真実に近いとも言える」

アーナンダよ。お前はわたしのために外衣を四つ折りにして敷いてくれ。わたしは疲れた。わたしは坐りたい。

さあアーナンダよ。わたしに水を持って来てくれ。わたしは、のどが渇いている。わたしは飲みたいのだ。

「どうだい？　ただのわがままオヤジって感じだろ」
「あのねえ、ブッダはすでに八十歳なのよ。そう言うのが普通でしょう」
「ぼくが言いたいのもそれだよ。ブッダは普通の人だった」
宮田は〝静香メモ〟を斜め読みしながら言った。
ブッダはこのあと、二本のサラの樹（沙羅双樹）の間に、枕を北にして横になり、永眠した。
「あれ、この記述はぼくも知らなかったなァ」
宮田が珍しく頓狂な声をあげた。
「なによ」
「ほら、これだよ。雑阿含経の中で、ブッダが悟りを開いたあとの描写だ」

尊敬するところもなく、恭敬するものもない生き方は苦しい。わたしは、いかなる沙門、もしくはバラモンを尊び敬い、親近して住すればよいであろうか。

静香が、手にしていた箸をカランと落とした。

親近して住する、とは、誰かを師と仰ぎ、弟子としてその下に投ずるという意味である。

「早乙女さん、ぼくは興奮してきたよ。ブッダは悟りを開いたあとでも、まだ自分の師を探していたんだ。悟りを開いた人が師を探すかい？　これこそブッダが悟りを開いていなかったという決定的な証拠じゃないか」

ここに至って松永は、宮田の説を全面的に信じざるを得ないと思った。

「松永さん。奈良の大仏と鎌倉の大仏は、どっちが先にたったか知ってるかい？」

「さあ、どっちでしたっけね」

「あのねえ、奈良、つまり東大寺の盧舎那仏は八世紀、鎌倉すなわち高徳院の阿弥陀如来仏は十三世紀の建立よ」

静香がさすがと思わせる博学ぶりを披露する。

「残念でした。奈良の大仏も鎌倉の大仏も坐像、つまり坐っているから、まだどちらも立っていないというのが正解だ」

「あなた小学生？」

「さっきぼくはこういう質問をしたね？　『ブッダはいつ悟りを開いたんだろう』って。ぼくの答えはこうだ。『ブッダはまだ悟りを開いていない』。だからまだ輪廻の輪から抜け出せないで輪廻転生を繰り返している筈だ。だってほら、よく新興宗教の教祖が『私はブッダの生まれかわりである』なんて言ってるじゃないか。ブッダが悟りを開いているのであれば、もう輪廻しないのだから生まれかわる筈がないよ」

宮田は三人を煙に巻くと、親指と人差指で輪を作り松永に示した。

これは宮田がよくやる〝おあいそ〟のサインだが、松永には阿弥陀如来の〝印相〟のように見えた。

邪馬台国は
どこですか？

例の三人組がスツールに坐っている。
連日の猛暑にもかかわらず、ノースリーブから露(あらわ)になった静香の両腕は透き通るような白さだ。
「あら、おいしいわ」
静香がつくねを手に持ったまま言う。
「素材がいいですからね」
松永が得意げに答える。
つなぎを含まない鶏肉だけのつくねは、丸くならずに棒状に伸びる。
「やっぱり料理は素材ね」
静香の言葉に、松永は満面の笑みを浮かべた。
「それはどうかな」
宮田がアジのたたきをつつきながら口を挟んだ。
「だれ？　この人」
「料理の素材は悪い方がいい」
「は？」

「素材が良ければ生で食べるのがいちばんだ。このアジみたいに」
宮田はアジを一切れ口に放りこむ。
「ステーキだってレアがうまいだろ。もしくはよく焼いてソースか醤油をつけて食べる。これがいちばんうまい。料理をする必要はないさ。料理というのはね、悪い素材をどうやったらおいしく食べられるかという工夫なんだ」
静香は興醒めしたような顔をする。
「あなた生まれてくる時代をまちがえたのかもね。邪馬台国の時代だったらあなた好みの〝素材〟がたくさんあった筈よ」
松永はハッとした。
静香の口から〝邪馬台国〟という言葉が出た。
静香と三谷の最近の会話の内容から、静香がこのところ邪馬台国についての研究をしていることは知っていた。
松永はいつか会話に加わってやろうと、密かに邪馬台国に関する本を読みはじめていたのだ。
このチャンスを逃すまいと、松永は静香に話しかけた。
「ねえ静香さん」
「なに」
「邪馬台国ってどこにあるんですか?」
三人の視線がゆっくりと松永に集中した。

「松永さんは邪馬台国に興味があるんですか?」
三谷が穏やかな口調で訊いた。
「まあ、人並みには」
「それは頼もしい。で、松永さん自身はどっちだと思うんです?」
「まあ、感じとしては畿内でしょうか」
古代日本の女王国、邪馬台国がどこにあったかはまだ解明されていないが、学者の意見はおおかた九州か畿内(関西地方)の二か所に絞られている。
「九州よ」
静香が断言した。
「でも、この間、畿内で三角縁神獣鏡が大量に出土しましたよね」
三角縁神獣鏡とは、卑弥呼が魏の皇帝から下賜されたといわれる銅鏡である。
「あれは卑弥呼の銅鏡じゃないわよ。だって中国からは一枚も出土していないんですもの」
「そ、そうですか」
松永は、いつもながらの静香の冷たい口調にたじろぎながら相槌を打った。
「宮田さんはどっちだと思います?」
松永は討論会の仕切り役のように宮田の意見を訊く。
「東北だ」
宮田は無表情に答えた。

「東北？」
松永は思わず訊き返した。
現在、畿内の中のどの地域か、または九州の中のどこかという議論は存在するが、その二地域を離れた比定地は、もはや学会では存在しないといってよい。
「気のせいかしら？　いま宮田さんが東北って言ったような気がしたんだけど」
「耳はいいようだな、早乙女さん」
「じゃあやっぱり本当に言ったのね？　へたなジョークを」
「ジョークじゃない。邪馬台国は東北にあったんだ」
「ひとつ訊いていいかしら？」
「なんなりと」
「あなたって、もしかしたらバカ？」
松永は息を呑んだ。
「哲学的な意味でならイエスだ」
宮田は動じなかった。松永はほっと胸を撫で下ろす。
「宮田君。きみは本当に邪馬台国が東北にあったと思うのかい？」
「ええ」
三谷の質問にも宮田は平然と答えた。
「なぜそう思うんだい？　よかったらその根拠を聞かせてもらえないか？」

「やめてください先生。こんな人の愚にもつかない戯言（たわごと）に付き合う必要はありません」
「しかし」
「東北といっても広いですよねえ」
松永は議論が終わらないようにあわてて話の接穂を提供した。
「岩手だ」
「岩手？」
静香はバカにする口調になって話に参加しなおした。
「まあ、フィリピンやエジプトを邪馬台国って比定する人もいるんだからそれよりはましかしら」
「岩手県ほど簡単に邪馬台国って比定できる土地はほかにないぜ」
「あなたってもしかしたら今世紀最大のバカかもしれないわね」
「たぶん違うだろう。君がいるからな」
「なんですって」
「こんなに堂々と土地全体が〝邪馬台国はここだ！〟って叫んでるのにそれに気づかないなんて、そうとう呑気だぜ。まあ、コロンブスだって自分が発見した大陸を死ぬまでインドだと思い込んでたぐらいだから、気がつかないってことはありうるけど」
「あたしが悪かったわ。あなた誇大妄想病に罹ってたのね」
「ある学者がこういっている」

宮田はやや強引に話を広げはじめた。
「仮に『魏志倭人伝』の方角表記が誤りだとして、一里を四百メートルと想定してみると、邪馬台国の所在地は東北地方になってしまうではないか！」
「その学者とは私ではないかね？」
三谷が思案げに訊いた。
「そうでしたっけね？」
宮田はとぼけた。
「たぶん私だ。以前出版した一般向けの本のなかに書いた文言だ。ただ私は否定的な表現として使ったつもりだが？　つまり、そんなことがあるわけはないと」
「なぜです？　なぜあるわけがないんです？」
「失礼よあなた。先生にそんなアホみたいな質問するなんて」
静香は三谷をかばうように二人の真ん中に坐っている。
三世紀半ば（西暦二五〇年頃）、日本には邪馬台国と称する女王国があった。
当時の日本には歴史書がなかったから、邪馬台国の存在を証明するものは、中国の『魏志倭人伝』しかない。
三世紀の北部中国を制していた魏の正史を魏史というが、その中に日本の様子を詳しく記した箇所がある。それが『魏志倭人伝』である。字数にして二千あまり。
『魏志倭人伝』には、魏から邪馬台国までの距離と方角が記されている。

距離と方角が記されていればその場所も判りそうなものだが、『魏志倭人伝』の中の距離と方角を正確に再現すると、邪馬台国の所在地は太平洋上になってしまう。
つまり、距離と方角のいずれか（あるいは両方）がまちがっているわけである。
大まかにいえば、距離がまちがっていると考える学者（主に京大系）は比定地を九州とし、方角がまちがっていると考える学者（主に東大系）は、比定地を畿内とする。
三谷、早乙女コンビは、距離がまちがっている＝九州説を採っている。
「ねえ宮田さん。あなた初心者のようだから教えてあげるけど、東北には遺跡がないのよ。つまり古代、東北には人が住んでいなかったの」
「君は三内丸山遺跡のことを知らないのか？」
青森三内丸山遺跡は、全体で三十五万平方メートルという日本最大の縄文遺跡である。
これまで、縄文時代の村の人口は、ひとつの村で十五、六軒、六十人程度と考えられてきた。ところが三内丸山遺跡では一村あたり少なくとも五十軒、多ければ百軒、人口は五百人ほどという調査結果が出ている。
「縄文時代、東北は日本でいちばん進んだ地域だったんだ。邪馬台国があっても不思議はない」
「だからあなたは初心者だっていうのよ！」
静香の血中アルコール濃度が上がり始めた。
「たしかに縄文時代には東北に大勢の原人が棲んでいたかもしれないけど、その原人たちは弥

生時代には移行できなかったのよ」

日本人の祖先たちは、狩猟中心の縄文時代から、稲作中心の弥生時代へと進化を遂げている。ところが、東北人たちは稲作中心の弥生時代へは移行できなかった——静香は、東北に弥生時代の遺跡が少ない点を衝いてきたのだ。弥生時代の遺跡は圧倒的に西日本に多い。

宮田は苦笑しながら反論を試みる。

「八戸市の風張遺跡で、縄文後期の竪穴式住居の中から米が七粒出土してる」

「それがどうしたの？」

「カナダのトロント大学で分析したら、三千年前の米にまちがいないという結果が出た」

今まで日本で発見された最古の米は二千五百年前のものとされている。

「つまり、日本最古の米は東北にあったわけだ」

「九州から運んだものでしょ」

「なぜわざわざ運ぶ必要がある？　食物なら豊富にある。それにもし米を食いたいなら自分たちで作ればいい」

「東北でお米が穫れるわけないでしょ！」

「やれやれ」

宮田は溜息をついた。

「君は興奮すると見境がなくなるらしいな。秋田、山形、宮城は現代における米の名産地だぜ」

「あたしは古代のことを言ってるのよ！」

「古代の東北はいまより気温が二度ほど高かったから、よけいに稲作に適していたんじゃないかな」

「まあ、中国では六千年前から米を作っているんだから、三千年前に東北地方で米を作っていたとしても不思議はないね」

三谷が偏見にとらわれない意見を吐いた。

「古墳がないのよねえ、東北には」

静香が矛先を転じた。

「いくらお米を作っていた可能性を示唆したところで、古墳がなきゃ話にならないのよ！」

静香は勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

蠟燭の炎のなかで、その残酷ささえ湛えた笑みは、一種異様な美しさを放っていた。

「邪馬台国比定の決め手は卑弥呼の墓、つまり古墳なのよ。西日本や九州には古墳がいっぱいあるわ。そのどれを卑弥呼の墓に比定するか迷うほどに。でも東北には古墳なんて全然ないじゃないの」

「古墳は都市開発をしないと出てこないからね」

「なにそれ」

宮田は好物のピーナッツを二、三粒摘んで口の中に放り込んだ。

「ビルを建てようと思って土を掘る。そこで土器が出た。ビルは建築中止。その場所を重要遺

跡として認定する」
「つまり、東北は現代においても遅れていて都市開発などされてないっていいたいのね」
「大意はそんなところだ。だから古墳の発見も少ない」
「お気の毒なこと」
「だが最近は違う。東北地方も開発が進んで遺跡がどんどん発掘されるようになった」
「たしかにそうだね」
三谷がグラスの中の液体を一口飲んでから宮田の言葉を引き取った。
「たとえば前方後円墳だが、山形で二、三年前まで三例しかなかったものが、最近一挙に三十一例も発掘された」
「これからどんどん増えるでしょうね。卑弥呼の墓が東北で発見されるのも時間の問題だ」
宮田の断定的な言い方に静香の怒りが爆発した。
「あんたねえ、九州や畿内でさんざん探して見つからないものが、東北で簡単に見つかるわけないでしょうが！」
松永は静香の怒りに度胆を抜かれて、宮田のグラスが空になっていることにも気づかなかった。
「まさにそこなんだな、問題は」
宮田はグラスを軽く掲げてお代わりを催促してから反論を開始した。
「江戸時代に新井白石が大和説、本居宣長が九州説を唱えて以来、三百年間、学者たちが大和説、九州説を証明しようと躍起になってきた」
「その通りよ」
「でも証明できない。おそらく巨大であろう卑弥呼の墓が、限られたふたつの地域で三百年にもわたって発見できない。それはなぜだ？」
宮田の表情がいつのまにか真剣になっている。
「答えは明白だ。邪馬台国は大和にも九州にもなかったんだ。そう考えるのがいちばん合理的じゃないかな？」
三谷は腕を組んで唸ってしまった。
静香はたっぷり一分間沈思黙考したあと、反撃を開始する。
「邪馬台国が東北にあったかもしれない可能性を状況的に示唆したアホらしい努力にはご苦労さまを言うけど、まったく無駄な努力ね」
静香はいくらか落ち着きを取り戻していた。
「あなた『魏志倭人伝』を無視してるもの」
「そんなことはない。邪馬台国の所在地を解く鍵は『魏志倭人伝』の中にしかないんだから、それを最大限に尊重している」
「じゃあ、どこをどう尊重しているのか示してもらいましょうか」
静香はバッグの中から数枚のコピー用紙を取り出した。どうやら『魏志倭人伝』読み下し文のようだ。

しかも前回の手書き資料と違って、今回は全文ワープロ打ちらしい。

『魏志倭人伝』は、晋の陳寿という文章家が書いた『三国志』の中のほんの一部分である。三国とは魏、呉、蜀のことで、その中の『魏志』の部分に倭人、つまり日本人のことが記されている。

ちなみに邪馬台国についての部分は、

南、邪馬台国に至る。女王の都する所なり。
水行十日、陸行一月。

と、ある。また、卑弥呼については、

その国、もとはまた男子を以て王となし、住ること七、八十年。倭国乱れ、相攻伐して年を歴る。すなわち共に一女子を立てて王となす。名を卑弥呼という。

と、述べられている。

静香は『魏志倭人伝』の全文を便宜的に1から27の段落に分けて番号を振っていた。

『魏志倭人伝』読み下し文

1

倭人は帯方の東南の大海の中に在り。山島によって国邑をなす。舊百余国、漢の時、朝見する者あり。今使訳して通ずる所三十国。郡より倭に至るには、海岸に循いて水行し、韓国を歴て、あるいは南し、あるいは東し、その北岸狗邪韓国に到る。七千余里。

2

始めて一海を度ること千余里、対馬国に至る。その大官を卑狗といい、副を卑奴母離という。居る所絶島にして、方四百余里ばかり。土地は山嶮しく深林多く、道路は禽鹿の径の如し。千余戸あり。良田なく、海物を食いて自活し、船に乗って南北に市糴す。

3

また南に一海を渡ること千余里、命けて瀚海という。一大国に至る。官はまた卑狗とい

い、副を卑奴母離という。方三百里ばかり。竹木叢林多く、三千許の家あり。やや田地あり。田を耕せどなお食足らず。また南北に市糴す。

4

また一海を渡ること千余里、末盧国に至る。四千余戸あり。山海に濱いて居る。草木茂盛して行く前に人を見ず。好んで魚鰒を捕うる。水、深浅となく、みな沈没してこれを取る。

5

東南に陸行、五百里、伊都国に到る。官は爾支といい、副は泄謨觚、柄渠觚という。千余戸あり。世王あるもみな女王国に統属す。郡の使の往来して常に駐る所なり。

6

東南して奴国に至る。百里。官は兜馬觚といい、副は卑奴母離という。二万余戸あり。

7

東行不弥国に至る。百里。官を多模といい、副を卑奴母離という。千余の家あり。

8

南投馬国に至る。水行二十日。官を彌彌といい、副を彌彌那利という。五万余戸ばかりあり。

9

南、邪馬台国に至る。女王の都する所なり。水行十日、陸行一月。官に伊支馬あり。次は彌馬升といい、次は彌馬獲支といい、次は奴佳鞮という。七万余戸ばかりあり。女王国より以北はその戸数・道里を略載するを得べきも、その余の旁国は遠絶にして詳かにすることを得べからず。

10

次に斯馬国あり。次に己百支国あり。次に伊邪国あり。次に郡支国あり。次に弥奴国あり。次に好古都国あり。次に不呼国あり。次に姐奴国あり。次に対蘇国あり。次に蘇奴国あり。次に呼邑国あり。次に華奴蘇奴国あり。次に鬼国あり。次に為吾国あり。次に鬼奴国あり。次に邪馬国あり。次に躬臣国あり。次に巴利国あり。次に支惟国あり。次に烏奴国あり。次に奴国あり。これ女王の境界の尽くる所なり。

11

その南に狗奴国あり。男子を王となす。その官に狗古智卑狗あり。女王に属せず。郡より女王国に至ること万二千余里。

12

男子は大小となく、みな黥面文身す。古よりこのかた、その使の中国に詣るもの、みな自ら大夫と称す。夏后少康の子、会稽に封ぜらるるや、断髪文身してもって蛟龍の害を避く。

今、倭の水人、好んで沈没して魚蛤を捕う。文身し亦もって大魚、水禽を厭うなり。後稍以て飾となす。諸国の文身各異る。或は左、或は右、或は大、或は小、尊卑差あり。その道里を計るに、まさに会稽東治の東に在るべし。

13

その風俗は淫ならず。男子はみな露紒し、木綿をもって頭に招く。その衣の横幅は但結束して相連ね、略縫うことなし。婦人は被髪屈紒、衣を作ること単被の如く、その中央を穿ち、頭を貫きて之を衣る。禾稲・紵麻を種え、蚕桑して絹績し、細紵・縑綿を出す。その地には牛・馬・虎・豹・羊・鵲なし。兵は矛・盾・木弓を用う。木弓は下を短くし上を長くし、竹箭は或は鉄鏃、或は骨鏃。有無する所、儋耳・朱崖と同じ。

14

倭の地は温暖にして、冬夏ともに生菜を食す。みな徒跣なり。

屋室あり。父母兄弟の臥息するに処を異にす。朱丹をもってその身体に塗ること、中国の紛を用うるごとし。食飲には籩豆を用い、手もて食う。

15

その死するや棺あれども槨なく、土を封じて塚を作る。始めて死するや、停喪すること十余日なり。時に当りて肉を食わず。喪主哭泣し、他人就いて歌舞し飲酒す。すでに葬るや、家をあげて水中に詣りて澡浴し、もって練沐の如くす。

16

その行来して海を渡り、中国に詣るには、恒に一人をして頭を梳らせず、蟣蝨を去らせず、衣服垢汚し、肉を食わせず、婦人を近づけず、喪人の如くせしむ。これを名づけて持衰となす。もし行く者吉善ならば、共にその生口・財物を顧し、もし疾病あり、暴害に遭わば、すなわちこれを殺さんと欲す。それ持衰謹まざればなりという。

17

真珠、青玉を出す。その山には丹あり。その木には柟、杼、予樟、楩、櫪、投、橿、烏号、楓香あり。その竹には篠、簳、桃支あり。薑、橘、椒、蘘荷あるも、もって滋味となすことを知らず。

獮猿、黒雉あり。

18

その俗事をあげ行来するに、云為する所あれば、すなわち骨を灼いて卜し、もって吉凶を占い、まず卜する所を告げる。その辞は令亀の法の如く、火坼を視て兆を占う。

その会同、坐起には、父子男女の別なし。人の性、酒を嗜む。大人の敬う所を見れば、但手を打ってもって跪拝に当てる。

19

その人、寿考にして、あるいは百年、あるいは八、九十年なり。

その俗、国の大人はみな四、五婦、下戸もあるいは二、三婦なり。婦人は淫ならず、妬忌せず。

盗窃せず、諍訟少し。その法を犯すと、軽い者はその妻子を没し、重い者はその門戸お

よび宗族を滅す。尊卑おのおの差序あり。相臣服するに足る。租賦を收む。邸閣あり。国国に市あり。交易の有無、大倭をしてこれを監せしむ。

20

女王国より北には、特に一大率を置き、諸国を検察させる。諸国これを畏憚す。常に伊都国に治す。国中において刺史の如きあり。王、使を遣わして京都、帯方郡、諸韓国に詣で、および郡より倭国に使させるに、みな津に臨んで捜露する。文書、賜遺の物を伝送して女王に詣らしめ、差錯することを得ず。

21

下戸、大人と道路で相逢えば、逡巡して草に入り、辞を伝え事を説くには、あるいは蹲りあるいは跪き、両手は地に據りてこれをなす。恭敬、対応の声を噫という。比するに然諾の如し。

22

その国、もとはまた男子を以て王となし、住ること七、八十年なり。倭国乱れ、相攻伐して年を歴る。すなわち共に一女子を立てて王となす。名を卑弥呼という。鬼道につかえ、よく衆を惑わす。年すでに長大なれども、夫壻なし。男弟あり。佐けて国を治む。王となりてより以来、見ゆる有る者少なし。婢千人をもって自ら侍せしむ。ただ男子一人ありて飲食を給し、辞を伝えて居処に出入す。宮室、楼観、城柵、厳かに設けられ、常に人あり。兵を持って守衛する。

23

女王国の東、海を渡ること千余里にしてまた国あり。みな倭種なり。また侏儒国あり。その南にあり。人の長三、四尺にして、女王を去ること四千余里なり。また裸国、黒歯国あり。またその東南にあり。船行一年にして至るべし。

倭の地を参問するに、絶えて海中洲島の上にあり。あるいは絶え、あるいは連なり、周旋五千里ばかりなり。

24

景初三年六月、倭の女王、大夫、難升米等を遣わし、郡に詣らせ、天子に詣でて朝献す

ることを求める。太守劉夏、使を遣わし、もって送りて京都に詣らしむ。

その年十二月、詔書して倭の女王に報じて曰く、

親魏倭王卑弥呼に制詔す。帯方太守劉夏、使を遣わして汝が大夫難升米、次使都市牛利を送り、汝が献ずる所の男生口四人、女生口六人、斑布二匹二丈を奉り、もって到らしむ。汝がある所はるかに遠きに、すなわち使を遣わして貢献す。これ汝の忠孝にして、我はなはだ汝を哀れむ。

今汝をもって親魏倭王となし、金印紫綬を仮し、装封して帯方の太守に付して仮綬させる。汝それ種人を綏撫し、勉めて孝順をなせ。

25

汝が来使難升米、牛利、遠きを渉りて道路に勤労せり。今、難升米をもって率善中郎将となし、牛利を率善校尉となし、銀印青綬を仮し、引見労賜して遣わし還らしむ。

今、絳地交龍錦五匹、絳地縐粟罽十張、蒨絳五十匹、紺青五十匹をもって汝が献ずる所の貢直に答う。また特に汝に紺地句文錦三匹、細班華罽五張、白絹五十匹、金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠、鉛丹各五十斤を賜り、みな装封して難升米、牛利に付す。還り到らば録受し、ことごとくもって汝の国中の人に示し、国家の汝の哀れむを知らしむべし。故に鄭重に汝に好物を賜うなり。

26

正始元年、太守弓遵、建中交尉梯儁等を遣わし、詔書印綬を奉じて倭国に詣り、倭王に拝仮し、ならびに詔をもたらして、金帛、錦罽、刀、鏡、采物を賜う。倭王使に因りて上表し、詔恩に答謝す。

その四年、倭王また使の大夫伊聲耆、掖邪狗等八人を遣わし、生口、倭錦、絳青縑、緜衣、帛布、丹、木拊、短弓矢を上献す。掖邪狗等、率善中郎将の印綬を壱拝す。

その六年、詔して倭の難升米に黄幢を賜い、郡に付して仮綬せしむ。

その八年、太守王頎、官に到る。

倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭の載斯烏越等を遣わして都に詣り、相攻撃する状を説かしむ。塞曹掾史張政等を遣わし、よりて詔書、黄幢を齎し、難升米に拝仮し、檄をなしてこれを告喩す。

27

卑弥呼すでに死す。大きな冢を作る。径百余歩あり。徇葬者、奴婢百余人なり。

さらに男王を立てるも国中服せず、こもごも相誅殺す。当時千余人を殺せり。

また卑弥呼の宗女、壱与の年十三なるを立てて王となす。国中ついに定まる。政等、檄をもって壱与に告喩す。壱与、倭の大夫率善中郎将掖邪狗等二十人を遣わし、政等の還るのを送らしむ。

因って台に詣り、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔、青大勾珠二枚、異文雑錦二十匹を貢す。

「まず、『魏志倭人伝』の方角表記がまちがっていることに異議はないだろうね？」

宮田がいきなり断定した。

「ちょっと待ってよ！」

静香が金切り声をあげる。

「あなた、あたしたちが九州説だと知って挑発してるわけ？」

九州説は、距離がまちがいで方角は合っているという立場である。

「軽いユーモアを挑発ととられては話ができない」

宮田は今日何度目かの苦笑を洩らした。

「どういう根拠で方角がまちがってるっていうわけ？」

「十五世紀の朝鮮で作られた『混一疆理歴代国都之図』という地図だ。これには日本列島が南北逆に描かれている」

一四〇二年に作成されたその地図は、現在、京都の竜谷大学図書館が所蔵している。

その地図によると日本列島は、九州辺りを軸にして南北が逆に描かれている。古代中国の日本観が投影された結果だと見るのが自然だ。

「つまり『魏志倭人伝』に出てくる南という文字は、北と読み替えなきゃならない」

「やってくれたわね、初歩的なミスを」

静香は、勝ち誇ったというよりはむしろ憐れみに近い口調で言った。

「ここを読んで」

静香はコピー用紙のなかの二行を指差した。

始めて一海を度ること千余里、対馬国に至る。

また南に一海を渡ること千余里、命けて瀚海という。一大国に至る。

九州派も畿内派も、対馬国は現在の対馬、一大国は現在の壱岐（一大は一支の誤記説）ということで意見が一致している。

「あなたは南を北と読み替えるなんてアホみたいなこと言ったけど、南を南と読んで初めて対馬から壱岐に行けるのよ」

「その辺までは南を南と読んでいいんだ」

「あたし小学生と話してるのかしら。くだらない言い訳を続ける気なら話を打ち切るわよ」

「君のコピーの5番（伊都国）までは魏の使節が実際に足を運んだから正しい方角表記がされている」
「その先は行ってないっていうの？」
「行ってない。魏の使節が実際に足を運んだのは伊都国までで、その先へは行ってない。伝聞だけだ。だから方角、距離の記述が曖昧になってくる」
「あなたその時その場所にいたの？」
「頭を使えばすぐに判ることさ。君が振った番号の5をよく見てみることだ」

東南に陸行、五百里、伊都国に到る。

「これがどうしたの」
「伊都国に到る、の〝到る〟という字をよく見てみるんだ。他の国にはみんな〝至る〟という字を使ってるのに、伊都国の場合だけ〝到る〟を使ってる」
「それがなにか？」
「〈到〉という字には最終目的地に着くという意味が含まれている。〈至〉は途中経過だ」
「つまり宮田君は〝イタル〟という字から、魏の使節団の最終目的地は伊都国だったと推測したわけだね？」
「そうです」

「バッカみたい。あらゴメンナサイ。婉曲表現使ったりして」
静香はグラスを飲み乾す余裕を得た。
「倭王に会いにきた使節がなぜ邪馬台国に行かなかったのかしら？」
「遠かったからさ」
宮田の答えは簡単だった。
「なんせ邪馬台国は岩手だったんだから」
「証拠は？」
静香は冷たく言い放った。
「邪馬台国が遠かったっていう証拠が『魏志倭人伝』から読み取れるん、です、か」
静香の口調は完全に相手をバカにしきっている。
「読み取れる。文化があまりにも違うことが、邪馬台国が九州から遠い地にあったことを証明してるんだ」
三谷が「ほう」と興味をそそられたような顔つきで宮田を見た。
「いいか。5、6、7番をよく見るんだ」

東南に陸行、五百里、伊都国に到る。官は爾支といい、副は泄謨觚、柄渠觚という。
東南して奴国に至る。百里。官は兜馬觚といい、副は卑奴母離という。二万余戸あり。

東行不弥国に至る。百里。官を多模といい、副を卑奴母離という。

「伊都国と奴国の副官、官の官名を見るんだ。伊都国が泄謨觚、奴国が兕馬觚とよく似ている。副官に至っては奴国と不弥国が卑奴母離とまったく一緒だ。ところが」

宮田はグラスに一口、口をつけた。

「8番、9番を見てほしい」

南投馬国に至る。水行二十日。官を彌彌といい、副を彌彌那利という。五万余戸ばかりあり。

南、邪馬台国に至る。女王の都する所なり。水行十日、陸行一月。官に伊支馬あり。次は彌馬升といい、次は彌馬獲支といい、次は奴佳鞮という。

「投馬国の官がミミ、副がミミナリ。邪馬台国の官はイキマ、ミマショウ、ミマカキなど。不弥国までの国々とは語感がまったく違う」

「まったくという副詞が適切かどうかは別にして、たしかに少し感じが違うようだね」

「そうなんです。これこそ邪馬台国が遠絶地にあった証拠なんです。不弥国までは九州にあったけど、投馬国と邪馬台国ははるかに離れたところにあった」

「どこ?」

例によって静香が冷たい質問の仕方をした。

「投馬国は現在の富山だ」

「なんだって」

これには三谷も驚いた。

「まあ、邪馬台国が東北なら投馬国が富山でもおかしくない理屈だが……。それにしても、今までのほとんどの学者が投馬国は九州近辺と信じて疑わなかったものだからね」

「でも、いいですか。不弥国が九州にある。これは確かとします。そうすると8番にあるように、投馬国へ行くには船で南（つまり北）へ二十日間も旅をしなければならないんです。これはちょうど富山県の辺りですよ」

「ふむ」

「おそらく投馬が現在の富山に変化したんでしょう」

富山の地名の語源がはっきりしないのは確かだ。

「『魏志倭人伝』をそのまま読めばいいんですよ。9番を見てください。投馬国から南（つまり北）へ水行十日陸行一月の場所に邪馬台国があると記されています。現在の日本地図を見ると、それはちょうど岩手県の辺りです」

三谷は再び「うーん」と唸ったきり黙ってしまった。

「『魏志倭人伝』を素直に読めばこうなるし、素直に読むしかないんです。どうしてみなさん素直に読まないんでしょう?」

宮田は皮肉ではなく、純粋な疑問として発言したようだった。
「おそらくみんな、『魏志倭人伝』の細かい表記（方角・距離とも）にこだわりすぎてるから、正解に辿り着けなかったんじゃないかな」
松永は、静香が宮田の顔面に正拳パンチを打ち込みたい衝動に耐えているのを察知した。
「だいたい古代の中国の地図には日本なんてほとんど描き込まれた試しがない。中国人にかかったら日本なんて完全無視だからね。そんな中国人の書いた日本に関する記述を、細かいところまで鵜呑みにするほうがどうかしてる」
「『魏志倭人伝』を無視しろっていうの？」
「細かい数字は無視しろということだ。大雑把な感覚だけを摑めばいい」
静香の体からオーラのような不可視光線が発せられたように松永には感じられた。
顔は無表情で無言だが、それだけに怒り、あるいは闘争本能の凄まじさが察せられる。
「つまり、宮田君の意見を要約するとこういうことになるのかな？」
三谷が学者本来の好奇心から宮田の説を検討しにかかる。
「十五世紀の朝鮮で作られた『混一疆理歴代国都之図』という地図の日本の表記から、『魏志倭人伝』の方角表記は、南を北と読み替える必要がある。また、倭人伝上の官名の語感やイタルという字から、魏の使節は実際には伊都国までしか行ってないことが判る。以上の判断から、不弥国は現在の九州にあったと仮定してまちがいない。そこでもう一度倭人伝に戻る。〈南投馬国に至る。水行二十日〉これの南を北と読み替えると、投馬国は現在の富山県になる。さらに『魏志倭人伝』。〈南、邪馬台国に至る。女王の都する所なり。水行十日、陸行一月〉。これの南を北と読み替えると、邪馬台国は現在の岩手県と比定される」
宮田が拍手をした。
「すばらしい把握力です」
「君の話を聞いてると、邪馬台国が岩手県にあってもおかしくない気がしてくるよ」
「おかしくないんですよ。ぼくは今までの話で充分、邪馬台国＝岩手県説の証明になってると思いますけど」
「『魏志倭人伝』には学者たちを悩まし続けてきた問題点がいくつかあるわよね」
静香の口調はいくらか穏やかになった。
「邪馬台国を岩手県と比定したとき、その問題点が解決されるのかしら」
「すべて解決される」
今度は宮田が、自分のカバンからコピー用紙を取り出した。
松永は、宮田がいやいや話をしているというポーズをとりながらも、けっこう話にノッていることを知った。
「今まで邪馬台国研究家たちを悩まし続けてきた問題点は、整理すると十三の項目に要約される。荒巻義雄という作家が厖大な資料を検討した結果、そういう結論を出したんだ。『新説邪馬台国の謎殺人事件』の巻末に載っている。そのコピーをたまたま持ってるよ」
「たまたま、ね」

宮田は静香と三谷にコピー用紙を渡した。
そこには十三の問題点がA～Mに分けて列記されていた。

A　韓国南岸に比定されている狗邪韓国が、なぜ『魏志倭人伝』では倭国北岸と書かれているのか。
B　帯方郡から狗邪韓国まで七千里とある謎。
C　最大の謎として、『魏志倭人伝』の記載では、距離と方角が現実に全然合わない。
D　邪馬台国まで、水行十日陸行一月とあるのはなぜか。陸行一月は非現実的数字。
E　帯方郡より邪馬台国までの距離が万二千里あるというのはなぜか。
F　倭が周旋五千里とあるのはなぜか。
G　『後漢書倭伝』になぜ、奴国が極南界にあると書かれているのか。
H　倭国はなぜ会稽・東冶の東にあるのか。地図と不一致。
I　邪馬壹国（やまいちこく）が、なぜ後代の書では邪馬臺国（やまたいこく）と書き直されたのか。
J　卑弥呼の鬼道とはなにか。
K　邪馬台国よりさらに千余里海を渡った国はどこか。さらに、侏儒国、裸国、黒歯国の比定地。
L　女王国より以北、二十一か国の所在地は？
M　日向・神武王朝のことがなぜ書かれていないのか。大倭も同じ。

「どうだい、この分類は？」
「あなたのような初心者にとっては判りやすいんじゃないかしら」
決して素直には誉めない女性である。
「ではまずAから行こう」

A　韓国南岸に比定されている狗邪韓国が、なぜ『魏志倭人伝』では倭国北岸と書かれているのか。

「これは『魏志倭人伝』の、きみのコピーでいえば1番の箇所だ」

郡（魏）より倭に至るには、海岸に循いて水行し、韓国を歴て、あるいは南し、あるいは東し、その北岸狗邪韓国に到る。七千余里。

「ここは問題ないだろう？　倭国が南北逆に思われていたのだから、韓国南岸が倭国北岸であってもおかしくない」
松永はもっともだと思った。それに、この箇所は邪馬台国＝岩手説とは直接関係ない。

「Bも問題なし。『魏志倭人伝』の距離なんてもともといい加減なんだから。なぜいい加減なのか？　これはCの答えになるんだけど、当時の中国の地図には日本など描かれていない、描かれていても南北さかさま、おまけに魏の使節は邪馬台国まで行ってない。以上のことから考えて当時の一里が現在の何メートルに相当するのか判らない。結論として『魏志倭人伝』に記された距離は無視するべきなんだ」

「Dは？」

「陸行一月は非現実的数字となってるけど、邪馬台国を岩手県と考えればぜんぜん非現実的じゃない。むしろ現実的な数字だ。東北をあたまっから外して考えるからすべて矛盾して見えてしまうんだ」

「あらおかしいわね宮田さん。あなた『魏志倭人伝』の距離は無視すべきだって言ったじゃない。なのに陸行一月だけは無視しないの？　たいへんなご都合主義だわ」

松永は静香の反論になるほどと思った。同じ過ちを犯した学者も過去に数多い。

「早乙女さん。きみは地球から月までの距離を測れるかな？」

宮田がとんちんかんなことを訊いてきた。

「測れるわけないでしょ」

「じゃあ一か月はどうだ？　カレンダーを見ないで一か月を計れるか？」

簡単なことだ。

メモ用紙にでも印を付けていけば、十日だろうが一か月だろうが正確に計れる。

静香は宮田の言わんとするところを察した。

「そうなんだ。一里、二里という距離を測るのは非常に難しいけど、水行十日陸行一月という日数なら正確に計れる。横井さんや小野田さんもジャングルで自作のカレンダーを使っていただろ。だから陸行一月の部分は信用していいんだ」

三谷は腕組みをして唸っている。

「E、FはBと同じ。無視してよし」

「Gは？」

G　『後漢書倭伝』にはなぜ、奴国が極南界にあると書かれているのか。

「うん。この部分の本当の謎は、奴国が二つ書かれていることなんだ」

宮田は『魏志倭人伝』のコピーの6番と10番を指摘した。

5番の伊都国の次に奴国がある。

また、10番で邪馬台国からずっと北（つまり南）の国々が列挙されているが、その最後の部分、狗奴国の手前に奴国が再び現れる。

これはなぜか。

奴国は二つあったのか。

「これは『魏志倭人伝』の方角が南北逆だということの証明にもなってる。なぜなら北をその

ま北と読めば奴国はそれこそ東北地方になってしまう。でも奴国は九州とほとんど判ってるんだからね」

「で、なんで奴国が二つも出てくるわけ？」

「日本列島を一周したからだ」

「日本列島を？」

「そう。いいかい。6番の奴国（九州）から北上して邪馬台国まで着いたね。これは日本海経路だ。その後、太平洋側の国々を列挙しながら、またもとの奴国に帰ってきた。つまり『魏志倭人伝』上の二つの奴国は同じ国なんだ」

「奴国が極南界にありとは？」

「10番で奴国が〈女王の境界の尽くる所なり〉と書かれているね。その後に〈その南に狗奴国あり〉と。そこからの連想なんだ」

「ふうん。Hは？」

H　倭国はなぜ会稽・東治の東にあるのか。

会稽・東治の東には台湾しかない。

なお、『魏志倭人伝』中の東治という表記は、東冶の誤記であるとする説も多い。成立年代が遅い『後漢書』で東冶と記されているからである。

三世紀の中国・朝鮮

「今まで指摘してきたように当時の中国人は日本列島を、九州を軸に南北逆に考えていたからだ」

九州を軸に日本列島を南北逆に回転させれば、倭国はまさに会稽・東治の東になる。

「Hも矛盾しないというわけね。じゃあIは？」

I　邪馬壹国（やまいちこく）が、なぜ後代の書では邪馬臺国（やまたいこく）と書き直されたのか。

現在残っている『三国志』の紹興本や紹熙本（原本）には、邪馬壹（やまいち）国と記されている。

それがいつの間にか後代の書では邪馬臺（やまたい）国と書き直されているのだ。

これはなぜか？（なお、壹は壱の、臺は台の原字である）

今までの研究者は、「書き誤りだ」で済ませているが、邪馬台国研究で著名な古田武彦氏ははっきりと「邪馬台国は邪馬壱国が正しい」と唱えている。

「これは単に台の改字」

「改字？」

「そう。当時の中国人が周辺の夷蛮国にまともな字を当てはめることはまずない。これは君も先刻承知だと思うが」

たしかに『魏志倭人伝』を見ると、卑弥呼からして卑しいという字を当てられている。

一国の女王に対してたいへん屈辱的な対応だ。しかしこれが中国人の昔からの、そして現在までも受け継がれている中華中心の思想なのだ。

「邪馬台国の邪もそうだ。奴国の奴も奴婢の奴を当てられている。その他、狗、馬、末、不、鬼、烏と、ほとんど人間扱いされてない。だいたい倭国の倭からしてひどい字だ」

「そこまでは判るけどね、宮田さん。どうして台という字を一に替えなければいけなかったわけ？」

「替えなければいけない。コピーの27番、『魏志倭人伝』の最終部分をよく見てみるんだ」

因って台（魏の朝廷）に詣り、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔、青大勾珠二枚、異文雑錦二十匹を貢す。

「台という字が出てくる。これはきみのコピーでも括弧で補足説明しているように朝廷という意味だ。そんな字を地図にも載ってないような海の向こうの蛮国に使うわけはない」

「ふうん。じゃあやっぱり本来は邪馬台国であったのを著者の陳寿が気を遣って邪馬壱国にしたっていうの？」

「そうだ。そのことに気がついた後代の人たちが再びもとの邪馬台国に戻したんだ。こればっかりは直さないと発音が違ってしまうからね」

三人の、グラスを口に運ぶ手の動きが、いつのまにか止まっている。
「Jは？　卑弥呼の鬼道とはなにか？」
「陰陽道天文学、つまり占星術だよ」
「占星術ですって」
「そうだ。たとえば当時の中国では星の動きを見て天下国家の異変、飢饉、革命などを占っていた。卑弥呼もその術に長けていたんだ」
「鬼の道が、なんで占星術なのよ」
「鬼と星は同類だからね」
「またバカなことを」
「本当だよ。これは大川誠市という源初漢字研究家も指摘してるけど、井上靖の『十一月』という詩を知ってるかい」

諸橋さんの大漢和辞典の鬼の部を引くと不思議に鬼の名と星の名が多い。鬽（ビ）　魆（ユウ）　䰨（シ）　䰴（ソク）　魓（リ）　𩴺（サイ）　䰟（ウン）　䰄（サイ）　䰭（キョウ）　𩴵（リン）　䰐（ライ）　――みんな鬼の名である。どんな鬼か知らない。鬾（キ）　䰧（ホウ）　䰡（シャク）　䰵（ヒツ）　䰗（ブ）　䰠（フ）　䰉（カン）　魒（ヒョウ）　――みんな星の名である。どんな星か知らない。鬼の名も、星の名も麻雀の牌のようにかきまぜると判らなくなる。どれが鬼の名で、どれが星の名か、撰り分けることは難しい。所詮、星と鬼とは同族なのであろう。一つは天上を窺って星になり、一つは地上にひそんで鬼となったのである。だから一年中で最も夜気の澄み渡る十一月になると、界を異にした二つの鬼たちが互いに呼び合う声が聞える。その魂のきしみが聞える。

「都の鬼を取り仕切っていたとされる平安時代の陰陽師、安倍晴明（あべのせいめい）の紋所も、星印（五芒星）だろ。『日本書紀』にも、鬼の親戚の天狗を流星とする説が載っているよ」
「あなたねえ。静香メモの22を見てみなさいよ」

名を卑弥呼（ひみこ）という。鬼道につかえ、よく衆を惑わす。

「当時の占星術は国家が管理している、政策の一環なのよ。それが、〈よく衆を惑わす〉なんて表現するわけないでしょう」
「あれは惑わすじゃない。民衆の心をぎゅっと摑んで支配するという意味だよ」
「なんでそんな勝手なことばかり言うのよ」
「摑むという字の囗の中を見てみろよ。或という字だろ。その下に心を付ければ惑という字になる。つまりこの字は、現代の惑わすという意味じゃなくて心をつかむという字なのさ」
「ほんとかしら」
「中国音韻史研究家の森博達という人がそういってるよ。つまり卑弥呼は天文占星術に長け、民衆の心をよく摑んでいたということさ」

静香は水割りを一口飲んだ。
「Kは？」
「邪馬台国よりさらに千余里海を渡った国はどこか。東北からさらに海を渡れば北海道だろう」
「じゃあ、侏儒国、裸国、黒歯国は？」
23番の箇所である。
「北海道で侏儒の国といえば、コロポックル以外ありえない」
「じゃあ、裸族と黒歯族は？『魏志倭人伝』には船行一年て書いてあるけど、船で一年も行ったら北海道どころかアメリカに着いちゃうわよ」
「じゃあ、アメリカだろう」
宮田はとぼけた答え方をした。
「裸族、黒歯族というのはインディアンだ」
宮田は再びバッグから一枚のコピー用紙を取り出した。
「これはLの回答。女王国より以北、二十一か国の所在地を記入してある」
静香と三谷はおとなしく宮田に渡されたコピー用紙を見た。

①斯馬国（紫波）
②己百支国（石巻）
③伊邪国（岩沼）
④郡支国（常葉）
⑤弥奴国（美和）
⑥好古都国（君津）
⑦不呼国（福生）
⑧姐奴国（座間）
⑨対蘇国（爪木崎）
⑩蘇奴国（下田）
⑪呼邑国（賀茂）
⑫華奴蘇奴国（金谷）
⑬鬼国（菊川）
⑭爲吾国（磐田）
⑮鬼奴国（可美）
⑯邪馬国（美山）
⑰躬臣国（楠）
⑱巴利国（名張）
⑲支惟国（紀伊半島）
⑳烏奴国（油谷）
㉑奴国（中津）

「あなたも案外この問題に賭けてるのね」
静香は皮肉を込めて言った。
宮田のコピーを見ると、ほとんどの国が太平洋側に比定されている。
当時の裏日本だろう。裏日本だからこそ『魏志倭人伝』にも、〈遠絶にして詳かにすることを得べからず〉と記されているのだ。
「Mは？」

M　日向・神武王朝のことがなぜ書かれていないのか。大倭も同じ。

邪馬台国をも含めた倭の諸国を統一してヤマト政権を樹立した九州日向の神武王朝のことが、『魏志倭人伝』では一切触れられていない。
これはなぜか。
「これは本質的な問題だから、いま説明すると長くなるので言わないが、結論だけ言うと、『魏志倭人伝』が書かれた当時、神武王朝もヤマト政権もなかったからだ」
宮田は『日本書紀』を真っ向から否定する論を吐いた。
『日本書紀』によれば神武天皇は、卑弥呼の時代はおろか紀元前六六〇年に日本を統一したことになっている。
もっともこの記述に歴史的根拠がないことは大方の学者の支持するところである。

「これで『魏志倭人伝』に関する十三の謎はすべて解決したことになる」
宮田が見得を切るような目つきで静香を見た。その目が「これにて一件落着」と言っているように松永には思えた。
「みんな東北をあたまっから外して考えていたから『魏志倭人伝』が矛盾に満ちたものに見えたんだ。素直に邪馬台国＝東北としてみれば『魏志倭人伝』の矛盾はなくなる」
三谷が深刻な顔で天井を睨んでいる。
今まで多くの学者を悩まし続けてきた『魏志倭人伝』に関する十三の謎が、邪馬台国を東北岩手と比定すればすべて解決してしまうことを知った衝撃を噛み締めているかのように。
「これで終わったと思うが」
宮田がおあいそをしようとした。
「ちょっと待って」
静香が最後の抵抗を試みるのだろうか。
「あなた、十三の謎がすべて解決したって言ってるけど、神武天皇の謎を説明してないわよ」
「最後のMかい？　これを説明するとダメ押しになるから言わないでおいたが、そうもいかないらしいな」
宮田はカシスシャーベットを注文した。
「早乙女さん。君は邪馬台国と天皇家の関係についてはどういう説を採っている？」
「邪馬台国東遷説よ」

『古事記』、『日本書紀』によれば、日本の初代天皇である神武（イワレヒコ）が即位したのは紀元前六六〇年である。

それが事実なら西暦二〇〇年代の卑弥呼の時代にも、天皇家は王として卑弥呼とは別に日本に君臨していたことになる。

が、そんなことはありえないから、神武の即位年が紀元前六六〇年という記事は誤りであるとするのが一般的な解釈だ。

そこで邪馬台国東遷説の出番となる。

現在確認されている日本最古の統一朝廷は近畿の大和朝廷であるが（邪馬台国は日本全土を支配していたのか、一部のみを支配していたのか結論が出ていない）、それは四〜五世紀に九州の邪馬台国が奈良に移り大和朝廷となって卑弥呼一族が天皇家になったとする——これが邪馬台国東遷説である。

「卑弥呼が天皇家の祖だとすると、なぜそのことが記紀に書かれていない？」

静香は答えに詰まった。

宮田の言う通り、邪馬台国が大和朝廷になったのなら、堂々と記録に残っている筈だ。

なぜ大和朝廷の記録（記紀）に邪馬台国との関連が記されていないのか？

「じゃあ、あなたは畿内豪族説なの？」

畿内豪族説とは、邪馬台国とは何の関係もない、元から畿内で勢力を伸ばしていた豪族が、そのまま大和朝廷になり天皇家になったとする説である。

これなら記紀に邪馬台国に関する記述が無くてもおかしくない。

「記紀には神武天皇（イワレヒコ）は九州から来たとはっきり書かれている。地元の豪族ではない」

「そうよね」

静香は思わず宮田に相槌を打ってしまった。

「神武天皇は九州から来た。そこが最大のポイントね。だからあたしは邪馬台国東遷説を支持してるんだけど」

「その説はまちがいだ。もし事実ならそのことが記紀に記されていなければならない」

「じゃあ、あなたは騎馬民族説？」

大和朝廷の成立過程を説明する説として、残ったのは騎馬民族征服説しかない。

騎馬民族征服説とは、一九四八年（昭和二十三）、東大教授江上波夫が「シンポジウム日本国家の起源」において初めて公開した説で、大陸から渡ってきた騎馬民族の集団が九州を征服し、さらに畿内をも制圧してヤマト政権を樹立したとするものである。

「それも違う」

「あなたならこの説を支持すると思ったけど」

「大陸からの騎馬民族が日本を征服したのなら、当然、騎馬民族の文化も大量に日本に導入されていなければならない」

「騎馬民族の文化？」

「そう。食糧としての家畜、家畜の血液の飲取、家畜への去勢技術。こういった騎馬民族の文化が、いっさい日本に入ってきていない。ゆえに騎馬民族による日本征服が無かったことは明らかだ」
「それじゃあいったい大和朝廷はどうやって成立したの？　邪馬台国東遷説、畿内豪族説、騎馬民族征服説……。そのどれもが違うんじゃ、もう考えられる説なんてないじゃない」
「あとひとつあるさ。もっとも合理的で、しかもいまだかつて誰も唱えたことのない説がね」
「そんな説があるんだったら、とっくにあたしが唱えてるわ」
「そうかな？　もしも大和朝廷が二つの国が合併してできた国だとしたら？」
「二つの国が……」
静香は絶句した。
「きみは山口百恵がどこに住んでいるか知ってるか」
「国立市よ」
静香は意外に芸能界に詳しかった。
「国分寺市と立川市の中間に作った街だから、二つの市名を合わせて国立市と名付けた。それと同じことが大和朝廷にも言える」
「ヤマトという名前は合併だっていうの？」
「そう。邪馬台国と伊都国のね」
（伊都国……）

ヤマタイとイトを合わせてヤマト。
たしかにこの二つの国が合併したのなら、新国家名をヤマトとしてもおかしくない。
しかし……。
伊都国は九州の強国だが、女王国（邪馬台国）に服属していた。
「邪馬台国と伊都国は密接な服属関係にあったはずよ。『魏志倭人伝』にも出てるでしょ。伊都国には一大率っていう女王国の役職がおかれていて周辺諸国を検察していたのよ」
「一大率は官名、役職名じゃない」
「え」
「個人名さ」
多くの学者が一大率の意味が判らず、おそらく官名だろうというのが定説になっている。
「イワレと読む」
「イワレ？　まさかあなた一大率がイワレヒコだなんて言いだすんじゃないでしょうね」
イワレヒコは日本の初代天皇、神武の本名である。
「そう考えれば辻褄が合う。イワレヒコは邪馬台国の豪族だった。邪馬台国（岩手県）周辺はもともとイワレと呼ばれていたんだろう。そこの豪族だからイワレヒコだ」
日本史の常識を根底から覆す説である。
「バカじゃないあなた。イワレヒコは奈良県の磐余の出身なのよ」
「そんなことあるもんか」

「なんでよ」
「神武天皇は九州の出身っていわれてるんだぜ」
「う」
アルコールにはあまり強くないらしい静香は、思考が混乱しはじめている。
「そ、それはね、イワレヒコが九州からやって来たから奈良に磐余（イワレ）という地名ができたのよ」
「じゃあ、イワレヒコが東北（イワレ）からやって来たから奈良に磐余（イワレ）という地名ができたという説も成り立つわけだな」
静香は沈黙した。
「そのイワレヒコが邪馬台国の検察官として伊都国に派遣された。そこで反乱を起こす」
「なぜ反乱を起こさなくちゃいけないの？」
「理由なんかどうでもいい。歴史上の多くの反乱のどれかひとつを当てはめてやれば充分だ。とにかく、ヒミコ軍とイワレヒコ軍は総力をあげて戦った。しかし決着がつかず、ついに和睦した。邪馬台国と伊都国は合併し、奈良に新首都、ヤマトを建設した」
「たいへんな想像力ね。でもそれ証明できるの？」
「証明する必要はないさ。この部分は直接邪馬台国＝岩手説とは関係ない。ただこう考えれば矛盾はなくなるというひとつの傍証にすぎない。もともと真実というものは、もっとも矛盾の少ない仮説だと定義できるんだ」
「単なる想像ね」

「でもこれ以外に大和朝廷の成立過程を説明する想像があるかい？」
静香は押し黙った。
「おあいそだ。松永さん」
カシスシャーベットを食べ終えた宮田が、煙草に火をつけながら言った。
「ひとつ訊いていいですか？」
松永がいまひとつ納得しかねるという風情で宮田に話しかける。
「ああ」
「岩手県のどこなんでしょう？　最近の論争ではただ九州、畿内というだけでは済まないと思うんです。九州のどこか。畿内のどこか。そこまで比定してくれないと」
「たしかにそうだ」
「どこです？　それを聞かないと、どうもすっきりしないんです」
「そうよ。偉そうに邪馬台国＝岩手県説を主張するからには、そこまで煮詰めてるんでしょうね」
「八幡平（はちまんたい）だ」
「え？」
「岩手県八幡平。そこがまさしく邪馬台国だった」
「証拠でもあるの？」
「判らないのか？　土地全体で〝ここが邪馬台国です〟って叫んでるじゃないか」

「どういうこと」
「八幡平という字をよく見てみるんだ」
宮田は伝票の裏に漢字で大きく八幡平と書いた。
「あ」
静香が小さく声をあげた。
「判ったようだな。八幡平という字はヤマタイとも読めるんだ」
今度は三谷と松永が揃って声をあげた。
「長い間に、本来の地名が別の読み方に変化するのはよくあることだ。八幡平がなぜ八幡平と呼ばれているのか？　それはまだ解明されてない。そして、いつごろから八幡平と呼ばれるようになったのかも判っていない。つまり、もともとはヤマタイと呼ばれていた可能性を誰も否定できない」
「でも」
「平という字は普通タイラと読む。日本平のようにね。なぜ八幡平だけタイラと読まないでタイと読むと思うんだ？」
「そうか宮田さん。そこはもともとタイ、つまりヤマタイと呼ばれていたから」
「冴えてるぞ松永さん」
宮田は千円札を数枚カウンターの上に置くと立ち上がった。
「八幡平を徹底的に掘ってみることだ。かならず卑弥呼の墓と金印は見つかる。ぼくが保証するよ。もっとも、見つからなくても費用の補償はできないから、予め保障手段を講じておく必要があるけどね」
宮田は後ろ姿で手を振りながら店を後にした。

聖徳太子は
だれですか？

「ねえ、あの壁掛けが店名の由来なの？」
静香が、松永の背後の壁に掛かった彫金を視線でさしながら訊いた。
白鳥の湖だろうか、三人のバレリーナが片脚を上げ、手をつないだ同じポーズで並んでいる。
「さあ、どうでしょうか」
この店の名は『スリーバレー』という。
「三人のバレリーナ。三位一体だな」
宮田が水割りのグラスを片手に持ったままつぶやく。
「そういえば、お三方がこの店で顔を合わせるのも今日で三回目になりますね」
「三づくしか。おもしろい」
「この間、〝三条〟という駅を通ったわよ」
「京都ですか」
「ええ。『三経義疏』の著者のことをいま調べてるの」
「『西行の偽書』……。内田康夫ですか？」
「いやねえ、聖徳太子じゃないの」
「そ、そうでした」

松永の胸に悔しい思いが広がった。
このところ松永は、静香と話を合わせるために日本史のおさらいを始めたのだ。
テキストは山川出版社の『日本史』。高校の教科書である。
歴史にさほど興味のある松永ではなかったが、読んでみると意外におもしろく、仏教や邪馬台国の研究書にも手を伸ばしたせいで、最近やっと聖徳太子の時代に入ったところなのだ。
もう少し日にちがあれば、聖徳太子に関する知識も万全だった筈なのに。
「松永さんは聖徳太子について、どんな印象を持ってる？」
松永の胸の鼓動が速まった。
茶系のワンピースに身を包んだ静香は、いつも以上に女性らしさを強調している。
「さあ、あまり詳しいことは判らないですけど、とにかく聖人ってことですね」
三谷がうなずいている。
「十人の話を一度に聞き分けられたとか、憲法十七条を作ったとか、あと、冠位十二階の制」
「けっこう知ってるじゃない」
静香はにっこりほほ笑んだ。
松永はいささか面喰らう。
こんなに愛想のいい静香は初めてだ。
「でもね、あたし京都で、その聖人のイメージを覆すような、ちょっと大胆な仮説を思いついたのよ」

「へえ。どんな仮説なんです？　知りたいですね」
松永は横目で宮田の動向を探りながら静香に話の続きを促した。
過去二回、二人の間には熾烈な歴史討論が繰り広げられた。
今日も油断はできない。
「推古天皇のことは知ってるわね？」
「ええ。日本で最初の女帝ですね」
「あたしはね、聖徳太子と推古天皇が、もしかしたら愛人関係にあったんじゃないかしらって思ったの」
二人が愛人……。
たしかに大胆な説だが、ありえないことではないと思った。
西暦五九二年に推古天皇が即位すると、とたんに聖徳太子は摂政に抜擢されている。
その後、二人の共通の後ろ盾的存在である蘇我馬子を加えた三人が、いわばトロイカ体制で日本の古代国家（飛鳥時代）を運営していった。
「ちょっと大胆だったかしら」
「いえ、」
そんなことはないと言おうとして、松永の緊張がにわかに高まった。
宮田が低い笑い声を断続的に洩らしているのである。
（また波瀾が起こる）

松永はそう直感した。
「何がおかしいの、宮田さん」
静香が戦闘モードに入った。
「いやなに。あまりにも大胆な仮説なんでね」
「あら。そんなに大胆かしら。いつものあなたの説よりよっぽど現実味があると思うけど」
「ひとりの人間が、自分自身と愛人関係に陥ることができるだろうか？」
「は？　何おっしゃってるの、あなた」
「推古天皇と聖徳太子は同一人物だと言ってるのさ。つまり、聖徳太子の正体は推古天皇だった」
一瞬、店内を沈黙が支配した。
「もしもし」
静香が白けきった表情で宮田に呼びかけた。
「推古天皇って、女性なんですけど」
松永はハッとした。
たしかに宮田は、ブッダの真の姿を看破し、邪馬台国の所在地を解き明かした。
だが、聖徳太子とは時代が違う。
ブッダは紀元前の話だし、邪馬台国は西暦二〇〇年代の話だ。
もしかしたら宮田は、聖徳太子の活躍した西暦五〇〇年代、六〇〇年代についてはあまり詳しくないのではないか？
「知ってるさ。さっき松永さんが推古天皇のことを、日本で初めての女帝だって言ったばかりじゃないか」
松永はほっとした。
「じゃあどうして聖徳太子と推古天皇が同一人物だったなんてアホなことが言えるわけ？」
次第に静香のペースが乱れはじめている。
というより、おそらくは秋の枯葉のせいで女性らしさを呼び覚まされた静香が、宮田の奇説に神経を逆撫でされ、いつものペースに戻されてしまったというところか。
「聖徳太子と蘇我馬子というのは、推古天皇のよい面と悪い面を人格化した、いわば架空の人物だからね」
聖徳太子だけでなく蘇我馬子まで……。
これにはいつも冷静な三谷教授までもが度胆を抜かれたらしく、海藻サラダのワカメを銜えたまま動きを止めてしまった。
「あなた、気はたしか？」
やっとの思いで静香が口を開く。
「出ましょうよ先生。与太話に付き合わされるなんて時間のムダだわ」
松永はギョッとした。
ここで二人に帰られたら、過去二回を凌ぐと思われる歴史検証バトルが見られなくなる。

第一、店の売上減だ。
「いや、まあ。たしかに荒唐無稽な話に聞こえるが、宮田君は根拠のない話をする男ではないよ」
「ありがとうございます」
松永はすでに神業とも思える素早さで三人の前に水割りを置いている。
どうやらお膳立ては調った。
「聞かせてくれないかね。聖徳太子が、そして蘇我馬子までが推古天皇の分身だという根拠を」
「あなた、『日本書紀』って知ってる？」
三谷の穏やかな言葉を完全に無視する形で、静香が宮田に宣戦布告の言葉を投げつけた。
「もちろん知ってるさ」
『日本書紀』は、『古事記』に並ぶ日本最古の歴史書である。
両書の概要は次の通り。

『古事記』（成立七一二年・稗田阿礼口誦・太安麻呂撰録）
日本創世から推古天皇までの国家の形成・発展の様子を記した歴史書。
アマテラスオオミカミやタケハヤスサノオノミコトなどの神話時代の比重が大きく、文体は物語性にあふれ文学的である。

なお、成立年については、日本書紀より後であるという説もあり一定していない。

『日本書紀』（成立七二〇年・舎人親王編纂）
日本創世から推古天皇を経て、さらに持統天皇の時代にまでおよぶ国家の形成・発展の様子を記した歴史書である。
推古天皇以降の歴史、特に大化の改新や壬申の乱の比重が大きく、文体は記録性にあふれ歴史的である。

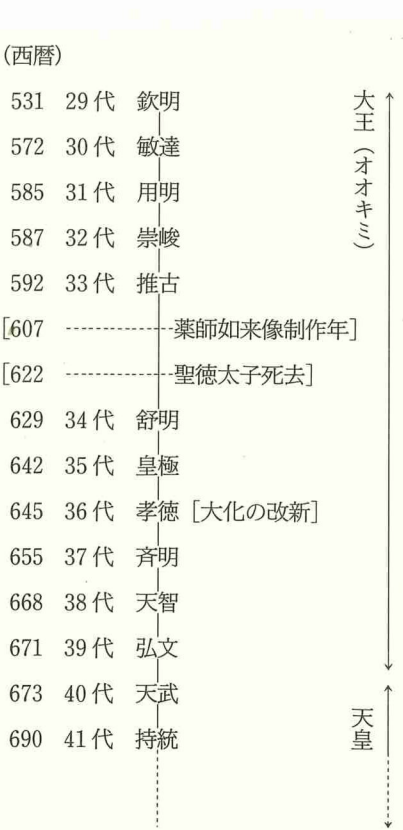
「その日本書紀にね、聖徳太子のことが何ページにもわたって記載されているのよ」
「逆にいうと、聖徳太子に関する資料は日本書紀しかないわけだ」
「なんですって」
「もし『日本書紀』が、時の権力者によって、意図的に書かれたものであるとすれば、」
「ちょっと待ってよ！」
静香の高揚感はすでにかなり高まっている。
「お言葉を返すようですけどね、聖徳太子の存在を客観的に証明する資料はいくらでもあるのよ」
「たとえば？」
静香はやにわにカウンターの上を片づけはじめた。

足下の大型のカバンを取り上げると、中の物をカウンターの上に置く。
「これは？」
「パソコンよ」
静香は勝ち誇ったように言った。
静香の愛想のよさはこれが原因だったのかと松永は思い至った。
「松永さん、延長コードある？」
「は、はい」
こういう場合、バッテリーを使うのではないかという疑問を抱きつつ、松永はなんとか延長コードを捜し出し、パソコンのアダプタにつないだ。
静香が電源を入れる。
しばらくすると画面が起ち上がり、静香がキイボードを操作しはじめた。
「出てきたわ。いい？　いくわよ。まず、聖徳太子の伝記である『上宮聖徳法王帝説』、太子の妃のひとりが作った『天寿国繡帳』、太子が伊予温泉に行ったときに建てられた『伊予温泉碑文』、法起寺の『塔露盤銘文』、法隆寺の『薬師如来座像の光背銘』、ふう、いくつまで言ったかしら？」
松永はいささか気落ちした。
これだけの数の証拠があれば、太子が太子自身として実在したことはもはや疑えないではないか。

松永はパソコンの画面を覗き込む。
「そんな資料をいくつ羅列したところで意味はない」
また宮田が静香の神経を逆撫でするような言を放つ。
「どうしてよ」
「だって、いま君が言った資料はみんな『日本書紀』を元に作られた資料だからさ」
宮田は水割りで喉を湿らせた。
「『上宮聖徳法王帝説』は『日本書紀』と同時代に書きはじめられたと言われてるだけで、正確な成立年代は判らないだろ？　『天寿国繡帳』も制作年代は判らない。『伊予温泉碑文』に至っては、風土記に引用されてるだけで現存していない。法起寺の『塔露盤銘文』も同じく現存していない。法隆寺の『薬師如来座像の光背銘』だって制作年代は特定されていない。ふう、いくつまで言ったかな？」
「『薬師如来座像の光背銘』の造立は推古十五年（六〇七）よ！」
「さあ、そいつはどうかな」
宮田の態度には余裕が感じられる。
「天皇という言葉が日本で初めて使われたのはいつだか判るかい？」
「判るわよ」
静香が人差指一本を使いキイボードをものすごい速さで叩いてゆく。
「天武天皇からよ。唐の高宗が天皇と自称したのを真似て、天武天皇の死後に諡されたのが

始まりといわれているわ」

画面には歴代の天皇が列記されている。



「『薬師如来座像』の像造記に『天皇』という言葉が使われていなかったかな」

静香の人差指のスピードが突然ゆるやかになった。

指の動きが止まったとき、画面に次の文字が浮かび上がった。

池辺大宮治天下天皇

「この天皇は用明天皇のことだろ？　推古天皇より二代前の。でも、きみの言う『薬師如来座像の光背銘』の制作年（推古天皇十五年）には、日本には天皇という言葉はなかったんだぜ。当時の統治者は大王と呼ばれていたからね。用明天皇などという名称は、『日本書紀』を作るときに命名したにすぎない。じゃあなぜ『薬師如来座像』の像造記に『天皇』という言葉が使われているのか？」

「『薬師如来座像の光背銘』の実際の制作年は、『日本書紀』以降ということだね？」

「はい。しかもなぜわざわざ制作年を偽るような細工をしたのかというと、それはたぶん、聖徳太子が実在したかのように思わせる作為だと考えるしかないでしょう」

松永は静香のために作った水割りを、どこに置こうか迷っていた。

「あなた、教科書読んだことないの？」

都合が悪くなったのか静香は違う角度から反論を試みた。

「教科書には聖徳太子の絵が載ってるでしょうが」

松永は思わずうなずいた。

真ん中に聖徳太子、両隣にその子供ぐらいの供を連れている有名な絵だ。

「聖徳太子と二王子の像か。あんなもの当てにならない」

「あなた性格悪いわね」
「聖徳太子が笏を持って立っているあの絵だろ？」
「そうよ」
「笏を持つのは大化の改新以降の風習だぜ。だったらあの絵は、太子の時代よりずっと後に描かれたものであることは明白じゃないか」
資料も見ずに静香を論破していく宮田の博学に松永は舌を巻いた。
「どんなに多くの資料があっても、それはすべて『日本書紀』を元にして作られたものなんだ。あるいは『日本書紀』制作スタッフの意向の下に、と言っても同じだけどね」
松永は静香の水割りをパソコン横の三谷の領域内に置いた。
静香も三谷も反論しないところをみると、聖徳太子に関する文献は日本書紀一点に集約されるという宮田の意見は認めたようだ。
「だとしたら、もし『日本書紀』がデタラメなら、」
静香がカウンターをどん、と叩いた。
「聖徳太子に関するすべての資料は意味をなさなくなる」
「日本でいちばん権威のある歴史書を侮辱するなんて、たとえ素人でも許さないわよ」
「国家をあげて作ったんだから権威があることは認めるけど、それが真実を伝えてるかどうかは判らないだろ？」
『日本書紀』に若干の扮飾があることは松永も知っている。

第一、アマテラスやスサノオ、ニニギといった神話まで〝歴史〟として記されているのだから……。
「『日本書紀』とは結局、現王朝の正統性を主張するために編まれた宣伝用の書物にすぎないんだ」
「証拠があって言ってるんでしょうね」
「『日本書紀』を作ったのは、いや、名目上は舎人親王かもしれないけど、総指揮を執ったのは持統天皇と藤原不比等だろ？　不比等は史を作る職にあったからそう名乗ったのだろうし」
「さあ、どうかしら」
「いや、おそらくそうだろう。先を続けてくれたまえ」
三谷が宮田に助け船を出す。
「日本の神話は天孫降臨型だとよくいわれるね？　つまりアマテラスオオミカミの孫のニニギノミコトが日本の土地に降り立って天皇家の祖になったと」
「ええ」
いちいち反論することに疲れたのか、静香は相槌を打った。
「これはつまり、持統天皇（女帝）が孫の軽皇子に跡を継がせようとしたことを正当化するものなんだ。持統＝アマテラスオオミカミ、軽皇子（文武）＝ニニギノミコトというわけさ」
松永は唸った。
だが静香と三谷は先刻承知のことなのか涼しい顔をしている。

「パソコンで、初代から四十五代までの天皇を出してくれないか。日本書紀が、持統天皇―藤原不比等コンビの創作だってことがよく判るから」

静香は得意の人差指でキイボードを叩いた。

1 神武じんむ
2 綏靖すいぜい
3 安寧あんねい
4 懿徳いとく
5 孝昭こうしょう
6 孝安こうあん
7 孝霊こうれい
8 孝元こうげん
9 開化かいか
10 崇神すじん
11 垂仁すいにん
12 景行けいこう
13 成務せいむ
14 仲哀ちゅうあい
15 応神おうじん
16 仁徳にんとく
17 履中りちゅう
18 反正はんぜい
19 允恭いんぎょう
20 安康あんこう
21 雄略ゆうりゃく
22 清寧せいねい
23 顕宗けんぞう
24 仁賢にんけん
25 武烈ぶれつ
26 継体けいたい
27 安閑あんかん
28 宣化せんか
29 欽明きんめい
30 敏達びだつ
31 用明ようめい
32 崇峻すしゅん
33 推古すいこ
34 舒明じょめい
35 皇極こうぎょく
36 孝徳こうとく
37 斉明さいめい
38 天智てんじ(中大兄皇子)
39 弘文こうぶん(大友皇子)
40 天武てんむ(大海人皇子)
41 持統じとう
42 文武もんむ(軽皇子)
43 元明げんめい
44 元正げんしょう
45 聖武しょうむ(首皇子)

「君もこの中で、十四代の仲哀天皇以前の記録と、十五代の応神天皇以降の記録とでは、史実としての信頼度に大きな差があることは認めるだろ？」

「認めるわよ。だってそれあなたの説じゃなくて津田左右吉の説だもの。定説じゃない」

正確には江戸時代の学者、山片蟠桃が『夢の代』という著書で、神代史創作説をすでに発表している。

「十五代の応神天皇以降の皇位継承は、ほとんど兄弟間で行われている。これは歴史的信頼度の高い部分だ。ところが初代から十三代までは、ただひとりの例外もなく、直系子孫（父子）継承だ。創作部分がすべて直系子孫継承だなんて、意図的じゃなくて何なんだい？」

持統天皇→文武天皇は、祖母→孫への継承である。また、元明天皇→元正天皇→聖武天皇（首皇子）も、祖母→子→孫への継承である。

「藤原不比等は聖武の外祖父だろ？　つまり、なんとしても自分の子孫を天皇位につけたいという不比等の執念の賜なんだよ、『日本書紀』は」

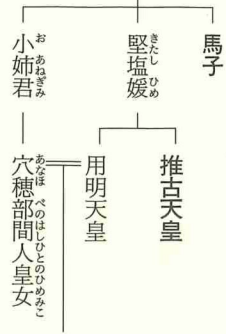
松永はあわてて焼きうどんを作りはじめた。

静香は怒りだすとやたらに食欲が湧くのを思い出したからである。

「宮田君。『日本書紀』が藤原不比等の影響下にあったことは認めよう。どの程度の影響を受けていたのかはひとまず措くとしてね。しかし、だからといって、なぜ馬子と太子が推古天皇の分身ということになるのかね？」

「まず家系です。この三人は蘇我氏という一族の、それも非常に近い親族として描かれていま

す」



「実際に近い親族だったんだからしょうがないでしょ」
「早乙女さん。藤原不比等は『日本書紀』で架空の天皇を十四人も登場させてるんだぜ。蘇我氏という架空の一族を創作することぐらいなんでもないことだっただろう」
「あなた、蘇我馬子だけじゃなくて、一族全部が創作だっていうの？」
「おそらく」
「ブラボー」
静香がゆっくりと拍手をした。
「バカもここまでくると一種の芸術品よ」

「蘇我氏の資料だって太子と同じく『日本書紀』しかないんだぜ。それに太子も推古天皇も蘇我一族だということが、やけに暗示的じゃないか」
「もしかして、あなたの言う推古天皇分身説の根拠ってそれだけ？」
「いや。次にこの三人の活動期間がぴったり一致するという点が挙げられる。ちょっと失礼」
宮田が静香のノートパソコンのキイボードを叩いた。
「あなた何をなさるの」
画面に歴代天皇、為政者の表が浮かび上がる。
「いいデータが入ってるじゃないか。これ、三省堂の日本史年表じゃないか？」
「そうよ。学生を使って打ち込ませたのよ」
「この表を見てなにか奇妙な点に気がつかないか？」
「あたしが学生に出すような質問やめてくれる」
「この当時、日本の為政者は天皇名

	天皇	摂政	大臣
29代	欽明		
30代	敏達		
31代	用明		
32代	崇峻		
33代	推古（628年死去）	聖徳太子（622年死去）	蘇我馬子（626年死去）
34代	舒明		蘇我蝦夷
35代	皇極		蘇我入鹿
36代	孝徳		
37代	斉明		
38代	天智		

だけを記しておけば用が足りた。現に三十二代の崇峻天皇までは天皇名しか入っていない」
三谷がうなずく。
「ところが推古天皇の代になって、突如として摂政などという官職名が現れて、聖徳太子が就任している」
「いいじゃない」
「大臣もそうだ。それまでは大臣・大連と分かれていたのに、推古天皇・馬子・太子登場と同時に一本化されて権限も最高に強化された」
「それで？」
「なぜ推古天皇という天皇がいるのに摂政なんていう天皇の分身のような官職が立てられたのか？」
「推古天皇が女帝だったからじゃない？」
「じゃあ摂政がいるのに、なぜ大臣という摂政と同じような権力者が生まれたのか？」
「そんな昔のこと判らないわよ」
「もう一度、表をよく見てみろよ。推古天皇―太子―蘇我馬子が同一人物だということを見事に示しているじゃないか」
「摂政はともかく、大臣は馬子の跡を蝦夷と入鹿が継いでるわよ。この二人も舒明、皇極天皇と同一人物だなんていうつもり？」
「ある意味では」

「何よ、ある意味ではって」
「舒明と皇極は架空の天皇だよ」
「なんですって」
「おそらく蝦夷と入鹿が実際の大王だったんだろう」
「あなた、『日本書紀』に載ってる天皇を架空だなんて」
「でも、舒明天皇は、『日本書紀』に比べて『古事記』での扱いが極端に少ない。系図的な記事が申し訳程度に載ってるだけだ。これは実際の事跡がなかったことを表してるんじゃないだろうか」
「そんな当てずっぽう」
「いや。たしかに『古事記』におけるそのあたりの天皇の記録には、皇室の系図的な記事だけがあって、事跡についての物語がまったくないものが多いよ」
三谷が事実を指摘した。
「でも先生。蝦夷や入鹿が天皇だったなんてムチャクチャです」
「馬子＝推古天皇だとすれば、推古天皇の子どもである蝦夷、そして蝦夷の子の入鹿が順に即位してゆくのは至極当然のことじゃないか」
「そんなこと『日本書紀』に書いてないじゃないの」
「だから、『日本書紀』は大化の改新の勝者である現天皇家、および藤原家の創作だからさ」
「そういえば」

三谷が指を舐めながら切りだした。
おそらくあさりバターの身を指でつまんで食べたのだろう。
「『日本書紀』によれば、蝦夷、入鹿の親子は、天下の民を動員して生前に自分たちの墓を造らせている。しかもその墓を大陵・小陵と呼んで、その邸をミカドと称した。また、自分たちの子女を王子とも称している」
「それ、天皇じゃなきゃできないことですよ」
「あのねえ、蘇我家が天皇家並みの権力を有していたことは認めるわよ。だからこそ大化の改新で蝦夷と入鹿は、中大兄皇子（天智天皇）と中臣鎌足（藤原鎌足）に滅ぼされたんだから。でもね、だからといって天皇そのものだってことにはならないでしょうが」
「じゃあなぜ馬子は、崇峻天皇を殺したのにお咎めなしだったんだろう？」
「う」
思い出したくない過去に触れられた年増女のように、静香は言葉を詰まらせた。
三十二代崇峻天皇は五九二年、蘇我馬子に殺害されその生涯を閉じた。
臣下に弑された天皇は日本の有史以来崇峻天皇ただひとりである。
蘇我馬子と崇峻天皇は対立関係にあったといわれるが、資料に乏しいため憶測の域を出ない。
「天皇を殺害したら、その首謀者はまず処刑されるだろ？」
「そうですよね」
松永が相槌を打った。

「なのに馬子は処刑されるどころか、崇峻天皇殺害後、突如として絶大な権力を手に入れた」
「おかしいですね。どうして処刑されなかったんでしょう？」
「答えはただひとつ。彼自身が天皇だったからさ」
宮田は水割りを呷った。
「じゃあ崇峻天皇は天皇じゃなかったんですか？」
「いや、彼も天皇だった」
宮田の言は謎めいてくる。
「当時の日本には、天皇（大王）を出す家系は複数あったんだ」
「え」
「多くの人は『日本書紀』が創りあげた万世一系という幻に見事に騙されている。天皇家が本当に一系になったのは大化の改新後、つまり天智天皇以降だろう」
「じゃあそれ以前は、戦国時代の政権争いのように、複数の家系が天皇位を争ってたんですか？」
「その通りだ」
「証拠は？」
静香が無表情に訊いた。
危ない、と松永は思った。
静香の目が据わってきている。

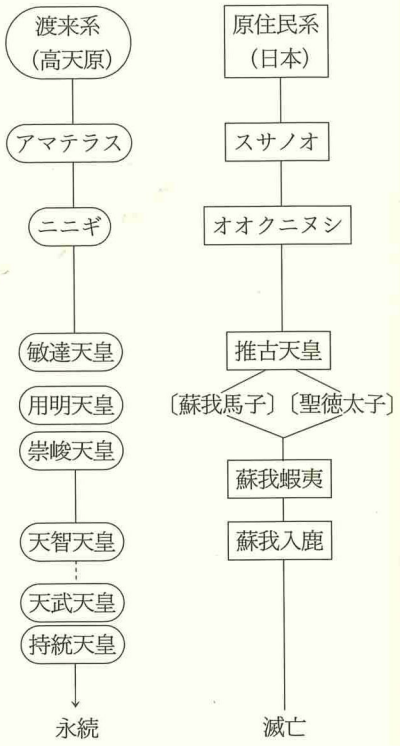
「いろいろあるけど、たとえば『宋書・倭国伝』の倭の五王の記述だ」
知っている。
このあたりは教科書で読んでいる、と松永は頭の中で確認する。
中国南朝・宋の歴史書に、倭の五王として、讃・珍・済・興・武の五人の名が見える。
讃は仁徳天皇、武は雄略天皇などと考えられている。
「この中で、讃と珍は兄弟、済と興、武は親子と明記されてるけど、珍と済の続柄はまったく記載されていない。つまり〔讃・珍〕の家系と〔済・興・武〕の家系は別々であったわけだ。決して万世一系じゃない」
静香はサラミソーセージをフォークで乱暴に突き刺した。
「つまり、馬子が崇峻天皇を殺したのは単なる権力争い（王位争い）にすぎないんだ。そして崇峻天皇崩御後に即位した推古天皇こそ、馬子にほかならない」
思わず松永は「あ」と声をあげた。
松永の頭の中では〈推古天皇＝蘇我馬子〉が見事に証明された。
「大化の改新というのはこの事件の裏返しだよ」
宮田は細長いつくねを頬張りながら言う。
「当時の日本では天智派と蘇我派という二つの王家が天皇位を争っていた」
「なによ天智派って」
「天智―天武ラインをとりあえず便宜的にそういっておこう。崇峻天皇殺しは、蘇我派によるクーデターだ。大化の改新はその逆で、天智派によるクーデターなんだ。天智派はこのクーデターで、蝦夷、入鹿という歴代天皇はおろか、その一族子孫二十五人をすべて殺してしまった」
「二十五人？　ちょっと待ってください。それってもしかしたら、蘇我入鹿による山背大兄王殺しのことじゃないですか？」
「そうだよ」
松永の問いに宮田は平然と答えた。
山背大兄王は聖徳太子の子どもである。
皇極二年（六四三）、聖徳太子の子孫二十四人ともども蘇我入鹿に殺されてしまった。王を含めると二十五人の大虐殺である。
原因は、山背大兄王が、次期王位に古人大兄皇子を推す入鹿の障害になったためと考えられている。
この入鹿の横暴に、ついに中大兄皇子（天智天皇）と中臣鎌足（藤原鎌足）が立ち上がり、六四五年、宮中で入鹿を殺した。
「山背大兄王を殺したのは蘇我入鹿ですよ。天智派じゃなくて」
「松永さん。その知識は『日本書紀』によるものだろ？『日本書紀』は天智派が作ったものだから、どうとでも書けるじゃないか」
「まあそうでしょうけど」

「だいたい入鹿も山背大兄王も同じ蘇我一族だぜ。なぜ殺し合わなきゃならないんだ」
「それは、自分の思惑の障害になったと、」
「でも、太子の子孫二十五人皆殺しというのはおかしい。それはすなわち蘇我氏絶滅と同じ意味だ。自己矛盾してるよ」
その疑問は松永も抱いていた。
まだ皇極天皇が健在なうちから、次期王位をめぐる殺害というのも釈然としない。
「蘇我氏絶滅を望んでいたのは、天智派しかありえないじゃないか」
言われてみれば当たり前のことである。
「つまり大化の改新とは、天皇（大王）であった蘇我入鹿を、中大兄皇子・中臣鎌足が武力で倒して自分たちが王位についた事件にすぎない。徳川家が豊臣家を滅ぼしたようなもんさ。しかも本命の入鹿を殺害するにとどまらず、山背大兄王以下太子の子孫全員、すなわち蘇我一族を抹殺してしまった。かくして天智天皇を始祖とする一系の歴史が始まったわけだ」
宮田のグラスはすでに空になっているが、珍しく松永はお代わりを作るのを忘れている。
「天智派は、自分たちで山背大兄王以下を殺害しておきながら、それを入鹿のせいにしてしまったのさ」
「証拠は？」
「もし本当に入鹿が山背大兄王を殺したのなら、これは蘇我家の内輪揉めにすぎないから放っておけばいい。あるいは〝天皇〟として臣下の狼藉を罰すればいい。なにも天智天皇みずから

入鹿を倒さなくてもいいんだ。天智天皇みずからが動いたということは、これは山背大兄王殺害への処罰ではなく、武力クーデターであることを意味する」
いつもはまなじりを決して反論する静香も、今回ばかりはその余地がないのか宮田の説をおとなしく聞いている。
「ついでにいえば、入鹿が〝宮中〟で殺されたというのも彼が天皇だった証拠だよ」
松永はようやく宮田のグラスが空になっていることに気づいた。
「思えば、われわれが当時の日本を知る資料として『日本書紀』、つまり勝者の記録しか持っていないということは非常に残念なことだ」
「利いた風な口を叩くんじゃないわよ」
静香の眼が妖しく光った。
「もっとも、正しい推理さえ働かせれば、『日本書紀』というたったひとつの、しかも歪められた資料からでも真実を浮かび上がらせることは可能だけどね」
「あなたまだあたしが紹介してあげた病院に行ってなかったのね」
静香の毒舌は健在だった。
ということは、宮田の仮説を打ち砕く切札をまだ握っているのかもしれない。
「宮田さん。『日本書紀』から浮かび上がる真実って何です？」
松永は宮田にお代わりを出しながら訊いた。
「うん。それはね、日本には二つの王家があったということなんだ」

「あなたそれさっきも言ったわよ」
「ああ。天智派と蘇我派だろ。でも天智派が渡来人で、蘇我派が原住民であることまでは言ってない」
静香は一瞬おどろいた表情を見せ、その後で肩をすくめた。
「宮田さん。天皇家が渡来人だったという話はよく聞きますけど、根拠は何なんです？」
「簡単にいえば神話だね」
「神話……」
静香があきらめたように首を横に振っている。
「渡来人の主流は、朝鮮半島最南端の伽耶（加羅・別名任那）という小国からやって来た、という説が有力だ。当時、朝鮮南部と九州北部は同じ文化圏にあったからね」
「あなたの言い方ってなんでそんなに断定的なの？」
「そんなの地図を見れば一目瞭然じゃないか。九州と朝鮮は、九州と大和よりはるかに近いよ。それに、北九州と南朝鮮の支石墓が同系統であることからも、両者が同一文化圏であったことは明白だ」
「それで？」
「この朝鮮南部の伽耶の建国神話が、やっぱり天孫降臨型なんだ。しかも神の子の証として三種の宝器を持っている」
「なるほど。日本の三種の神器ですね。伽耶からの渡来人が自分たちの神話をそのまま日本に

持ち込んだ可能性は大きいですね」
「そうなんだ。ところで、日本神話の神々も、渡来系と原住民系に分かれることを知ってるかい？」
「なんとなく想像はつきますね。天孫降臨というぐらいだからアマテラスとその孫のニニギは渡来系でしょう？」
「その通りだ。これに対してスサノオとその子孫のオオクニヌシは原住民系といえる。そして渡来系（アマテラス）の子孫に天智天皇が、原住民系の子孫に蘇我一族がいることになる。この両系統の間に多少の姻戚関係があるものの、クーデターなどの有事には無視されるのだから、まったく別系統と考えて差し支えないと思う」
明快な宮田の理論に、松永は深くうなずいた。
「もしもし」
静香が冷めた表情で宮田に声をかけた。
「蘇我氏って、渡来系なんですけど」
三谷が困ったように顔を伏せた。
宮田の明らかなミスに困惑している風情だ。
「なんで？」
「バカじゃないあんた。定説よ」
「『日本書紀』を元にした、だろ」



「『日本書紀』だろうが何だろうが事実は事実なのよ！」
静香がノートパソコンのキイボードに向かった。
人差指がうなる。
「ごらんなさい。蘇我氏の系譜よ」

武内宿禰（たけうちのすくね）
蘇我石川（そがのいしかわ）
満智（まち）
韓子（からこ）
高麗（こま）
稲目（いなめ）
馬子（うまこ）
蝦夷（えみし）
入鹿（いるか）

「どう？　韓子や高麗なんて、どう考えたって渡来系の名前じゃないの」
「そんなの『日本書紀』の作者がいい加減につけた名前だよ」
「あんたその場にいたのかよ」
静香のあまりの口汚さに松永はギョッとした。
だが、彼女の美貌はその乱暴な言葉さえ妖しい魅力で包んでしまう。
「きみはサザエさんの苗字を知ってるか？」
「磯野（いその）じゃないの」
「ちがう。サザエさんはマスオさんの奥さんだから苗字はフグ田だよ」
「何をくだらないこと言ってんのよ。磯野だろうがフグ田だろうがそれがどうしたっていうのよ」
「いや、サザエさんの登場人物たちはやけに安直な名付けられ方をしたなあと思ってね。カツオ、ワカメ、タラちゃん、」
「だからそれが何なの」

「蘇我一族にも同じことがいえる。仮にも一国の大王を張った人物たちが、馬子、蝦夷、入鹿とはあまりにも安直だ」
「本名じゃないっていうの？」
「もちろん本名じゃありえない。韓子や高麗だって同じさ」
「証拠でもあるのかしら」
「だいたい韓子というのは人の名前ではない。倭・韓の混血児を表す普通名詞だよ。高麗にしたって地名じゃないか」
「たしかに本名ではないかもしれないわ。でもね、渡来人だったからこそ、それ風の名前をつけたのよ」
「いや、ちがう」
宮田は口の中の豆腐を呑み込むまで少し間をおいた。
「彼らの名が朝鮮風なのは、蘇我氏がもともと朝鮮に対する外交を担っていたことに由来する。蘇我氏は宮廷の倉の管理をして伸し上がった一族だ。その倉には朝鮮半島からの貢納も数多く集積されていた。そういうことから彼らは朝鮮半島に顔が利くようになったんだ。韓子や高麗という名はそのことの反映だよ。ぼくがさっき蘇我氏一族が架空の存在といったのもそういう意味なんだ。実態は天皇家なのにすべての名前を隠され抹殺されている」
静香がピスタチオの殻を握り潰した。
「宮田君。たしかに蘇我氏の実態は『日本書紀』によって多少ゆがめられてはいるかもしれな

い。でもそれは蘇我氏が、君の言う〝渡来系〟か〝原住民系〟かということとは別問題じゃないのかね？」

「いえ。そうではありません。問題はなぜ歪められなければならなかったのか、なんです。それは彼らが原住民系の王家だったから、ということでしょう」

「なるほど」

「それに、スサノオのスサはスカに通じます。スカはソカと同義ですから、スサノオは〝蘇我（ソガ）の男（神）〟を意味すると考えられます」

「スサノオが、蘇我氏の象徴だというのかね」

「ええ。つまり、乱暴を働いたためにアマテラスによって高天原（たかまがはら）を追放されたスサノオの神話というのは、やりたい放題をやっていた蘇我蝦夷・入鹿（スサノオ）が、持統・天智（アマテラス）によって王権を剝奪されたことを表しているんですよ」

松永は唸った。

スサノオ神話が大化の改新を表していたとは……。

「松永さん。『天皇記』と『国記』という歴史書を知ってるかい？」

「あら、あなたこそド素人のくせによく知ってるわね」

静香が口を出した。

「それぐらい高校生でも知ってるさ。これは『日本書紀』、『古事記』の元になったといわれてる歴史書なんだ」

「え、『古事記』と『日本書紀』が最古じゃないんですか？」

「『天皇記』『国記』以前にも『帝記』『旧辞』という歴史書があるよ。現存していないだけだ。焚書（ふんしょ）の刑にあったからね」

静香が何か言いたげに口を開けた瞬間、宮田は言葉を継いだ。

「この『天皇記』『国記』は聖徳太子と蘇我馬子が編集したとされている。つまり、少なくとも『国記』の方は、蘇我家が天智天皇・藤原鎌足に滅ぼされる前の歴史、すなわち敗者から見た日本史が記されていた可能性が強い」

「なんで『国記』の方だけなのよ」

「それは、『天皇記』―『国記』という組み合わせが、文字通り天（アメ）―国（クニ）、つまり渡来人と原住民を表しているからさ」

宮田が静香のパソコンを操作した。

「ごらん。『日本書紀』の皇極天皇の項だ」

この項には大化の改新の詳細が語られている。

十三日、蘇我臣蝦夷らは殺される前に、すべての天皇記・国記・珍宝を焼いた。船史恵尺（ふねのふびとえさか）はそのとき素早く、焼かれる国記を取り出して中大兄にたてまつった。

「あれ、『国記』は焼かれてないんですか？」

「いや、中大兄皇子によって焼かれただろう。この一文は、もともと蘇我家は『国記』だけを所持していたという事実を暗示してるんだ」
「そうか。原住民系の歴史書ですね」
宮田はうなずいた。
「以上のことから、天智・天武天皇ラインは渡来系で、蘇我一族は原住民系であることは納得してもらえたと思う」
宮田に会うまでは歴史にそれほど興味のある松永ではなかったが、宮田の話はおもしろいと思った。
宮田は『日本書紀』の信憑性を粉砕し、聖徳太子の実在を証明する資料は何もないのだということを暴いた。
のみならず、崇峻天皇を殺害した蘇我馬子こそ推古天皇にほかならないことも証明してみせた。
また、蘇我家という原住民系の王家が、大化の改新によって滅ぼされたということも。
宮田の手に掛かると、松永のような素人にも歴史は俄然おもしろいものになる。
(宮田さんは〝歴史エンターテイナー〟と呼べるかもしれない)
松永はそんなことを思った。
「『日本書紀』の推古天皇の項では、推古天皇本人よりも聖徳太子に重点がおかれている。これはおかしいと思ったのがそもそもの始まりだった」

「あなたねえ、事件を解決した後の名探偵みたいなセリフはやめてくれる？　まだぜんぜん解決してないんだから」
宮田は苦笑した。
「宮田さん。宮田さんは推古天皇が実在の人物で、聖徳太子と蘇我馬子はその分身とお考えのようですけどね、逆は考えられないんですか？」
「逆？」
「ええ。つまり聖徳太子、あるいは蘇我馬子の方が実在の人物で、推古天皇がその分身であるという」
「それはない」
宮田は即座に否定した。
「推古天皇が架空であるならば、なにも日本で初めての女帝などとしなくてもいい。そのまま男性の天皇として目立たないように想定しておけばいいんだ」
「でも、女帝である持統天皇の存在を正当化するために推古天皇を女帝とした、ということは考えられませんか？」
「なかなかいい所を衝くね。でもね、松永さん。持統天皇の前にすでに皇極天皇という女帝が記載されている。前例は既に創りあげられているんだ。推古天皇が女帝と記されているのは、やっぱり本当に女性だったからだよ」
「じゃあなぜその分身は男性なのかしら」

「摂政や大臣が女性だったらおかしいだろ」
「蘇我馬子が女性だとしたら、崇峻天皇を殺すなんて過激なことをするかしらね」
「君が女帝になったところを想像すれば充分ありうる」
「なんですって」
「西太后のように女傑はいくらでもいる。それに実行犯は東漢駒という男性じゃないか」
「じゃああなたは推古天皇はあくまで女性だったと言い張るのね」
「ああ」
「そして聖徳太子と蘇我馬子は推古天皇にほかならないと」
「ああ」
「つまり太子も馬子もその実体は女性だということね？」
「そうだ」
静香は額にかかった髪をさらりとかきあげた。
「かかったわね、罠に」
静香がゾクッとするような笑みを洩らした。
「聖徳太子は実在したのよ。もちろん男性としてね」
静香の人差指がゆっくりと動きはじめる。
「たしかに『日本書紀』を百パーセント信用するのは危険かもしれないわね。でもね、お隣の中国が記録を残してくれているのよ！」

人差指がうなる。
遠くで雷鳴が聞こえる。
画面に電光文字が浮かび上がる。

『隋書』倭国伝
大業三年（六〇七）、その王多利思比孤、使を遣わして朝貢す。使者曰く、「聞く、海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと。故に遣わして朝拝し、兼ねて沙門数十人をして来って仏法を学ばしむ」と。その国書に曰く、「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。つつがなきや、云々」と。

宮田が画面を覗き込む。
「それ、遣隋使のことだろ？」
「そうよ。西暦六〇七年に聖徳太子が小野妹子を派遣したのよ」
「ちょっと待った。どうして聖徳太子なんだい」
「六〇七年にそんなことができるのは太子しかいないでしょうが！」
「だって、『隋書』倭国伝には聖徳太子（あるいは厩戸皇子）なんて言葉はどこにも書いてないじゃないか。多利思比孤という倭王が遣わしたと書いてあるだけだぜ」
「だからそれが聖徳太子なのよ」

「なんで？」
「わからない人ね。六〇七年にそんなことができるのは太子しかいないって言ってるでしょ」
「ほう。じゃ君は太子が倭王であったことは認めたわけだ」
「中国がそう思ってただけよ。いずれにしても比孤（彦）という男性を表す美称が使われている以上、この人物が男性であったことはまちがいないわ。そして六〇七年にそれだけの権力を持っていた男性といえば、太子しかいないじゃないの」
「君は騙されてるよ」
「騙されてる？　だれに？」
「藤原不比等にさ。『日本書紀』が信用できないって何度いったら判るんだい？」
「文献は『日本書紀』じゃなくて『隋書』倭国伝よ。それまで信用できないなんて言いだしたら、へたすると国際問題になりかねないわよ」
「大げさだな」
宮田は水割りを一気に飲み乾し、松永にお代わりを催促した。
「もちろんぼくだって『隋書』倭国伝の記述は信用してるさ。ウソをつく必要はまったくないからね」
倭国伝によれば六〇七年以前の六〇〇年にも、阿毎多利思比孤という倭王が使を遣わしている。
「問題は『日本書紀』の方なんだよ」

松永は宮田の言おうとしていることがまだよく判らなかった。
「三谷先生。『日本書紀』に記されている年代は、信用できるものなんでしょうか？」
突然指名されて、三谷はまだ充分に味わっていない好物の蟹みそを思わず呑み込んでしまった。
「いや、それはだね、残念ながら日本書紀の年代表記はあまり当てにはならない」
静香の顔がみるみる不機嫌になっていく。
「たとえば細かいところでは継体天皇の没年」
宮田が満足げにうなずく。
「『日本書紀』では西暦五三一年と記されているのに、『古事記』では五二七年となってる」
「はあ」
「しかも継体天皇崩御後、次の安閑天皇が即位したのが五三四年。つまり『日本書紀』の年代を信じると、天皇がいなかった期間が三年間生じてしまう」
「なるほど。あまり信用できる記録ではなさそうですね」
「でも、三年、四年なんて、許容できる誤差じゃないかしら」
「しかし崇神天皇の没年にいたっては、三一八年説と二五八年説とがあって、その誤差は六十年になる」
「六十年……」
「そんなのはまだいい方でしょう」

水割りのお代わりを手にすると、宮田の声に張りが出てきた。
「応神天皇の項に、百済の木羅斤資の子の木満致という人物が出てくるけど、この人物は朝鮮の史書『三国史記』に出てくる木劦満致と同一人物とされている。しかしその年代は、『日本書紀』では二九四年、『三国史記』では四七五年となっている。実に百八十年近い開きがあるわけだ」
「百八十年！」
「これは干支三運といって当時の単位だよ。干支一運は十二年の五倍の六十年。『日本書紀』は実際の出来事を干支何運か繰り上げて記録していることが多いんだ」
「そうなんですか」
「ああ。おそらく初代の神武天皇をあまりにも古い時代に設定してしまったことによる辻褄合わせだろうね」
水割りを一口飲む。
「そこで遣隋使だけど、遣隋使が派遣された六〇〇年、六〇七年には、推古天皇（聖徳太子／蘇我馬子）は即位していなかった」
「なんですって」
「記述されている年代はずれている可能性が強いから、推古天皇が実際に即位したのは六〇七年より後、遣隋使が終わってからだろう」
「あなた、またそんな勝手なことを」

「でもそう考えれば、今まで古代史の謎とされてきた阿毎多利思比孤の矛盾がすっきり説明できる」
推古天皇は女性なのになぜ比孤（彦）と呼ばれたのか？
またその比孤が実は聖徳太子であった場合、なぜ倭王（阿輩雞弥）と呼ばれたのか？
『隋書』倭国伝の阿毎多利思比孤が推古天皇でも聖徳太子でもなく、だれか別の男性天皇であれば何の問題もないわけだ。
「だいたい〈日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す、つつがなきや〉なんて強気な言葉、あの穏和とされる聖徳太子のイメージとはぜんぜん合わないじゃないか」
「多利思比孤が聖徳太子じゃないとしたら、誰なのよ」
「多利思比孤という名前は『日本書紀』にも『古事記』にも一切出てこない。つまり抹殺された。ということはすなわち原住民系の大王であるから、推古天皇の親（もしくは祖父）の蘇我稲目と記されている人物だろうね」
宮田は事もなげに言う。
「原住民系であるからこそ、小野妹子は隋の煬帝から授かった国書を失くしてしまった」
「え？」
小野妹子は六〇七年、遣隋使として隋の煬帝に謁見したが、その帰り、煬帝から授かった国書を紛失してしまったのである。
「その国書には当然、蘇我稲目の本名、つまり阿毎多利思比孤の名が明記されていただろう。

持統・藤原不比等にとってはこれはまずいことだから、〝紛失〟ということにして焼いてしまったのさ」

松永自身も抱いていた疑問がこれで氷解した。

当時の感覚なら、隋の皇帝から授かった国書を紛失すれば、死罪は免れないのではないだろうか。

ところが小野妹子は死罪どころか、その後も留学生や学問僧を伴って隋に渡っているのである。

これはすなわち、国書を紛失したという事実は無かったということなのだ。

「古代史の謎のひとつに〝聖徳太子はなぜ天皇になれなかったのか〟というのがあるね？」

「ええ。皇太子なのになぜ天皇になれなかったのか」

「そうだ。ちなみに古代では大王は太陽（日）になぞらえられていた。皇太子は日を継ぐ者だから日継ぎというわけだ。ま、それはそれとして、天皇になれなかったことこそ、すでに天皇だったことの最大の逆証明だよ」

宮田はカシスシャーベットを注文した。

すでにおあいそが近づいていることを松永は感じた。

「だいたい聖徳太子の母親（穴穂部間人皇女）や子ども（山背大兄王）の生年さえ判っていないなんて不自然だよ」

「あなたの独説を誰が信じるかしら」

「たしかに推古天皇分身説はぼくの独説だ。大化以前の天皇家を渡来系と原住民系に分けたのもぼくの発案だ。さらに、小野妹子が国書を紛失した理由についてもぼくは独自の説を提示した」

松永がうなずく。

「でもね、聖徳太子が架空の人物であること、蘇我家が大王家であったことはすでに石渡信一郎という研究者が指摘している。蘇我一族が渡来人ではなかったことについては遠山美都男という学者が示唆している。『日本書紀』が藤原不比等の創作であることは上山春平という人が明らかにした通りだ」

「それで自分の説に箔をつけたつもり？」

静香は不屈の笑みを洩らした。

「あなたの説にはいちばん大きなものが欠けているのよ」

「いちばん大きなもの？」

「『日本書紀』の作者（藤原不比等と認めたわけじゃないわよ）は、どうしてそんなことをしなくちゃならなかったのか、ということよ」

静香は「カ」と言いかけて、「メロンシャーベット」と注文しなおした。

「つまりね、推古天皇は推古天皇でいいじゃない。なぜわざわざ聖徳太子や蘇我馬子なんて分身を作らなきゃいけないわけ？」

「推古天皇、つまり蘇我一族は大化の改新で絶滅したんだぜ」

「だったらそのまま書けばいいじゃない。推古天皇の家系は絶滅したって」
「そうすると、天皇家は万世一系という『日本書紀』が創りあげようとした前提が崩れてしまう」
松永は心の中で今日二度目の「あ」という声をあげた。
「藤原不比等が目論んだのは、持統―文武天皇ラインの強化と、万世一系の天皇家という絶対的な権威の確立だった。だから、本来はライバルだった原住民系（おそらくはヤマト国家の原型）をも自分たちの系譜の中に取り入れてしまったんだ。ということは、推古天皇の一族（蘇我一族）は絶滅してはいけないんだ。絶滅するのはあくまで聖徳太子の一族でなければならない」
万世一系という名目を守るため、聖徳太子という架空の人物を創りあげたというわけか。それも絶滅用に。
「宮田さん、じゃあ、蘇我馬子は？」
「太子一族を絶滅させた犯人が必要だろ。直接の犯人は入鹿だけど、入鹿にも系譜は必要だ。蘇我家は犯人の家系として創造されたんだ。太子一族絶滅と、蝦夷、入鹿殺害とは、同じ事件なんだよ。表と裏にすぎない」
松永は納得した。
「でも、それだったら、もっとひっそりと記すんじゃなくって？　太子をあんな聖人に書く必要なんてないんじゃないかしら」

「太子を聖人化すればするほど、自分たちが入鹿を殺す大義名分が確立されるというわけさ」
宮田はカシスシャーベットを食べ終わった。
「聖徳太子の子どもに馬屋古女王という人がいる。もしかしたらこの馬屋古女王というのが推古天皇の本名かもしれないね。推古天皇の分身である聖徳太子（厩戸皇子）と蘇我馬子というのは、この本名からの連想だ。ぼくはそんな気がする」
見ようと思えば誰にでも見えることを指摘する宮田のいつもの論法に、松永は感心した。
だが――。
「でも、でもですよ。いくら権力者だからといって、ひとつの大王家を滅亡させてしまったという事実を、歴史から葬り去るなんてことが許されるんでしょうかね？」
「それは、当人たちも恐れただろうね。当時は〝祟り〟が政治レベルでも信じられていたんだから。だからこそ、『日本書紀』の記述から真実を読み取ってくれ、という思いがあったに違いない」
「は？　何のことです？」
「推古天皇の名前だよ」
「名前？」
「古（いにしえ）を推しはかれ、という意味じゃないのかな、これは」
宮田は残った水割りを飲み乾した。

謀叛の動機は
なんですか?

ドアが開いて寒風とともに静香が現れた。
後から三谷教授も続く。
二人はコートを松永に預ける。
カウンターには宮田が坐って水割りを飲んでいる。
「この店は静かでいいわ」
めずらしく静香がほめ言葉を口にした。
「あたしは名前の通り静かなものが好きなの。街の喧噪は嫌いよ」
松永は静香と三谷に水割りを差し出す。
「あら、あたしワインがほしかったのに」
松永はギクリとした。
「まだ入れてないの?」
「すみません」
静香はあきらめたのか水割りを手にした。
「残虐でやりきれない事件が多発してるっていうのに、よく浮かれていられるわよね」
松永は一瞬、自分のことを言われたのかと思ったが、おそらく静香は、このところ続いて起

きている弱年者に対する殺人事件と、それを気にしないかのような街のにぎわいのことを言っているのだろう。

「なんだか世の中がどんどん悪くなっていくような気がするわ」

「いえてますね」

松永は同意した。

物質が豊かになった分、人の心は貧しくなってしまったのではないだろうか？

「世の中はどんどんよくなってる」

お通しの酢ダコに伸びようとしていた静香の割箸が、彼女の手の中でパキンと折れた。

「たしかに科学の発達は環境汚染をもたらした。物質的な面をいえば世の中は悪くなってるだろう。でも、逆に人の心は、昔と比べてよくなってると思う」

「始まったわね、あなたのアホ理論が」

静香は、宮田独特の考え方に〝アホ理論〟という名前をつけたようだ。

「ローマ帝国の皇帝だったネロはキリスト教徒を大虐殺している。日本だって、たとえば織田信長あたりは一向宗信徒を大虐殺してる。織田信長は今でいえば総理大臣だろ？　現代では少なくとも総理大臣が大虐殺をするようなことはなくなった」

突飛といえば突飛、当然といえば当然の宮田の考え方に静香は反論の緒を摑めないでいた。

「そういえば、」

松永が助け船を出そうとする。

「このあいだ信長についておもしろい記事を読みました」

場の雰囲気を和らげようとしたのだが、もしかしたら新たな火種を提供しようとしているのかもしれないと松永は気がついた。

だが、今さらやめるわけにはいかない。

「本能寺の変の真相についてなんです」

「本能寺の変？」

めずらしく宮田が積極的に反応した。

「ええ」

本能寺の変とは、日本統一を目前に控えた織田信長が、京都の本能寺に宿泊中、家臣の明智光秀に襲われ非業の最期を遂げた事件である。

光秀がその後、山崎・天王山において羽柴秀吉に敗れ、実質十一日天下に終わったことは周知の通りだ。

光秀の謀叛の動機は何だったのか昔からいろいろと取沙汰されている。

曰く、人質となっていた光秀の伯母が殺されたことを恨んで。

曰く、家康饗応の際の失態を責められて。

曰く、秀吉ばかり優遇されたことへの不満、などなど。

だが、これだといえる定説はまだない。

「その記事によりますとね、光秀謀叛の黒幕は秀吉だというんです」

このところ日本史を猛勉強している松永は、そう言って静香の反応を窺った。
だが、静香の表情には何の変化もあらわれない。
松永は少々がっかりした。
「悪いけどその説はただの戯言よ。なんで秀吉が光秀に謀叛を勧めなきゃならないわけ？」
「それは、光秀をそそのかして自分が天下を取ろうと、」
「だったら光秀に頼まないで自分でやればいいじゃない」
「安全策のつもりだったのではないか、と」
「光秀が天下を取ったら、その光秀を倒せる保証はどこにもないのよ。それにもし光秀が捕らえられて自分のことを喋ったら、秀吉には命取りじゃない」
「はあ」
「そんな危険すぎることを秀吉が光秀に頼むわけがないし、そもそも二人は鎬を削るライバル日本史関係にあったんだから、相談事なんてする筈がないわ」
松永はいたたまれない気持ちになって宮田に視線を向けた。
宮田なら突飛な説にも理解を示してくれる筈だ。
「早乙女さんの言う通りだ」
「え」
「秀吉が黒幕なんてことはありえない」
「あら。あなたもたまにはまともな思考が働くことがあるのね。いつもはあたしの説に反対するしか能がないくせに」
「君の説だから反対してるわけじゃないぜ。まちがった説だから反対してるだけだ」
「なんですって」
「たとえ君の説でも、正しい説であれば諸手をあげて賛成するよ」
「そのセリフ、そっくりそのままあんたに返すわよ」
静香の透き通るような肌が怒りのために瞬時に上気した。
場の雰囲気を和めようとした松永の意図は正反対の結果をもたらしたわけである。
「聞かしてもらいましょうか、あなたが考えている〝正しい説〟とやらを」
今日の静香は最初から沸騰している。
「信長は自殺だった」
「は？」
「それがぼくの答えだ」
「ばかじゃない。あなたがいま言ったことはね、日本は島国だったっていうのと同じじゃない。信長は光秀に襲われたあと自害してるんだから」
「ぼくが言ったのはそういう意味での自殺ではない」
「じゃあどういう意味よ」
「信長は、光秀を使って自殺したのさ」
「はあ？　言ってることがよく判らないわね」

「つまりね、なぜ光秀が信長を襲ったのかって昔からいろいろ推理されてるけど、それは信長に頼まれたからなんだよ」
「信長に頼まれたですって」
「つまり信長は自殺だったってことさ」
信長が自殺……。
光秀が信長を襲ったのは信長の意図だったというのか。
「社会学者のエミール・デュルケムが自殺を次のように定義している。『当の受難者自身によってなされた積極的・消極的行為から直接・間接に生じる一切の死を、自殺と名付ける』。
信長は光秀に委託して間接的な死を選んだけど、この定義によればこれも立派な自殺だろ？」
「あなたのバカもとうとう頂点に達したわね。自殺なんてあの信長がするわけないでしょ。仮にやったとしても自分で腹を切れば済むことじゃない。なんでわざわざ光秀に頼まなきゃいけないのよ」
「ただの自殺じゃ自分が弱虫になってしまうからね」
「何それ」
「合戦に敗れた末の切腹だったらまだ名誉の死といえる。賤ヶ岳の合戦で秀吉に敗れた柴田勝家が『後々の切腹の手本にせよ』って大見得を切って自決してるぐらいだからね。でも天下を狙おうという武将が、芥川龍之介のように『ただぼんやりした不安』のために自殺したんじゃ、恰好がつかないんじゃないだろうか」
「本気なの？　あなた本気で『光秀は信長自身に頼まれて信長を襲った』なんて考えてるの？」
「その通りだ」
またまた大変なことになってきた。
「これを見てほしい」
宮田は足下からノートパソコンを取り出してカウンターの上に広げた。
「マネしたのね」
「前から持ってるよ。ただ、ホームページを起ち上げたから見てもらおうと思って」
「なんですって」
宮田がキイボードを操作すると『宮田六郎の歴史エンターテインメント館へようこそ』というタイトルが浮かび上がった。
「あなたってヒマだけは誰もかなわないほどあるみたいね」
「まず、信長の経歴から見ておこうか」
ディスプレイの表示が略年譜に切り替わる。

天文3（一五三四）1歳　信長生まれる。
天文20（一五五一）18歳　父信秀没。信長家督を継ぐ。

永禄3（一五六〇）27歳　桶狭間の戦い。今川義元を破る。
永禄11（一五六八）35歳　足利義昭を将軍にかつぐ。
元亀1（一五七〇）37歳　姉川の合戦。朝倉義景・浅井長政を破る。
天正3（一五七五）42歳　長篠の合戦。武田勝頼を破る。
天正8（一五八〇）47歳　本願寺陥落。
天正10（一五八二）49歳　本能寺の変。明智光秀に襲われ自決。

「あなたの簡単すぎて用をなさないページからでも、信長が三つの大きな戦に連戦連勝したってことだけは判るわね。そんな破竹の勢いにあった信長が、なんで自殺なんかしようと思うわけ？　動機がないじゃない」
「動機はある。ただし君はひとつ誤解してる」
「何よ」
「自殺には明快な動機が存在するという前提で君は話してるみたいだけど、一般的にいって自殺の動機を特定することはむずかしいんだ」
「そんなことないわよ。汚職事件が起きたときなんか、よく関係者が自殺するじゃない。原因はハッキリしてると思うわ」
「原因のハッキリした自殺は数からいえば少数派だ。割合にして一割にも満たない。多くは芥川タイプの自殺だよ」

「芥川はノイローゼだったのよ」
「その通り。自殺の九割以上は何らかの精神科診断に当てはまるんだ」
「じゃああなた、信長も精神を病んでいたというの？」
「もちろんさ」
宮田は平然と言い放った。
「しかし宮田君。精神を病んでいるからといって、それが即自殺に結びつくとは限らないんじゃないのかね？」
三谷はそう言ってからチーズはんぺんを頼んだ。
「そうですね。ただ、自殺の危険因子ともいうべき内的要素が五つありましてね。信長の場合、そのすべてに当てはまってしまうんです」
「ほう。たとえば？」
「まず第一が性別ですね」
「性別？」
「ええ。一般的にいって女性より男性の方が自殺率が高いんです。欧米では四対一の割合で男性の方が多く自殺しています。日本ではその差は縮まりますが、信長が男だったということは一つの要素です」
「あーらたいへんおもしろい説ですこと。あと何年かで世界中の男性はみんな自殺してしまうのかしらね」

「一つの要素だって言っただけだろ。同じ意味で彼の場合、第二の危険因子である年齢も当てはまります」

信長は四十九歳でその生涯を閉じた。

「一般に高齢者ほど自殺率は高くなるんですが、『人生五十年』といわれた当時、信長は立派な高齢者です」

「たいへんだわ。世の中のおじいちゃんはみんな自殺しちゃうのね」

「三番目は孤独です」

静香の茶々はいつものことだから宮田は気にしない。

「信長は限りなく孤独でした」

「そんなことないわよ。彼は大勢の優秀な家来に囲まれていたのよ」

「その家来の一人に佐久間信盛がいる。彼はたしかに三十年もの間、信長に仕えた。でも信長はその労をねぎらうどころか、『比類なき働きがなかった』という理由で佐久間信盛を追放してしまう。追放された佐久間信盛もショックだったろうけど、ぼくはむしろ追放した信長の心に底知れぬ孤独を感じるよ」

「あなたって特異例見つけだすの得意なのよねえ」

「別に特異例じゃないさ。信長が越前の朝倉義景を攻めたとき、あ、これ一五七〇年の姉川の合戦のことだけど、この時も浅井長政に離反されている」

「浅井長政は別に家来じゃないじゃない」

「でも妹（お市）の亭主だぜ。まさか自分に刃向かうとは思ってもみなかったろう。ここでも孤独を感じたにちがいない」

「それぐらい耐えられなきゃ天下は狙えないわよ」

「それはそうだろう。でも問題は、すでにこの時点で信長の心にはぽっかりと大きな穴が空いていたことなんだ」

「ねえ、なんでそんなことあなたに判るわけ？」

「信長は十八歳で家督を継いだけど、その翌々年、信長の傅役だった平手政秀が、信長のうつけぶりに絶望して切腹してるんだ」

松永には初耳だった。

「どうだろう。常識的な想像力を働かせれば、この時点で信長の心に大きな穴が空いたと仮定してみても、それほど見当外れにはならないと思うけど」

「多少のショックは受けたでしょうね。で？」

「四番目の危険因子として、性格傾向があげられる」

いつしか宮田は三谷よりも静香に話しかけていた。

「まあ。あなたよく信長公の性格をご存じね。あたくし信長公にお会いしたことがないから判らないけど」

「性格傾向のひとつに完全主義があげられるけど、信長はまさに完全主義者だった」

「あなたもしかしたらタイムトラベラーなんじゃない？　トイレの芳香剤の匂いはラベンダー

でしょ」
「実際に会わなくたって、残っている資料から推測することは可能だろ？」
「資料というと『信長公記』かい？」
三谷が宮田に訊いた。
「その通りです」
『信長公記』とは、信長の家臣である太田牛一（おおたぎゅういち）の手による信長の伝記である。
おそらくは「のぶながこうき」と読むのが正しいのだろうが、現在では「しんちょうこうき」の方が通りがいい。
信長に関する第一級の客観的資料である。
もっともその『信長公記』でさえ、第三者あるいは著者自身が筆写した版が三十本近くあり、それぞれ微妙に内容に差異が認められるので、百パーセント鵜呑みにすることは危険だ。
「信長は茶の湯が好きで、高価な茶器を強引に蒐集していたことは知ってるだろ？」
「知ってるわよ。その影響で一族には織田有楽斎（うらくさい）なんて数奇者も出たんじゃない」
織田有楽斎は信長の末弟で、東京・有楽町（ゆうらくちょう）の語源となった人物である。
「美濃（みの）の斎藤竜興（さいとうたつおき）の後家が、名物の壺を持っていた」
宮田は牛もつ煮込みをつつきながら話している。
「信長がこれを差し出すよう命じた時、壺は紛失していた。ところが信長は隠したのではないかと疑心暗鬼になって、一族三十人を捕らえた」

「はあ」
「さいわい疑いは晴れて三十人は釈放されたけど、下手をすると壺ひとつのために三十人もの人間が殺されるところだったんだ。当事者ひとり処罰すればいいところを、一族郎党ことごとく処罰しなければ気のすまないところに、信長の完全主義がよく表れてるよ」
そういえば信長は対立していた一向宗信徒たちをも断種（ジェノサイド）に近い大虐殺をしたと、松永はどこかで聞いたような気がした。
「信長は完全主義者ですか」
「そう。それに、自殺傾向のある性格的危険因子は完全主義だけじゃなくて、あと三つほどある。未熟的・衝動的・抑鬱的の三点だね」
衝動的というのはいかにも信長らしいと松永は思った。
だが抑鬱的というのは信長にはそぐわないとも思う。
そして、未熟的とは何だろう？
「未熟的というのは常に第三者に対して不満を抱いている状態をいう。宣教師フロイスが本国ポルトガルに送った書簡には『信長の家臣たちは奇妙なほど信長におびえていた』とある。完全主義者の信長は家臣に対して常に不満を抱いていたんだろう。だからその叱責を家臣たちは恐れていた」
宮田は牛もつ煮込みを平らげて揚げ出し豆腐を頼んだ。
「それと、信長の長所として、彼が軍をすばやく動かしたことがよく指摘されるね。彼は本当

に驚くべき早さで兵を動かしている。時には兵の集結を待たずに出陣しているくらいだ。でもこれは裏を返せば、彼の性格が〝衝動的〟だったということでもあるんじゃないかな」

たしかに長所と短所は表裏の関係にあることが多い。

「二条城建設の際に、かつぎを着て見物にやってきた女性の顔を覗こうとした男を見つけた信長が、その男の首を刎ねたことはよく知られているよ。〝女性に乱暴を働くな〟という軍規に違反したと信長は思ったんだろうけど、これはやっぱり衝動的といえる行為だね」

「信長が衝動的だったってことは別に否定しないわよ。でも抑鬱的だったなんて解せないわね」

抑鬱的とは、躁鬱病の鬱状態のことをいう。

「『信長公記』は若き日の信長の姿を次のように伝えている」

宮田がホームページの画面を操作する。

町を御通りの時、人目をも御憚なく、くり・柿は申すに及ばず、瓜をかぶりくひになされ、町中にて立ちながら餅をまいり、人により懸り、人の肩につらさがりてより外は御ありきなく候、

「平手政秀はこんな信長のうつけぶりに絶望して自害したんだろうね。ほかにも、信長は父親の葬儀の時に抹香を摑んで仏前に投げつけたり、斎藤道三との対面の時も、虎と豹の皮で作った半袴をはいて腰の周りにひょうたんをいくつもぶら下げるという狂った風体で臨んでいることが『信長公記』に記されている」

「まあそうでしたの。で、それが抑鬱的なわけ？　あたくしには正反対の性格にしか思えませんけど」

「精神医学の世界ではね、思春期に反社会的行為を呈する人には、背景にある抑鬱傾向に注意を払うべきだという考え方が定説になっている。『信長公記』に記されている若き日の信長の姿は、まさに思春期における反社会的行為そのものじゃないか。ということは、その行為の背景に抑鬱傾向があることを疑ってみるべきだ」

松永の目に中村錦之助、あるいは高橋英樹が、虎の皮の半袴をはいて瓜をかぶり喰いしている姿が浮かんだ。

今まで信長の快男児ぶりを強調する挿話として親しんできた映像が、実は信長の抑鬱傾向を表していたとは……。

「自殺の危険のある性格傾向として、未熟的・衝動的・完全主義・抑鬱的と四項目あげたけど、信長はそのすべてに当てはまるんだ。さらに信長には五つめの精神疾患もあった」

宮田は断言した。

「自殺の危険のある精神疾患は、おもに鬱病と人格障害に分けられるけど、信長はこの二つとも有していたことは明らかだ」

静香が内に闘志を秘めた表情で大根サラダを注文した。

「鬱病は、抑鬱的性格に起因するものだと思うけど、その症例として不安焦燥感があげられる」
「不安焦燥感？」
「ああ。落ち着きがなくて常にイライラしている状態だ」
「なるほど。それが鬱病の症状ですか。そういえば信長の家臣たちが信長におびえていた様子とも合致しますね」
「うん。さらにこの症状が悪化すると、坐っていることができなくて、立たなくていい時に立ったりするんだ」
宮田は再び『信長公記』のある箇所を画面に映し出す。

此時、信長敦盛の舞を遊ばし候。人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。一度生を得て滅せぬ者のあるべきか、と候て、螺ふけ、具足よこせよと仰せられ、御物具めされ、たちながら御食をまいり、御甲をめし候て御出陣なさる。

「これ、桶狭間の戦いですね？」
「そう。この合戦に臨んで信長が『敦盛』を舞ったことは有名だね。そのあと信長が、立ったまま食事をしたことが明記されている。これは鬱病の不安焦燥感が悪化した症状だよ」
松永は唸った。

『敦盛』は平家物語の中の悲劇のヒーローを扱った幸若舞だが、その『敦盛』の場面にも信長の鬱病症状が隠されていたとは。
「次に人格障害」
「ちょっと待ちなさいよ。仮にも実質的に天下統一を成し遂げた人物に対して、人格障害というのはあまりにも失礼じゃないかしら」
「でも事実だから仕方がない。その根拠となる記録は枚挙にいとまがないほどだ」
「あたしがいいたいのはね、もし信長が本当に人格障害だったら、大勢の分別ある家臣団が彼の命令に従うかしらということよ」
「狂った教祖の命令に従って、多くの信者が殺人を犯したカルト教団があったね。ヒトラーの命令に従ってユダヤ人大虐殺を犯したナチスの例もある。トップが狂っていても、部下は従うものさ」
宮田はパソコンに水滴が落ちないよう注意しながら水割りを口に含んだ。
「桶狭間の戦いで今川義元を破ると、長い間今川の人質だった徳川家康が解放されたね？」
「ええ」
「家康は本拠地の岡崎に帰ったけど、この時から信長が死ぬまで、二人は同盟を結ぶんだ」
「誰でも知ってるわよ、そんなこと」
「でもね、その間に家康は、武田軍との通謀を信長に疑われて、長男の信康を殺すよう信長に命じられているんだ」

松永は驚いた。
「で、家康は信長の命令に従ったんですか？」
「ああ」
「あなたそれをもって信長が人格障害だっていいたいわけ？」
「だって実の子どもを殺すように命じるなんて異常だろ？」
松永はうなずいた。
「ねえ宮田さん。長男の死を自ら命じざるを得なかった家康が、信長殺しの真の黒幕だということは考えられませんか？」
「動機としては充分すぎるほどだね。でも家康は光秀に命令できる立場ではないよ」
家康黒幕説はあっさり否定された。
「さらに信長は妹のお市の方の長男にも死を命じている」
「え」
「姉川の合戦の時だよ。この戦いで信長は朝倉義景・浅井長政を倒したけど、長政に嫁いでいたお市の方は三人の娘とともに織田家に帰った。でも嫡男万福丸（まんぷくまる）だけは、信長の命令ではりつけ串刺しにされて殺された。万福丸がお市の実子であったかどうかは確定できないけど、いずれにしても十歳の子どもだ。それをはりつけ串刺しとはむごすぎる」
親族に対する仕打ちとしてはたしかに残虐すぎると松永も思った。
「しかもこの後、信長は異常性をエスカレートさせる」

「なんですか」
「朝倉義景、浅井久政（ひさまさ）・長政父子の首を切り取って、酒宴の際の酒の肴にしたんだ」
「やめてよ、気持ち悪いわね」
切り取った首を漆で固めて、金泥を塗って飾ったことが『信長公記』にも明記されている。
「荒木村重（あらきむらしげ）の一件もある」
「何ですか、それは」
「荒木村重というのは信長の有力な家臣のひとりなんだけど、ある時、荒木村重の部下が、信長の敵の本願寺に米を売ったという噂が流れたんだ」
「はあ」
「信長から釈明を求められた荒木は、殺されることを恐れてか出仕しなかった。これは荒木村重の謀叛ということになって、信長は荒木の居城を攻める。荒木は最後には毛利（もうり）領に逃げてしまった」
「それのどこが異常なのよ」
「問題は残された者たちへの処罰だよ。まず荒木村重の娘を処刑した」
また子どもか、と松永は思った。
「さらに一族の子女三十余人を京都六条河原で処刑」
「三十余人！」
「そんなことで驚いちゃいけない。家臣の女房百二十二人をはりつけ」

「百二十二人！」
「侍女、若党に至っては五百十余人を小屋に押し込んで焼き殺した」
松永は絶句した。
たったひとりの反乱に対してこれだけの大殺戮をやってのけるとは、やはり人格が破壊されているといえるのではないか？
「でも、信長の異常性が真に発揮されるのは、一向宗一揆（石山本願寺）との戦いにおいてだろうね」
「一向宗一揆……」
「当時の武将たちは多かれ少なかれ一揆には手を焼いている。徳川家康の三河でも一揆が起きて、この時は家中が二分する騒ぎとなって家康自身、譜代の家臣から槍を向けられている」
「はあ。なんでまた」
「武将つまり領主と、農民との対立は避けることのできない謂わば宿命的な対立だったんだ」
松永は一揆についての知識もあまり持ち合わせてはいなかった。
「戦国武将が戦乱の世を勝ち抜くためには、城普請に夫役がかかったり、多額の年貢を徴収する必要があったからね。農民の抵抗は避けられないところなんだ」
「ああ、年貢ですか」
「うん。で、そういう農民の心の支えとして一向宗が爆発的に広がった」
一向宗とは浄土真宗の別名で、悪人正機説の親鸞が興した教団である。

「そしてこの宗教的紐帯によって結ばれた一向一揆が各地に起こって、領主（武将）をおびやかした」
「そうね。信長がいちばん恐れたのは武田信玄だけど、実際にいちばん手を焼いたのは本願寺を中心とした一向一揆との戦いだったかもしれないわね」
この時、松永は妙な思いに囚われた。
もしかしたら、宮田と静香はグルなのではないか？
激しい言い争いをしているように装ってはいるが、すべては自分を騙すための芝居なのではないだろうか？
だが松永はすぐにその思いを頭から振り払った。
二人が自分に対してそんな手の込んだイタズラをする理由がないし、もし仮に静香の言動がすべて演技だとしたら、『鬼龍院花子の生涯』における夏目雅子なみの名演技ということになる。
「天正二年（一五七四）、信長は伊勢・長島の一向一揆を滅した」

八月二日の夜、以の外風雨候。其紛れに、大鳥居籠城の奴原夜中にわき出で退散候を、男女千ばかり切捨てられ候。
——信長公記——

「女をも容赦なく切り捨てているところも凄いけど、この日のことを家臣の河尻秀隆に知らせ

た信長の書状からも彼の残虐性が窺える」

男女ことごとく撫切りに申しつけ候。

「恨みがこもってますね」
「だろ？」
「でも、籠城していた一揆軍は、どうして夜中にわき出たんですか？」
「うん。長島城というのは川に囲まれた城だったんだけど、信長はこれを兵糧攻めにした」
「兵糧攻めといいますと、秀吉が得意だった戦法ですね」
「そう。つまり敵の糧道を断つ作戦だけど、苦しくなった一揆軍がわき出してきたんだ。で、わき出した千人も斬られて長島一揆軍はさらに追いつめられた。そしてとうとう信長に降伏する」
「はあ。それで一件落着ですか」
「ところがそうはいかない」
宮田は画面を操作した。

九月廿九日、御侘言申し、長嶋明退き候。余多の舟に取乗り候を、鉄炮を揃へうたせられ、際限なく川へ切りすてられ候。

――信長公記――

「どういうことですか？」
「命を助けるという条件で降伏させたのに、城から出てきた一揆軍をすべて殺してしまった」
「嘘をついたんですか？」
「そう。完全な裏切り行為だ。しかもここまであからさまな裏切り行為は歴史上珍しいよ」
「狂ってる、といえますね」
「うん。で、騙されたと知った一揆軍は死に物狂いの反撃に出る。ところが、」

中江城・屋長嶋の城両城にこれある男女二万ばかり幾重も尺を付け取籠め置かせられ候。四方より火を付け焼ころしに仰付けられ、御存分に属し、九月廿九日岐阜御帰陣なり。

――信長公記――

「どうだい？　信長は二万人の老若男女を焼き殺している」
松永は息を呑んだ。
「越前の一揆でも四万人を殺している」
「合わせて六万……」
「ヒトラーは夥しい数のユダヤ人を殺したけど、信長だって六万人の一向宗信徒を殺してるんだ」

「ヒトラーのような殺人狂だというんですか」
「京都所司代村井貞勝に宛てた、信長のこういう書状が残っている」
府中は死骸にて一円あき所なく候。見せたく候。
「狂ってる」
松永が信長に対して漠然と抱いていた〝颯爽とした快男児〟という印象は全く崩れ去った。
「殺人狂すなわち人格障害さ」
静香が頭を回して頸の骨をポキポキ鳴らしている。
反撃に転ずる前の儀礼的な行為である。
「あなたは、個人が内包する自殺の危険因子ともいうべき要素を五つ挙げてくれたわね」
「ああ」

A．性別
B．年齢
C．孤独
D．性格（未熟的・完全主義・衝動的・抑鬱的）
E．精神疾患（鬱病・人格障害）

「信長はその危険因子をすべて内包してるっておっしゃるけど、内包してるだけでそれが実際に自殺に結びつくとは限らないんじゃなくって？」
「もちろんそうさ。ただ、これらの危険因子が、自己破壊傾向という形で表に出はじめると、自殺の危険度は一気に高まることになる」
「自己破壊傾向？」
「うん。これにも指標となるべき要素が三点ほどあるんだ」

一．公の場での反社会的行動
二．事故傾性（必要な処置をとらない）
三．自殺未遂

「あなたそんなものまでホームページに入れてるの？」
「いいじゃないか。この三点は直接自殺に結びつく重要項目だからね」
「公の場での反社会的行動というのは判る気がしますね」
「だろ？　信長は、天皇から国師号を与えられた快川紹喜という高僧を焚殺してるんだ。これなんか公の場での反社会的行動の最たるものだと思うね」
快川紹喜は臨済宗の僧で、甲斐慧林寺住職である。

天正十年（一五八二）、武田勝頼が信長に攻められたとき、近江の武将・六角義弼を寺に隠した廉で焼かれたのだ。

このとき快川紹喜は「心頭滅却すれば火もまた涼し」という言葉を放ったとされている。

「事故傾性って何なのよ」

「これはね、自分の身体の管理にまるで無関心で、必要な処置をとらない傾向をいうんだ。その結果、本人は小さな事故を繰り返してしまう」

「たとえば？」

「単純な例をあげれば酔っぱらい運転だね」

「単純すぎるわね、その例は」

「じゃあ信長における具体例をあげよう」

宮田は水割りのお代わりをした。

「彼はよく『かるがると出立された』と記されてるけど、百名前後の小姓を連れただけで動くことが多いんだ。そのために千草峠で敵方の武将に雇われた杉谷善住坊という射撃の名手に鉄砲で狙われて、袂を射抜かれたこともある」

「また特異例を引っぱり出したわね」

「まだあるよ。たとえば天正四年の石山本願寺との戦いだ」

この時は山城守護を務める原田直政が戦死するという大敗北を喫している。

「敗戦の報を聞いた信長は、『ゆかたびら』の軽装で、わずか百騎ばかりの兵を率いて出立した。そして彼自身が足軽たちにまじって戦った」

「本当ですか」

「ああ。そして足に鉄砲傷を受けながらも勝利をものにした」

たしかに信長は、自分の身体の管理に関心がなく、その結果、小さな事故を繰り返してしまうという傾向があるようだ。

「たいへん参考になりますわ、あなたのお話」

言葉の内容とは裏腹に、静香の口調は明らかに宮田をバカにしきっていた。

「でも、あたくしが察するところ、自己破壊傾向のうちで、いちばん重要なのは『自殺未遂』じゃありませんこと？」

「さすがにいい勘してるね。自殺未遂者の一割は、その後ほんとうに自殺してしまう。あらゆる兆候の中で『自殺未遂』は自殺に直結するいちばん危ない〝自殺のサイン〟だと言えるんだ」

「でも宮田さん。あたくしの知る限り、信長が自殺未遂を犯したという記録は見当たらないようですけど」

三谷もうなずいている。

「それは君が見落としてるだけだ」

「なんですって」

静香の口調が険しいものに変わった。

「古今東西あらゆる文献を見ても、信長が自殺未遂を犯したなんて記録あるわけないわよ！」
「そうかな」
静香の憤怒を宮田は冷静に受け止めた。
「古今東西のあらゆる文献の中から、最も大がかりな自殺未遂の例証をぼくは見つけたよ」
「何なのよ、それは」
「桶狭間の戦いさ」
「お、桶狭間の戦いですって」
「ああ」
奇襲攻撃によって今川義元の大軍を破ったとされる、織田信長のデビュー戦である。
「あ、あの、周到な用意の下に絶対に負けないと確信した上で出撃した、あの戦のことをおっしゃってるの？」
「そういう主観と先入観に満ちた言い方はやめてくれるかな」
「だって事実ですもの」
「事実だけを見れば、四万の今川軍に四千の軍勢で挑んだ信長の行動は、明らかに自殺行為といえる」
「ばかね、あなた。信長は自分が死なないように、周到な計画の上で奇襲をかけたのよ」
「いや。奇襲をかけた事実はないよ」
「は？」

「このことは藤本正行という研究家も指摘している」
宮田の言葉に、松永も静香も三谷も首をひねった。
今川義元は駿河の名門大名で、甲斐の武田信玄や越後の上杉謙信と同じく京を窺っていた。尾張を統一したにすぎない地方大名の信長は、この今川義元を尾張桶狭間で破って全国デビューを果たしたのである。
その際、『敦盛』を舞った信長が、奇襲により義元の大軍を破った〝事実〟はあまりにも有名である。
「あのねえ、今川義元は桶狭間という谷間にいたために油断していたの。そこを信長が衝いたのよ。信長は奇襲をかけるために行動を極力隠したわ。そして大きく迂回して今川義元の本陣を背後から襲ったのよ」
松永も三谷もうなずいた。
この戦いは信長の戦巧者ぶりが遺憾なく発揮された戦いともいわれている。
「義元は油断なんかしていないさ」
「そう思うのは自由よ」
「君は義元が谷間にいたために油断していたと言ったね」
「そうよ。狭間というのは谷間という意味でしょ」
「ところがこれを見てほしい」

御敵今川義元は四万五千引率し、おけはざま山に人馬の息を休めこれあり。

——信長公記——

「桶狭間は谷じゃなくて山だよ。『信長公記』に明記されてる」
松永は意外な気がした。
たしか以前観た映画では、義元は谷底に陣を張っていた筈だ。
「さらに君は信長が、奇襲をかけるために行動を隠したと言ってるね」
「そうよ」
「でも現地には、信長が軍勢を率いて身を隠す場所なんてどこにもないんだ」
「なんで判るのよそんなこと」
「ぼくは名古屋出身でね」
「まあ、田舎者でしたのね」
松永はハッとした。
名古屋人に、というよりもむしろ田舎に住む人々に対する偏見を含むと思われる発言である。
「あ、これほめてるのよ」
あまりにも強引なフォローである。
「判ってるさ。学校へ行くまでに一回も土を踏まないで済むという少年少女時代を送る都会人は、考えてみればかわいそうだ」

宮田は静香のフォローを素直に受けた。
「それはそれとして、ぼくは少年時代に桶狭間へ行ったことがあるけど、今川軍から織田軍は常に丸見えの状態になるんだ」

無勢の様躰敵方よりさだかに相見え候。

——信長公記——

「ね？　記録にも残ってる」
静香の旗色が悪くなってきた。
「だけど大きく迂回して敵の背後を衝けばやっぱり奇襲でしょうが」
「織田軍は迂回なんかしていない。特攻隊のように正面攻撃したんだ」
「なんですって」
「本戦の前に小競り合いが起きたのを知ってるかい？」
「知ってるわよ。佐々隼人と千秋四郎でしょ」
「さすがだね」
織田軍の佐々隼人と千秋四郎の二人が、人数三百ばかりを率いて今川の大軍に攻撃を仕掛けたのである。
当然、二人は討たれてしまう。
「本戦はこの直後に始まったんだ。これは桶狭間の戦いが奇襲でもなんでもなくて、両軍承知

の上で始まったことの明確な証拠じゃないか」
「ちょっと待ちなさいよ。それは信長の陽動作戦ということになってるんじゃなくて？」
「それはあまりにもひどいこじつけだよ」
宮田は陽動説を一刀両断にした。
「そんな作戦を遂行する利点がいったいどこにあるんだい。佐々・千秋の先走りを信長の作戦だなんて言うのは、〝信長は絶対にまちがいをおかさない〟という現実離れした先入観が導き出した幻だよ」
とかく歴史というものは勝者の視点から語られがちである。

信長御覧じて、中嶋へ御移り候はんと候つるを、脇は深田の足入、一騎打ちの道なり。
——信長公記——

「織田軍と今川軍の間には一騎打ちの道しか残されていなかったんだ」
三谷が腕を組んで唸り出した。
「さらに『信長公記』には義元についてこういう描写がある」

戌亥（北西）に向て人数を備へ、鷲津・丸根攻落し、満足これに過ぐべからず、
未剋（午後二時頃）東へ向てかゝり給ふ。

「義元は織田軍に対して戦闘態勢をとっていたんだ。奇襲をかけられて負けたわけではないよ」
宮田は次に織田軍の動きを記した部分を映し出した。
「義元の軍と織田軍の向きを見てほしい。これは完全な正面衝突だよ。奇襲でも何でもない。織田軍が迂回して義元の背後を衝いたなんて事実無根なんだ」
松永は唖然とした。
今まで〝事実〟だと思い込んでいた信長の奇襲が、『信長公記』という最も価値ある文献によって否定されたのである。
「しかし宮田君。われわれ日本人は、なぜ今まで桶狭間の奇襲という幻想を信じ込んでいたんだろう」
「それはおそらく『信長記』のせいでしょう」
「『信長記』？」
「ええ。小瀬甫庵という江戸時代初期の作家が書いた小説ですよ」
「小説……」
松永は絶句した。

「彼は太田牛一の『信長公記』を下敷きに信長の一代記を書いてるんです。もちろん小説ですから架空の合戦もずいぶん含まれています。その中で桶狭間は次のように描写されています」

信長卿、すは首途（かどで）は良きぞ。敵勢の後（うしろ）の山に至つて推しまはすべし。

「桶狭間が奇襲戦だという幻想はこの描写が原点になっています。甫庵版『信長記』は江戸時代に大ベストセラーになったし、この本をもとにして多くの類書が作られたから、甫庵の創作が史実として定着してしまったんでしょう」

多くの日本人が〝史実〟として認めてきたものが、実は一作家の書いた小説の描写にすぎなかったとは……。

「この戦いは初めから絶望的な戦いでした。人数に圧倒的な差があったからです。その少ない兵力の内からさらに佐々・千秋の三百人が消えてしまいます。ふつうだったらここで退却を考えるでしょう。ところが信長は佐々・千秋の敗戦を見届けた上で、今川の大軍に正面から進撃を開始してしまうのです。これは死を覚悟の進撃、もっと正確にいえば、死に場所を求めての進撃だったのではないでしょうか」

家老の衆御馬の轡（くつわ）の引手に取付き候て、声々に申され候へども、ふり切つて中嶋へ御移り候。

――信長公記――

「現に家老たちは信長に進撃を思い止まらせようとしましたけど、信長はその制止を振り切って中嶋砦に兵を進めています」

信長も下立つて、若武者共に先を争ひ、つき伏せ、つき倒ほし、

――信長公記――

「おどろくべきことに信長自身、戦場に降り立って戦っています。これは自殺しようとしている人間の行為ですよ」

「じゃあなんで信長は勝ったのよ」

「首を吊ろうと思っても枝が折れて死ねないことがあるだろ？　信長は自殺に失敗したんだ。つまり自殺未遂だね」

「じゃああなた。信長が勝ったのは単なる偶然だって言いたいわけ？」

「偶然以外の何ものでもない。現に桶狭間において信長は作戦会議を開いてないんだ。これは信長に〝勝つ気〟なんてもともとなかったことの証拠だよ。そして『一度生を得て滅せぬ者のあるべきか』という『敦盛』の台詞は、信長の心境をそのまま表してるんじゃないかな」

桶狭間の戦いは信長の自殺未遂の戦いだった……。

松永の頭の中で、颯爽とした信長の印象が、勝利に絶望している信長の印象にすり替わってしまった。

「信長はもともと自殺しやすい傾向にあった。自殺の危険因子をすべて内包しているからね。さらにそれが自己破壊傾向という形で表面化してもいる。そしてついに明智光秀を恃んで自殺を決行したんだ」

「ねえ、だったら秀吉に頼めばいいんじゃない？」

「秀吉は備中で毛利攻めの最中だろ。柴田勝家は北陸、滝川一益は関東、丹羽長秀は四国。結局、京都にいたのは光秀だけだった」

「でも、そんな重大なこと光秀なんかに頼むかしら。彼、信長にはいじめられてたんでしょ」

「そんなことはないさ。彼は長年、畿内の軍勢を率いて軍功を重ね、丹波経営にも成功している。そして信長に認められて日向守にも任じられているし、秀吉と並ぶ評価を受けていたことはまちがいない」

日向守働き、天下の面目をほどこし候。

「これは佐久間信盛に対する断罪状の一節だけど、日向守（光秀）に対しては最大級の賛辞を贈ってる。大変にめずらしいことだよ。それほど光秀は信長に信頼されていたんだ。だからこそ重大事を光秀に頼む気にもなった。逆に光秀以外には頼めなかったんじゃないだろうか」

たしかに、光秀なら口が堅そうな気がする。

「結論として、〝信長は燃え尽き症候群による自殺だった〟ということができる」

「なんなのよそれ。いきなり唐突な結論出さないでくれる」

「燃え尽き症候群というのはフロイデンバーガーという心理学者が提唱したものなんだけど、精力的で高い目標をかかげて仕事に取り組むタイプの人が、過度の負担のあげくに挫折した時に陥る状態なんだ」

「過度の負担て何なのよ」

「それ、もしかしたら足利義昭との戦いのことじゃないですか？」

松永が口を挟んだ。

足利義昭は室町幕府十五代、つまり最後の将軍である。

将軍とはいえ織田信長の傀儡であることはまちがいない。

当時、戦国大名が天下布武、つまり京都に入って政権を握るには大義名分が必要だった。

武田・今川は源氏の血を引く名門の守護だが、信長は門地（身分）がないために足利義昭を旗印としてかついだのである。

室町幕府は十三代将軍の義輝が殺されるほど弱体化していたが、信長の後ろ盾によって再建されたことになる。

「残念ながら信長は足利義昭なんて問題にしていないよ」

宮田は松永の問いかけを一蹴した。

「たしかに義昭は傀儡の立場から脱しようとして信長に対して何度か挙兵してるけど、いかんせん両者の軍事力、経済力が違いすぎる」

義昭は元亀四年にも信長に対して挙兵しているが、結局降伏して紀伊の興国寺に幽閉された。ここに室町幕府は滅亡し、年号が天正と改められ、事実上信長の天下が到来した。

「信長が腐心したのは足利義昭との権力闘争ではなくて、天皇との権力闘争だったんだ」

「天皇……」

「そしてその争いに敗れ、自殺した」

宮田はカシスシャーベットを注文した。

「自殺の動機を特定することはむずかしいって言ったけど、周囲の人間が特定できるかどうかは別にして、本人にとっては〝喪失体験〟が最大・直接の原因になっていることはまちがいない」

「喪失体験？」

「自分の人生にとってかけがえのないものを失うことさ。たとえば地位の失墜なんかだね」

「あのねえ、当時の信長は天下統一目前だったのよ。地位の失墜なんて考えられないわよ」

「そうかな。周囲の人間がどう思うかはともかく、これはあくまでその人の内面的な問題なんだ」

「あなた信長の内面が判るっていうの」

「完全主義者の信長のことだから、自分が日本最高の権力者であると、周囲の人間に、あるいは自分自身にも認めさせようとしたことは想像に難くない」

「事実信長は日本最高の権力者じゃない」

「ところが日本では制度上、信長の上に天皇がいる」

当時の天皇は正親町天皇である。

「信長にとって天皇は目の上のこぶだった。だからせめて実力では自分の方が上なんだということを示そうとして、天皇に対して絶望的な戦いを挑んでいる」

松永が宮田にカシスシャーベットを渡した。

「信長は家督を継いだときに、上総介を名乗っているだろ」

「いいじゃない、何を名乗ろうが」

「でも官位を名乗るときは、口宣案という辞令を朝廷から受けることになってるんだ。現に今川義元は上洛する時に、三河守の官位を朝廷に運動して入手している。ところが信長は天皇に挑戦するように、天皇に口宣案を奏請することなく勝手に上総介と称したんだ」

「たしかに挑戦的ですね」

「永禄二年の最初の上洛の時も、足利義輝には会ったけど朝廷には全く立ち寄らなかった」

「だだっ子が意地を張ってるようにも思えてきますね」

「でもあなた。それって信長が最高権力者であることを証明してるんじゃなくって」

「ところが正親町天皇も負けてはいない」

宮田はカシスシャーベットを一口ゆっくりと味わってから話を続けた。

「今川義元に三河守の口宣案を与えたように、彼は信長に敵対する大名に対して官位を与え続けた。武田信玄に権僧正を与えたり、上杉謙信を法印大和尚位に任じたり」

「信長の許可の下に、ですか？」
「まさか。信長には無断でだよ。〝日本の最高権力者は私だ〟って言ってるようだろ」
「信長からもらった贈物を、そのまま毛利輝元に下賜したこともあったんじゃないかな」
「ええ。この事件も正親町天皇が自分の優位性を強調したものといえます」
「頭にきたでしょうね、信長は」
「もちろんさ。だから最終手段として信長は、正親町天皇に譲位を強要した」
「譲位……」
「うん。これには伏線があってね。天正七年に信長は、誠仁親王の第五皇子を猶子にしてるんだ」
「猶子というのは、」
「簡単にいえば相続権を持たない養子だよ」
「養子ですか」
「うん。で、誠仁親王というのは皇位継承権の最上位にいた人物だから、正親町天皇が譲位をすれば彼が天皇になるんだ。その結果、信長は天皇の子の父親という立場を手に入れることができる」
実現すれば正に鬼に金棒である。
「ところが正親町天皇は、信長からの譲位の勧告を拒み続けた」
天正元年にすでに信長が正親町天皇に対し「譲位をしきりと申し入れていた」記録が残っている。

「天正元年には正親町天皇は五十七歳だ。当時としてはもちろん高齢だし、誠仁親王は二十二歳だから譲位が行われても不自然ではない」
「それを拒み続けたということは……」
「正親町天皇の方にも〝信長ごときの意のままにはならないぞ〟という気持ちがあったんだろう」
「天正九年には〝馬揃え〟という事件があった筈だね」
「ええ。これは、天正元年から九年間も譲位を拒み続けた正親町天皇に、信長が業を煮やして起こした示威行動ですよ」
〝馬揃え〟とは信長が部下の諸将を京都に集めて行った観兵式である。
信長はこの観兵式をこともあろうに天皇の居所である内裏の東側広場で行い、天皇に対する無言の脅迫とした。
「軍事力は自分の方が圧倒的に優れているということを示したんです」
「でも、天皇は屈しなかった」
「そうだ」
「宮田さん。信長はその圧倒的に優勢な軍事力にものを言わせて、天皇家を潰してしまうこともできたんじゃないんですか？」
「そこが戦いだよ」

宮田はカシスシャーベットを半分ほど食べ終わった。
「信長は様々な合戦を解決させる方法として、よく勅を利用しているんだ」
「勅……」
「つまり天皇の命令だね。元亀元年の本願寺との戦いでも本願寺に対して〝敵対しないように〟との勅使を出させているし、浅井・朝倉両軍との和睦も勅によっている」
「そうですか。意外な感じがしますね」
「戦が長引けば、たとえ勝っても自軍にも大損害が出るからね。それを食い止めるために信長にとって天皇は利用価値があった」
「はあ」
「なおかつ、もし信長が軍事力にものを言わせて天皇家を襲ったりすれば、全国の武将たちが黙ってはいまい。〝信長倒すべし〟との大義名分を与えることになってしまう。さすがの信長もその損得を考慮すれば、天皇を力ずくで倒すことはできなかったんだろう」
「なるほど」
「でも、若い頃から天皇家の権威などこれっぽっちも認めていなかった信長にとって、その事実はたいへんに屈辱的なものであったに違いない」
「たしかにそうでしょうね」
「信長が最初に正親町天皇に譲位を強要したのが天正元年だ。正親町天皇はその信長の勧告を十年間にわたって拒み続けた。完全主義者の信長は自分の希望が達せられないストレスから鬱病的症状を呈し、ついに決定的な過ちを犯してしまう」
「決定的な過ち？」
「うん。これを見てほしい」

村井所へ参り候。安土へ女房衆御下し候て太政大臣か関白か将軍か、御推任候て然るべく候よし、申され候。その由、申し入れ候。

——伝奏・勧修寺晴豊の日記・天正十年夏記——

「これはね、天皇側の人間である勧修寺晴豊が、信長と天皇のやりとりを記した日記だよ」
「はあ。ちょっと古文は苦手なもんで」
「学者の間でも『申され候』の主語を誰ととるかで意見が分かれていた。でも立花京子という人が、日記全体の用語用法を分析した結果、次のような意味であることが判明した」

村井のもとへ参った。『朝廷が安土へ女房をお下しになり、信長を太政大臣か関白か将軍に御推任くださるのがよい』と村井が言った。その旨を天皇に復命した。

「村井というのは信長の腹心の村井貞勝だよ。つまりこの記録は信長自ら将軍にしてほしいと天皇にお願いしたことを表している」

漠然とだが、何か重大なことのように松永は感じた。

「考えてごらん。信長ほど天皇の権威を踏みにじり続けた男はいないんだ。武田信玄、上杉謙信までもが天皇の辞令を必死になって取り付けようとした中、信長は天皇を無視して上総介を名乗っている。彼の人生は、天皇を超えようとする戦いだったといえるんだ。だからこそ正親町天皇に譲位を強要した。だけど、正親町天皇の方が強かった。信長の強要を天皇は一蹴した。そしてついに信長は〝将軍にしてほしい〟と自ら天皇にお願いしてしまう」

宮田はカシスシャーベットを食べ終わった。

「これは天皇との戦いにおける信長の敗北宣言だよ。信長は負けたんだ。そのことに気づいた信長は死を決意する。本能寺の変が起きたのはそれから約一か月後だ」

店全体が、何か異様な雰囲気に包まれた。

桶狭間での颯爽とした勝利者の姿は、勝利に呆然とする自殺未遂者の姿に取って代わられ、破竹の勢いに乗って天下統一目前の覇者の姿は、天皇との戦いに敗れ、うちひしがれ絶望した敗者の姿にすり替わった。

「信長が各武将たちに〝与力〟をつけていたのは知ってるかい？」

「与力？」

「うん。柴田勝家、羽柴秀吉、明智光秀たちは、自己の家臣だけで戦うんじゃなくて、信長から〝与力〟と称する直臣をつけられていたんだ」

「それは、監視という意味で？」

「そう。『越前国掟』の後書きにも〝府中三人衆を柴田勝家の目付として命ずる〟と明記されている。もちろん明智光秀にも目付はついていた」

「ということは、」

「光秀が謀叛を起こすにはまずその与力たちを片づけなければならない。ところがそんな記録はどこにも残っていない。与力たちはあらかじめ信長の命令で取り除かれていたんだろう。これはすなわち信長自殺の証拠といえないだろうか」

松永は宮田の論法に感心した。そして信長という、もろい心を持った男の人生に思いを馳せる。

「信長が二十歳の時、家臣の平手政秀が信長のうつけぶりに絶望して自害したね。その時信長の心に、〝自殺〟という概念がすり込まれてしまったんじゃないだろうか」

静香は水割りのお代わりをしようと持ち上げたグラスを、またカウンターに戻した。

「ぼくは子どもの頃、〝信長に母親を殺された光秀が、恨みつもって謀叛に踏み切った〟という内容の子ども向け歴史書を読んだ覚えがあるよ。でもそんな事実はないんだ。甫庵版『信長記』やその後の『甫庵太閤記』、あるいはその類書のせいで、ずいぶんいい加減な史実がまかり通っている。光秀が毛利に密書を送って、秀吉がそれを見つけて備中大返しを敢行したなんていうのもその類だろう」

「あなた、光秀のあの歌まで史実じゃないなんて言うつもり？」

本能寺の変直前の五月二十八日、光秀は京都愛宕山・愛宕権現の社で連歌の会を催した。

その時の発句が光秀の次の歌である。

ときは今あめが下知る五月哉

〈とき〉は光秀の出身地の『土岐』を意味し、土岐出身の光秀が、天下を取る決意を述べた歌だともいわれる。

「歌自体は史実だけど、その解釈は単なるこじつけだろうね。でもその解釈通りだとしても別にかまわない。光秀はおそらく信長から〝自分を討った後はお前が天下を取れ〟と言われていただろうから」

もっともな話である。

「ところで、信長は死んだけど、その血は徳川家に受け継がれているんだ」

「知ってるわよ。家光でしょ」

三代将軍徳川家光の祖母は信長の妹のお市の方である。

「家光の乳母が春日局だということはあまりにも有名だね。この春日局は明智光秀の腹心、斎藤内蔵助の娘だよ」

「あ」

松永が声をあげた。

「もし光秀が本当に謀叛人だとしたら、その寵臣の娘が、信長の血を引く将軍の乳母になるものだろうか」

静香は宮田の言葉の意味を噛み締めるように沈黙した。

「信長は本能寺で、小姓の森蘭丸から光秀の襲撃を知らされたとき、『是非に及ばず』と一言したね」

「ええ」

「この言葉は〝仕方がない〟という意味だけど、ぼくには信長が〝仕方がなかったのだ〟と自殺の言い訳をしたように聞こえるよ」

宮田は伝票を松永に渡しておあいそを告げた。

維新が起きたのは
なぜですか？

東京に久しぶりの大雪が降ったので、「もしかすると今日は一人もお客が来ないかもしれない」と松永は覚悟をしていた。

だが現在、カウンターには三人の客が坐っている。

「日本の教育レベルも地に堕ちたわね」

静香はバッグから出した週刊誌を、投げつけるように松永に渡した。

「その週刊誌にね、現役の女子大生がソープランドで働いていたっていう記事が載ってるのよ」

静香は憤懣やるかたないといった風情で息巻いている。

松永は週刊誌の表紙を見てハッとした。

この週刊誌は一昨日発売されたもので、グラビア記事の「現代の才媛たち」というコーナーに静香のことが取り上げられているのだ。

もちろん松永も買い求めた。

そこでは静香の略歴とともに、静香が最近開設した歴史に関するホームページのことも紹介されていた。

もしかしたら静香はそのことをさりげなくアピールしようとして、

「日本はトップレベルの教育国になったようだな」
宮田の言葉が松永の、そしておそらくは静香の思考をも中断させた。
「あいかわらず頭の中が混線してるようね。女子大生がソープランドで働いていて何が教育国よ」
「だってその記事を信じるなら、〝日本ではソープランド嬢も大学に通っている〟とも取れるからね」
宮田の言葉に静香は二の句が継げなかった。
「真の知性と教育レベルは別のものだけど、少なくとも教育レベルの面では日本は世界でもトップクラスだというわけだ」
一つの事象を別の角度から見る——。
これは宮田が歴史の解釈に用いる方法だと松永は気がついた。
「松永さん、延長コード」
静香がカウンターの上を片づけはじめた。
ノートパソコンである。
「今の荒廃した日本には大改革が必要だわ。そう、ちょうど明治維新のような」
静香のノートパソコンにコードがつながれ、電源がオンになった。
「ホームページを開設したの。誰かさんのようにおざなりなものじゃなくて、練り込んだものをね」

画面に『静香のホームページへようこそ』というタイトルと、ぎこちなく手と顔を動かす若い女性のアニメーションが浮かび上がる。
続いて『あなたは開設以来三十七人目の訪問者です』というアクセスカウンタの文字。
「君は開設しただけで自分のホームページを宣伝してないのかい？」
「雑誌に載ったアドレスがまちがってたのよ！　それにあなたとちがってヒマが全然ないもんでね」
「なのによく〝練り込んだもの〟が作れるね」
「うるさいわね」
画面は流れて『世界史の中の明治維新』という見出しに替わる。
「本当は日本通史、世界通史をやりたいんだけど、まずは明治維新から作ったわ」
静香の操作で画面は『坂本竜馬暗殺の黒幕は誰か？』というタイトルに替わる。
「どう？　この話題なら松永さんにも興味があるんじゃない？」
「竜馬暗殺の黒幕ですか。おもしろそうですね。ねえ、宮田さん」
松永は宮田に水を向けた。
もちろん論争を期待してのことである。
「興味ないな」
「え」
宮田の答えはにべもなかった。

「だって竜馬暗殺の下手人は京都見廻組の今井信郎だろ？　黒幕も何も、本人が自首してるんだから推理の余地はないよ」

京都見廻組とは、元治元年（一八六四）に幕府によって作られた治安警察組織である。

たしかに竜馬が暗殺された三年後の明治三年、見廻組隊員の今井信郎が「竜馬を斬ったのは自分たちだ」と自供している。

「そうなんですか？　早乙女さん」

松永は静香に顔を向けた。

「まったくあなたって夢のない男ね」

どうやらいつもと役割が逆になりつつある。

竜馬が暗殺されたのは慶応三年（一八六七）、大政奉還から約一か月経った十一月十五日。

奇しくも三十三歳の誕生日の出来事だった。

この日、竜馬は京都の醤油商・近江屋の二階で、陸援隊隊長・中岡慎太郎とともに刺客に襲われ、絶命した。

年を越せば明治元年だが、ついに竜馬は明治の世を見ることはなかった。

犯行現場に新撰組が使用したと思われる下駄と鞘が落ちていたため、当時は彼らの犯行ではないかと思われた。だが、証拠不十分な上に新撰組自身も犯行を否定している。

「昔から竜馬暗殺の黒幕捜しは、歴史愛好家の重要なテーマなのよ」

画面には、

・西郷隆盛説
・伊藤博文説
・後藤象二郎説
・新撰組説
・京都見廻組説
・岩倉具視説

などの文字が並んでいる。

「で、君自身の結論はどうなんだい？」

「京都見廻組よ」

「早乙女さん……」

いつになく素直な静香の反応に松永は面喰らった。

「そうだろうね」

宮田はホットウィスキーのグラスを両手で包む。

「新政府に箱館で捕まった今井信郎が自供してるんだ。彼が自分に不利になるようなウソをつく理由は全くない。彼の供述書に明らかな矛盾点があるのなら疑ってかかってもいいけど、それほどの食い違いはないからね。だとしたら自供を信じるのが筋だろう？」

「なるほど」

あいかわらず宮田の論理は明快である。

「おまけに見廻組の隊長・佐々木只三郎の実兄が、明治三十六年に『竜馬暗殺の下手人は見廻組だった』と語っている。実行犯は今井を含めて全部で七人いたらしいね」
「あの、ひとつ基本的な質問をしていいですか？」
「ああ」
「見廻組はなぜ竜馬を殺したんですか」
「だって竜馬は幕府の敵なんだぜ」
「でも竜馬は大政奉還の後に殺されたんでしょう？」
「なるほど。いいところを衝くね。つまりもう幕府は消滅してるんじゃないか、ということだね？」
「ええ」
「たしかに徳川慶喜は〝大政奉還〟で政治の実権を天皇に返したけど、奉行所などの下部組織はそれまで通り機能していたんだ。だから政治犯としての竜馬に対する手配書はまだ生きていた。おまけに竜馬は寺田屋で幕府の役人を射殺してるから殺人犯でもあったわけだ。ということは、見廻組にとってこの事件は暗殺などではなく、単なる職務の遂行ということになる」
宮田はホットウィスキーを口に含む。
「だったら、堂々と名乗り出ればいいじゃないですか」
「ところが上層部はすでに倒幕新政府だからね。それもできなかったんだろう」
「そうですか」

松永はなんだか気が抜けた。
思えば宮田と静香の意見が一致したのは初めてである。
今日はもう歴史バトルは見られないのだろうか？
「黒幕というのなら、ぼくはむしろ明治維新の黒幕に興味を感じるよ」
「明治維新の黒幕？」
「ああ。誰が明治維新を引き起こしたのか？」
「ちょっと待ちなさいよ。あなたも少しあたしのホームページ見て勉強してくれる？　明治維新は誰かが引き起こしたものじゃないのよ。あれは大きな歴史のうねり」
「そうかな。ぼくには個人的な陰謀に思えるけど」
「個人的な陰謀ですって」
「ああ。明治維新はたった一人の人物によって成し遂げられたんだ」
「まったくあなたって度し難いバカね。一人で明治維新ができるわけないでしょ。坂本竜馬の活躍があったり、西郷隆盛の統率力、大久保利通の実行力、それらがみんな合わさって初めて明治維新は完成するのよ」
「でも、彼らがみんな、ある一人の人物に操られていたとしたら」
「なんですって」
「催眠術でね」
静香ばかりでなく、三谷、松永までもが口を開けたまましばし閉じることを忘れた。

「竜馬や西郷、大久保は、ある人物に催眠術をかけられていたんだ。その人物は彼らを自由自在に操って、明治維新を成し遂げた」
「あなたにこの言葉を言うの何度目になるかしら。『まさか本気で言ってるんじゃないでしょうね？』」
「ぼくはいつだって本気さ。君こそこういう言葉を知ってるかい？『その説がどんなに荒唐無稽に見えようとも、それが事態を最も矛盾なく説明できるのであれば、それが真実だ』」
「じゃあ訊くけど誰なのよ、竜馬や西郷を操っていたっていうその人物は！」
静香がバッとジャケットを脱いだ。
その拍子にカウンターの上の爪楊枝立てがふっ飛び、バレリーナの壁掛けに当たって〝カーン〟という音を立てた。
歴史バトルが始まった。
気のせいか松永には静香の顔が少し嬉しそうに見えた。
「竜馬や西郷を操れるほどの大物といったら一人しかいないじゃないか」
誰だろう。
「岩倉具視ですか？」
岩倉具視は京都の公卿で、王政復古の大号令を演出した倒幕側の重鎮である。
生活は貧しかったが、それだけに朝廷を貧窮に追い込んだ徳川幕府への恨みは誰よりも激しかった。

「ちがう。彼は竜馬との接点があまりないだろう？　ぼくが明治維新の黒幕だと睨んでるのは、勝海舟なんだよ」
「勝海舟……」
「ああ」
「あなたのバカは宇宙規模の破壊力を秘めてるわね。あたしのダイヤモンドのような知性も砕けそうだわ」
静香が真顔になった。
「勝海舟は幕府側の人間じゃないの」
「だからこそ〝黒幕〟なんだ。倒幕側の人間だったら、なにも陰に隠れる必要はないからね」
宮田はそう言うと鮭茶漬けを注文した。
ふつう、お茶漬けはラストオーダーと相場が決まっているが、宮田の場合は飲み始めに注文することが多い。
「いつも思うんですけど、あなたの説ってあまりにもひどすぎて、どこから反論していいのか判らなくなるわ。だってすべてがまちがってるんですもの」
静香はイワシのマリネを注文した。
頭が良くなるというので最近凝りだした一品である。
「とりあえず訊いときますけど、明治維新が個人の陰謀だなんてとんちきな説に、根拠を求めるのは酷ってもんでしょうね？」

「根拠はあるさ。その前に確認しておきたいんだけど、明治維新っていったい何だい？」
「またまたあなた上下二巻本級の質問をしてくれたわね。もしかしたら中巻も入るわよ」
静香が自分の画面を操作する。

明治維新　徳川幕藩制を解体させ、中央集権的な天皇制国家を形成する起点となった政治変革。明治維新の見方には、欧米勢力東漸に対する国家統一を強調する見方、また明治憲法制定にかけて立憲制が形成される過程とする見方などがあるが、全体としては封建社会が完全に解体しないまま、上からの資本主義化を強行する統一国家形成の出発点であるとする見方が多い。

「T社の日本史辞典からの引用よ」
「なんだかよく判らないな」
「あ、あなた、ここまで単純に要約された文章を見てもまだ理解できないっていうの？」
「うん」
「あきれかえった単細胞ね。あなたの脳をCTスキャンしても何も写らないんじゃない？」
「たしかに理解力じゃ君に分があることは認めるよ」
「ちょっと、勝負しないでくれる？　失礼ね」
「でもその文章をよく見ると、〜強調する見方、〜過程とする見方、〜であるとする見方が多

い、って、明治維新に対していろいろな見方があるようだね」
「よく見なくても判りなさいよ、それぐらい」
「ということは、学者の間でも明治維新が何だったのかよく判っていないってことじゃないか？」
宮田の、さりげなくも鋭い攻撃が始まった。
静香は返事に窮している。
よく判っていればいろいろな見方はなく、ひとつの見方に収まる筈である。
「明治維新にはね、とても大きな謎があるんだ。その謎のせいで学者たちも明治維新がよく判らなくなってしまったんじゃないだろうか」
「ちょっと、いい加減なこと言わないでよ。明治維新の謎なんて初耳よ」
「宮田さん。なにか秘密の文書でも発見したんですか？」
「別にそういうわけじゃない。この謎はすべての人に平等に開示されているよ。ただ、今までそのことを〝謎〟として認識できた人がいなかっただけの話だ」
こういう宮田の言い方が静香の神経を逆撫でするのだろう。
静香との対比によって冷静かつ客観的に見える宮田だが、実は静香に劣らず自信家であることが窺える。
「何なんですか。明治維新の大きな謎って」
「うん。まず、明治維新をひと言でいうと〝倒幕運動〟だね？」

「あなたって何でもひと言で言いたがるのね」
「その倒幕運動の担い手は、主に薩摩・長州・土佐・肥前の志士たちだ」
この四藩をまとめて薩長土肥という。
各藩、朝廷および幕府側の主な人材は次の通り。

〈薩摩〉（鹿児島）島津久光（実質の藩主）、西郷隆盛、大久保利通、中村半次郎（桐野利秋）等。
〈長州〉（山口）桂小五郎（木戸孝允）、高杉晋作、井上馨、伊藤博文、大村益次郎等。
〈土佐〉（高知）山内容堂（藩主）、武市半平太、坂本竜馬、中岡慎太郎、岡田以蔵、後藤象二郎、板垣退助等。
〈肥前〉（佐賀・長崎＝佐賀藩・鍋島藩ともいう）大隈重信、江藤新平等。
〈朝廷〉岩倉具視
〈幕府側〉徳川慶喜、勝海舟（軍艦奉行）、榎本武揚（海軍副総裁）、小栗上野介（陸軍奉行）、大久保一翁（外国奉行）、山岡鉄舟、新撰組等。

また、倒幕側に英国公使パークス（と、その書記官アーネスト・サトー）、幕府側にフランス公使ロッシュがそれぞれ加担していたことも忘れてはならない。
「この倒幕派の人間たちは、そもそもなぜ〝徳川幕府を倒そう〟なんて思ったんだろう？」

「むずかしいわねえ、あなたみたいな単細胞にそのことを説明するの」
「つきつめれば、徳川幕府のこの二点を改めようとして明治維新が起こされたといえる」
宮田が脇から静香のパソコンのキイボードを叩く。
「ちょっと、何すんのよ」

一、開国政策
二、天皇を無視した幕府による政治

宮田は静香のホームページの書き込み機能を利用したようである。
「松永さん、開国政策というのは判るだろ？」
「判るような判らないような」
「幕府はもともと鎖国を破って開国しようとしていたんだ」
「ああ、井伊大老ですか」
「そうだね。井伊直弼は天皇の勅許を得ずに勝手にアメリカと日米修好通商条約を結んでしまう」
「反対する人をことごとく弾圧したんですよね」
「うん。それが安政の大獄だ」
この弾圧で長州藩士、久坂玄瑞・高杉晋作らの師である松下村塾塾長の吉田松陰が刑死して

いる。
「怒った反対派は桜田門で井伊大老を暗殺する」
桜田門外の変である。
「この事件は見事にその後の明治維新を暗示しているね。開国しようとする幕府と、開国を阻止しようとする諸藩との戦いという点で。明治維新そのものの象徴といってもいいくらいだ」
三谷は宮田の言葉に秘かに感心した。
たしかに桜田門外の変は明治維新の暗示、あるいは象徴といえる。そのことを過去に指摘した学者がはたしていただろうか？
「二番目の、〈天皇を無視した幕府による政治〉というのは？」
「天皇というのは名目ばかりで、政治の実権は徳川幕府が握っていた、そのことに対する義憤だよ。倒幕派は政治の実権を天皇に戻そうとした。倒幕派が〝王権復古〟をもって革命を終了させようとしたのはそのためだ」
「ねえ、尊皇攘夷って言葉を使えば、あなたの冗漫な説明をひと言で済ませることができるんじゃない？」
まさにその通りだ。
倒幕派は〝尊皇攘夷〟という言葉の下に結集していた。
尊皇とは天皇を尊重して政治を天皇の手に戻せということであり、攘夷とは夷狄（西洋諸国）を攘けよ、つまり開国反対ということである。

「返事に窮したみたいね」
久々に静香が押している。
「で、あなた明治維新には大きな謎があるなんて世迷言をいってなかったかしら」
「そうだった。君のホームページに、大久保や岩倉の書簡は入ってるかい？」
「バカにしないでよ。大久保、岩倉どころか清水次郎長の書簡まで入ってるわよ」
松永の脳裏に再び高橋英樹の顔が浮かんだ。
何年か前に観た十二時間ドラマでは、清水次郎長は山岡鉄舟と懇意だった筈だ。
だが、静香の言葉はおそらくウソだろう。
清水次郎長は字が書けない。
「さすがだ！　ぼくが見てもらいたいと思った岩倉の書簡が出てきたよ」
宮田は静香のホームページを操作しながらやや興奮気味である。

明天子賢宰相の出づるを待たずとも、自ら国家を保持するに足るの制度を確立するに非らざれば不可なり。
——大久保の対政府建言書に対する返答——

「これが岩倉の考えだ。つまり明敏な天皇がいなくても、しっかりした官僚機構があればよいということだね」
宮田はさらにキイボードを叩く。

陛下御践祚の初には猶御幼沖にあらせられ、臣等、不肖の躬をもって拮据黽勉し、妄に大政摂行の任に膺れり。

——明治十年の上奏——

「この上奏に至っては、自分たちが天皇に代わって政治を執り行ってきたことを堂々と白状している」

「ねえ。明治維新の謎がいったい何なのか、終電までには教えてくれる？」

「いま教えるよ。倒幕派が革命を起こそうとした動機は次の二点だったね？」

一、幕府の開国政策を正すため（攘夷）

二、政治を天皇の手に戻すため（尊皇）

「そうよ」

「ところが明治維新が成就して新政府が打ち出した政策は、開国および天皇に代わって政府が政治を司るというものだった」

「あ」

「文明開化という言葉があるね。明治の世になって日本は西洋文明、西洋文化を一気に取り入れた。でも、もともと開国反対ということで明治維新が起こされたんだろ。なのに新政府が樹立されたとたんに開国政策に浮かれるなんて、不思議だと思わないか？」

「たしかに不思議ですね」

今までその不思議さを不思議だと認識したことはなかった。

「尊皇の部分にしても、岩倉の書簡からも判るように、『天皇の手に政治を取り戻そう』という目的であったにも拘らず、新政府の方針は『天皇に代わって政府が政治を執り行う』というものだった」

これも矛盾している。

「つまりね、明治維新があってもなくても、日本の政策には何の変化もないんだよ。これが明治維新における唯一にして最大の謎だ」

宮田はホットウィスキーで喉を湿らす。

「志士たちはいったい何のために戦ってきたのか？　明治維新があってもなくても日本の政策に変更がないのなら、いったいなぜ明治維新は起きたのか？　その答えが勝海舟なのさ。志士たちは勝に操られていたのであり、明治維新は勝が企画したものだ」

「あなたの途方もない勘ちがいを正してあげるのも、歴史学者としての義務の一つかもしれないわね。あたしボランティアにも興味があるから」

静香も一歩も引かない構えだ。

「あなたの説の無数にある欠点のうちでも最大級のものは、勝海舟には動機がないということね」

「動機？」
「そうよ。あなたのいうように明治維新があってもなくても政策に変化がないのなら、勝にしたところで明治維新を起こす必要なんてないじゃない」
「ところが勝の方には起こさなくてはならないわけがあった」
「何かしら」
「当時の年表を出せるかい？」
静香は返事もしないでキイボードを操作する。

〈明治維新関係史〉
一八五三（嘉永六）・ペリー、浦賀に来航
一八五八（安政五）・日米修好通商条約
・安政の大獄
一八六〇（万延元）・桜田門外の変
一八六二（文久二）・和宮降嫁
一八六三（文久三）・薩英戦争
一八六四（元治元）・池田屋騒動
・蛤御門の変
・長州征伐
一八六六（慶応二）・薩長連合
一八六七（慶応三）・大政奉還
・王政復古
一八六八（慶応四、明治元）・戊辰戦争
・江戸城無血開城
・改元
一八六九（明治二）・榎本武揚降伏
・戊辰戦争終わる

〈勝海舟の動向〉
31歳・海防意見書提出
36歳・島津斉彬に謁す
38歳・咸臨丸にて渡米
40歳・軍艦奉行並
竜馬弟子に
41歳・桂小五郎と談ず
42歳・西郷隆盛と談ず
44歳・大久保利通と面会
45歳
46歳・海軍奉行並
・陸軍総裁
47歳・外務大丞を仰せつけられるが辞退

「一八六〇年に桜田門外の変が起きてるね。明敏な勝のことだから、遅かれ早かれ幕府と諸藩との戦争が起きると予感したに違いない」
「その程度のことなら特に明敏でなくても予感できるんじゃないかしら」
「とにかく、勝はその事態を避けたかった」
「なんで？」
「戦争になれば、どちらが勝ってもお互いに疲弊する。そうなればそれこそ夷狄につけこまれて、日本が西洋列強の植民地となってしまう。現に日本にいた列強の外交官、軍人たちは、幕府と諸藩が戦えば、やがて対日戦争が引き起こされて、その結果日本は植民地にされるだろう

って予想していたからね。勝はそれをなんとしても阻止したかったんだ」
「だったら戦争だけ避ければいいじゃない。徳川幕府はそのままで」
「勝は咸臨丸艦長としてアメリカへ渡ってるだろ？　そこでアメリカの自由な空気に触れて感銘を受けた。政治家は選挙という制度で国民が選んでいる。省みるに日本では、実力があっても家柄がよくないと登用されない。勝自身がその点じゃあ非常に苦労してるからね。だから勝は、徳川幕府自体も入れ替えなくちゃと痛切に思っていた」
「幕臣の勝が幕府を倒そうなんて思うわけないじゃない」
「ところが思ったんだな。そして幕府と諸藩の戦争を阻止して、更には政府も入れ替えてしまうという、日本史上最大のトリックが計画された。それが明治維新さ」
「すばらしい説だわ。何ひとつ証拠がないというささいな欠点はあるけれど」
「証拠は君のホームページの中にも入ってる筈だ」
「入れた覚えなんかないわよ」
「慶応四年一月十八日に、勝が越前家へ送った書面を出してくれ」
静香は『書簡』というアイコンをクリックする。

遠くは印度の亡びたのも、近くは支那の地において長髪賊と官兵とが是非曲直を争って、同民族相伐ち、西洋諸国がその虚に乗じたのです。今やわが皇国も同じ轍をふまんとしています。

「この書面から、勝が幕府と諸藩が戦争を起こすことによって日本が西洋諸国の植民地になってしまうことを、極端に恐れていたことが判るだろ？」
宮田は自らキイボードを操作する。
「明治維新直後にはこういう文書も残している」

一家不和を生ずれば一家滅亡す。一国不和を生ずれば其国滅亡すべし。

「たしかに勝海舟は日本人どうしの戦争を恐れていたようですね」
「そうだ。そして徳川幕府に対しても強い不信感があった」
「そうかしら」
「『氷川清話』を出してみてくれ」
『氷川清話』とは、勝海舟の晩年の語録である。
明治三十、三十一年頃、東京赤坂氷川神社脇の勝邸において採録された勝の回顧談だ。

おれが始めてアメリカへ行って帰朝したときに、ご老中から「そちは一種の眼光をそなえた人物であるから、定めて異国へ渡ってから、何か眼をつけたことがあろう。詳しく言上せよ」とのことであった。

「この老中の問いに対して勝はこう答えている」

「アメリカでは、政府でも民間でも、およそ人の上に立つものは、皆その地位相応に利口でございます。この点ばかりは、全くわが国と反対のように思いまする」

「あなたねえ、上司に対する不満は誰だって持つでしょ。それだけで勝が幕府のすげ替えを狙ってるなんていえないわよ」

「じゃあこれはどうだい」

おれが政権を奉還して、江戸城を引き払うように主張したのは、いわゆる国家主義から割りだしたものさ。三百年来の根底があるからといったところで、時勢が許さなかったらどうなるものか。かつまた都府〔首都〕というものは、天下の共有物であって、けっして一個人の私有物ではない。

――氷川清話――

「この一個人というのは徳川家のことだよ。つまり勝は幕臣でありながら、徳川家よりも日本という国家を大事に思っていたんだ」

「当時の日本において、勝がひとり世界的な視野を持っていたことはたしかだと思うよ」

最近寡黙な三谷が久しぶりに口を開く。

「それはそうですけど先生。勝が催眠術を使ったなんて気味の悪い説、野放しにはできません。なんとかこらしめないと」

「催眠術は別に気味の悪いものじゃないよ」

松永は以前テレビで観た「催眠ショー」を思い起こしていた。

そこでは催眠状態にあるゲストが突如として大笑いをしたり、歌を歌い出したりしていた。

「だいたい江戸時代に催眠術があるわけないでしょ」

「バカ言っちゃいけない。催眠は有史以前から、地球上のあらゆる地域で行われているよ」

松永には意外な話だった。

「紀元前一〇〇〇年のギリシャの彫刻に、カイロンという高名な医師が、弟子のエスクラピウスを催眠に誘導したことを表したものがあるよ」

「そういえば今でも、歯科医が催眠麻酔を使うという話を聞いたことがありますよ」

「そうなんだ。催眠は何も特別なものじゃない。医学の分野では大いに有効活用されている」

「勝は医者じゃないわよ」

「でも蘭学を学んでいるぜ」

「か、関係ないでしょ、そんなこと」

「宮田君。勝が催眠術を使うなんて、どうしてそう思うんだい」

「坂本竜馬や西郷隆盛のような第一級の人物が、勝との初対面の時にコロッと手なずけられて

いるからです」

宮田は画面を操作する。

「これは竜馬が初めて勝と会った後、高知の姉に出した手紙の一節です」

今にては日本第一の人物勝麟太郎と云ふ人に弟子入り致し、

宮田は静香にも顔を向ける。

「麟太郎というのが勝海舟の通称だということは知ってるね。西郷も大久保に次のような手紙を送っている」

勝氏へ初めて面会仕り候ところ、実に驚き入り候ふ人物にて、……どれだけ知略これあるやら知れぬ塩梅に見受け申し候。まづ英雄肌合ひの人にて、……この勝先生とひどく惚れ申し候……

「これがいずれも初対面ですからね。勝が何か尋常ならざる術を使ったと思えてくるじゃないですか」

「今の日本の憲法じゃ、頭の中まで取り締まることはできなかったわよね」

静香が怖いことを言う。

「おまけに竜馬は、開国論者の勝を斬るつもりだった」

「え、そうなんですか」

「ああ。明治三十三年に出版された『当世名家蓄音器』という本の中に〈坂本竜馬は、己を殺しに来た奴だ〉という勝の言葉が載っている」

松永は水を一口飲む。

「これは勝にとっては生命の危機だ。何か起死回生の手を打たなければならない切羽詰まった状況といえる」

「そういえば勝は、勤皇（倒幕側）からも佐幕（幕府側）からもつけ狙われていたね」

「ええ。竜馬以外にも何人もの刺客が勝を襲っています。でも勝は、一度も刀を抜かないで、相手を手取りにしています」

長刀を二本さしてきたやつがあるので、おれは「お前の刀は抜くと天井につかえるぞ」といってやったら、そのやつはすぐ帰ってしまった事があった。

——氷川清話——

「これはまさしく催眠術の『催眠マヒ』という現象だ」

「催眠マヒ？」

「うん。たとえば被験者に『腕が動かなくなる』という暗示を与えるとするね」

「ええ」

「そうするとその人の腕になんら神経系の異常があるわけでもないのに、与えられた暗示によってまったく腕が動かなくなってしまう。勝はこの呼吸を会得していたんだと思う」
松永は唸った。
勝はまさしく相手に暗示を与えている。
「勝の言葉を細かく検討してみると、催眠術の修業に通じると思われる記述がいくつも出てくるんだ」

心は明鏡止水のごとし、ということは、若いときに習った剣術の極意だが、

人間は生きものだから、「気」を養うのが第一だ。

牛島の弘福寺という寺にいって禅学を始めた。

戊辰の前後、しばしば万死の境に出入して、始めてこの呼吸がわかった。

何事をするにも、無我の境に入らなければいけないよ。　――いずれも氷川清話――

「勝はオランダ語に堪能だしアメリカにも渡ってるから、外国人から催眠術の知識を得たのかもしれない」
「具体的な技術（テクニック）を勝は持ってたのかしら」
静香は余裕綽々の表情でホットウィスキーを飲む。
「ものすごく高度な技術（テクニック）が必要だって予想されるんですけど」
「たしかにその通りだ」
松永は宮田の次の言葉を待つ。
「一般的にいって、催眠者（催眠術をかける人）と被催眠者（催眠術をかけられる人）との間には、絶対的な信頼関係が必要とされている」
「そうでしょうね」
「つまりお互いに心が開放された状態だね。このような信頼関係をラポールっていうんだけど、お互いに〝これから催眠術をかけますよ〟って判っている場合には、すでにラポールは築かれたも同然だ」
三谷がうなずく。
「ところが勝のように、意識していない相手に催眠術をかけようとすれば、瞬間的に相手の心を全開放してしまわなければならない」
「瞬間的に？　そんなことができるんですか」
「勝が採った方法は〝笑い〟だった」
「笑い？」

「うん。勝は密命を帯びて単身、長州へ乗り込んだことがあっただろ？」
一八六六年（慶応二）のことである。
前年の長州征伐で戦争状態になりつつあった長州に、休戦を申し入れに出向いた。
当然、長州側は殺気立っている。

長州の兵隊や探偵は、始終おれの旅館の周囲をうろつき、たまには遠方から旅館へ向かって発砲するものなどもあった。

——氷川清話——

「会談の場面は次のように記されている」

長州から広沢兵助〔のちの真臣〕等、八人のものが使者としてやってきた。井上聞多〔後の井上馨侯〕そのころは春木強太郎といっておったが、それから長松幹などもこの中に加わっていた。長州の方からはこのとおり多勢で堂々とやってきたのに、こっちでは木綿羽織に小倉はかまの小男の軍艦奉行が、たった一人控えているばかりだ。
いよいよ今日会合という日になると、おれはまず大慈院、これが会合の場所だが、この寺の大広間に端座していると、あとから広沢などがやってきた。しかしさすがに広沢だけあって、少しも傲慢のふうがなく、一同縁側に坐ってうやうやしく一礼した。
そこでおれは、「いや、そこではお話ができませんから、どうぞこちらへお通りなさい」と挨拶すると、広沢は頭をもたげて、「ご同席は、いかにも恐れ入る」と辞退するので、おれは全体ひょうきん者だから、「かようにへだたっていてはお話ができぬ、あなたがおいやとあれば拙者がそこへ参りましょう」といって、いきなりむこうが坐っている間へ割り込んでいったところが、一同大笑いとなって、「それではご免をこうむります」ということで、一同広間にはいっていよいよ談判を始めることになった。

——氷川清話——

「一瞬のうちに相手の懐に飛び込む呼吸。そのあとの大笑いで相手の心を開放してラポールを築いた。談判はもちろん勝の意のままになったよ」
「宮田君。君はあの長州談判にも催眠術が使われたと言うのかね」
「ええ。あの殺気立った場で相手を従わせようとしたらそれがいちばんですからね。勝は集団催眠を使ったんです」
「バカも休み休み言いなさいよ。あなたみたいに年中無休で来られると聞く方が疲れるわ」
「でも勝は長州談判に限らず多くの切り抜け不可能と思われた難局を切り抜けているからね。『江戸開城』を書いた海音寺潮五郎は、そんな勝を『しかし、勝だって魔法使いではない』って言ってるけど、ぼくは勝は魔法使いだったのではないか、つまり催眠術使いだったのではないか、と思うわけです。でなければ」
宮田は静香に反論されるのを防ぐように急いで言葉を継いだ。
「江戸城無血開城は絶対に不可能だったでしょう」

「江戸城、」
「無血開城……」
静香が絶句したあとを三谷が引き取った。
江戸城無血開城は明治維新の白眉（ハイライト）であるばかりでなく、海音寺潮五郎に至っては『日本史上においても比類のないほどの美しい事件である』と断じている。
勝の努力により大政奉還、さらには王政復古まで成されたが、まだあきらめきれぬ徳川慶喜は、新政府に対して戦争を仕掛ける。
これが戊辰戦争である。
当然、官軍（新政府軍）の怒りは凄まじく、江戸全土を戦場にしての江戸城武力奪取以外に革命の成就はありえないと全軍がいきり立つ。
すでに江戸総攻撃が一八六八（明治元）年三月十五日と決定されていたその前日、幕府全権大使となっていた勝海舟は、西郷隆盛と高輪薩摩藩邸で面会し、総攻撃の中止を約束させたのである。
「官軍（新政府軍）は三月十四日には、東海道軍が品川に、東山道軍本隊が板橋に、その支隊が新宿に到着していた。もちろん夜明けには一斉に市中に突入する命令が出されていた。長州談判どころではない、それこそ止めようのない歴史のうねりのような江戸総攻撃を止めさせるには、やはり尋常ならざる術が必要だったろうよ」
「そんなことないわよ。江戸総攻撃（ハルマゲドン）が実行されれば、百五十万江戸市民が戦火の犠牲になるこ

とは目に見えているわ。西郷さんは勝に言われるまでもなく、それを避けたかったんじゃないかしら」
「とんでもない。西郷は最初（ハナ）から武力倒幕派だよ。武力によらなければ革命は不可能という考えの持ち主だったんだ。だから勝の策略による大政奉還で開戦の口実を失うと、江戸で戦争挑発の策動を始めたぐらいだ」
「戦争挑発？」
「うん。西郷は江戸の薩摩藩邸に浪士を集めて、強盗、放火、陣屋襲撃などの江戸攪乱作戦をやらせている」
「本当ですか」
「事実だ。さらに西郷自身のこういう書簡があるよ」

御存知の通り軍（いくさ）好き。

——慶応元年・土持政照宛書簡——

「さらに徳川慶喜に対してはこう言い切っている」

是非（ぜひ）切腹迄（まで）には参り申さず候はでは相済まず。

——慶応四年・大久保利通宛書簡——

「江戸城無血開城は、あくまで勝の意志だ。決して西郷の意志ではない」

松永はうなずく。
「思えば勝は、桜田門外の変を知った時から、この明治元年四月十一日の開城を目指していたといえるのかもしれない」
江戸城無血開城――。
内戦が回避され、しかも政権が交代するという世界史上にもまれな無血革命が、この一日に集約されている。
「勝は総攻撃の前日、西郷と会談して長広舌をふるっている。でも本当に利いたのは、長広舌の結びとして発せられた次の一言だったと思う」
「西郷殿にはかねてまた申し上げたことがありますから、大抵ご諒察のことと思います。ともかくも、明日の戦争はやめていただかなければなりません」
「おそらく西郷は勝に後催眠をかけられていたんだろうね」
「後催眠？　なんですか、それは」
「催眠から覚めたあとのことについてあらかじめ暗示を与えておくのさ。たとえば『あなたは○○という言葉を聞いたら、戦争を中止する命令を出さなくてはならない』というように。もちろん被催眠者はそんな暗示をかけられていることなどまったく覚えていない」
「そんなこと本当にできるの？」

「できるどころか、催眠術の最も得意とするところさ。たとえば『あなたは足し算ができなくなる』という後催眠をかけられた被催眠者に、『1＋1＝』というカードを見せるとね、」
「ええ」
「答えがまったく出てこなくなるんだ」
「1＋1が判らないんですか？」
「ああ。本人もなぜ判らないのかが判らない」
静香も三谷もしばらく箸が止まっている。
「他にもね、『窓という言葉を聞いたら窓を開けなくてはならない』という後催眠をかけた被催眠者に『窓』という言葉を聞かせてやると、その被催眠者は必ず窓を開ける。しかも本人は催眠をかけられているとは気づいていないから、『暑かった』などという勝手な理由を作り上げる」
宮田はホットウィスキーのお代わりを催促する。
「西郷の場合は、『かねてまた申し上げたこと』という言葉がキイワードになっていたんじゃないかな」
「キイワード……」
「うん。つまり『あなたは〝かねてまた申し上げたこと〟という言葉を聞いたら、戦争を中止する命令を出さなくてはならない』という後催眠をかけられていたとしたら、」
「なるほど。西郷は自分でも理由が判らないうちに戦争中止の命令を出してしまう」

「そうだ」
宮田はキイボードを操作する。

余高輪の薩邸に至る。時に君一僕を従へ、悠然として到る。初め余を見て曰く、時事此に至る矣、君果して窘蹙するや否やと。余答へて曰く、今試みに君と地を易へむ、然らざれば君詳悉する能はざるなりと。君、啞然として絶倒す。　――江戸開城――

「これは西郷が死んだ時に、勝が亡友帖に書き添えた一文なんだけど、江戸総攻撃の前日の会談の時の模様を思い出して書いたものなんだ」
西郷が勝に、

「えらいことになりましたが、先生ほどの人でも少しはおこまりでしょうな」
と、冗談を言ったところ、勝は、
「貴殿と拙者と立場をかえて見ましょう。そしたら、よくわかりましょう」
と答えた。

そういう場面である。
「この最後の『君、啞然として絶倒す』という箇所だけど、啞然は大笑いすること、さらに絶倒は、ころがって笑うことをいう。大事な会見の席でころがって笑うのは尋常ではない。これは完全に勝と西郷の間にラポールが築かれていたことを示している」
西郷の心が開放状態にあったのはたしかなようである。
「宮田君。では君は三月十四日の会談の席で、勝は西郷を転げ笑わせてラポール状態にあることを確認した後に、『かねてまた申し上げたこと』というキイワードを与えて、西郷自身も無意識のうちに『江戸総攻撃中止の命令』を発令させたというのかね？」
「その通りです。勝と西郷はその前日の三月十三日にも一度会っていますから、その時に後催眠をかけたのかもしれないし、あるいはずっと以前にこの日のあることを予見してかけていたのかもしれない」
静香は無意識のうちにたこやきピザをつついている。
「『西郷隆盛』を書いた圭室諦成という人は、〈西郷は、世界的視野を持った助言者、勝海舟のしめした時局収拾の線にそって行動した明治維新に至る四年間だけが、彼の人生のもっとも精彩にとんだ部分である〉と断じています」
宮田はカシスシャーベットを注文した。
「勝に会った後で、倒幕派の人間たちは不思議と自分の意見を一八〇度変えているんです」
「たとえば？」
「姉小路公知」
姉小路公知は攘夷党の代表ともいわれた公卿である。

「彼は勝と会った後、勝に感服して西洋の海軍技術を輸入する意見に鞍替えした。お蔭で攘夷党に暗殺されたけどね」

宮田は松永からカシスシャーベットを受け取る。

「日本人を見下した態度を取ることで有名な倒幕派の英国大使パークスも、勝に対しては異常に親切だった。それに、大久保利通までが勝に動かされている」

「大久保が？」

「うん。彼は最初、首都を大阪にしようとしていたことは知ってるだろ」

「へえ。し、知ってるわよ」

「彼は明治元年二月二十三日に、岩倉具視や後藤象二郎の承認を取りつけて、正式に『大坂遷都論』を上議事所に提出した」

それがそのまま通っていたら、日本の標準語は大阪弁になっていたのだろうかと松永は思った。

「でも、それを覆したのも勝だった」

徳川氏から扶持を貰っておったものはもちろん、そのほか諸大名の屋敷へ出入りする職人や商人などは、皆直接間接に幕府のおかげで食うていたのだから、幕府の瓦解と共に、こんな人たちはたちまち暮らしが立たなくなる道理だ。

全体、江戸は大阪などとは違って、商売が盛んなのでもなく、物産が豊かなのでもなく、ただ政治の中心というので、人が多く集まるから繁昌していたばかりなのだ。それゆえに、幕府が倒れると、こうなることはもとより知れきっていたことさ。

ついては、この人たちに何か新たな職業を与えなければならないのだが、なにしろ百五十万という多数の人民が食うだけの仕事というものは容易に得られない。そこでおれは、この事情を詳しく大久保〔利通〕に話したら、さすがは大久保だ。それでは断然遷都のことに決しようと、こういった。すなわちこれが東京今日繁昌のもとだ。

——氷川清話——

「けっこうなことじゃない」

「でもね、大久保が断然遷都しようとしていた先は大阪なんだぜ」

外国交際ノ道、富国強兵ノ術、攻守ノ大権ヲ取リ、海陸軍ヲ起ス等ノコトニ於テ、（大坂の）地形適当ナルベシ。

——大久保が提出した大坂遷都論——

「大久保は岩倉や後藤を説き伏せて正式に大坂遷都を議題にのぼらせている。それが勝の言葉だけでこうも簡単に覆るものだろうか」

「後催眠かね？」

「ええ」

宮田はカシスシャーベットを口中で味わう。

「海音寺潮五郎が勝についてこう言ってます。『勝は幕末維新史に最も大きな影をおとしている。重要な曲り角には必ず彼の力が働いているように私には思われる』」

宮田は〝証明終わり〟（Q.E.D.）とでも言うように静香の顔を見た。

「宮田さん。カシスシャーベットを食べ終わるのはまだ早いわよ」

静香はまだ強気の姿勢を崩してはいない。

「たしかに勝は戦争回避や東京遷都には尽力したのかもしれないわ。でも勝が積極的に徳川幕府を倒そうとした、つまり明治維新の真の黒幕だったなんて証拠は何一つないじゃないの」

静香の言葉に宮田は押し黙っている。

「反論できないようね」

「ごめん。カシスシャーベットが冷たくて喉の奥から頭に向かう部分が痛くなってたんだ」

どうやら宮田はダメージを受けているわけではないようだ。

「徳川軍と官軍がもし実際に戦っていたら、徳川軍が勝っていたんだぜ」

「なんですって」

「官軍という言葉は、天皇の軍という意味だね？　もし徳川軍が勝っていたら、徳川軍の方が官軍になっていた。徳川幕府にしたって形式上は天皇を奉っていたんだからね。勝てば官軍というわけさ」

宮田はホットウィスキーを喉に流し込み、冷痛を和らげる。

「戊辰戦争（鳥羽・伏見）にしたって、兵力は徳川軍の方がだんぜん上だった。薩・長はせいぜい三千五百の兵力しかないのに、徳川軍は大坂だけで一万の兵力を有していたんだ」

松永には意外な事実だった。

「なのに勝は強引に戦争を回避しようとした。これには幕府が雇った陸軍教師のフランス士官、シャノワン少佐も首をひねっているよ。『戦うならば必ず勝つことが出来るであろう』って勝に言っている。海音寺の『江戸開城』を引用してみようか」

貴君には現在これほどの大兵があって、日本国の半ばは君のさしずに従うのではないか。一旦大勝利を得た上で、東国を固守して雄を養い、時機を見て大坂に出て、海陸から薩・長の国許との連絡を絶つならば、敵は手も足も出なくなるであろう。……しかるに、これを捨てて、至難の道をえらんで、家国を保とうとするのか。貴君は訓練十分な兵を用いずして、空しく兵らを怒らせ、貴君の名望を地におとし、敵の術中に陥って、後悔臍をかむにきまっている道をえらぶのか。

「ね？　戦えば絶対に勝つのにどうして戦わないんだってシャノワンも怒っている」

「勝が戦わなかったのは、戦うことによって両軍が疲弊して、西洋諸国につけこまれるのを防ぐためじゃなかったかしら」

「もちろんそうだけど、そのためには徳川幕府が潰れてもかまわないと思っていたことは確か

だろ？」
「そんなこと証拠にならないわよ」
「決定的な証拠はこれから言おうとしていたところだ」
「なんですって」
「調べようとすれば誰でも判ることなのに、まだ誰も取りたてて指摘していない事実をぼくは見つけたんだ」
「ああそうですか。あんたはえらいよ西郷さんだよ上野のお山で立たされ坊主」
「な、なんだいそれは」
さすがの宮田も静香の意味不明の言葉にたじろいでいる。
「早く言いなさいよ。その証拠ってやつを」
「判った」
宮田は気を取り直す。
「決め手は池田屋騒動と蛤御門（禁門）の変にあったんだ」
「池田屋騒動？」
池田屋騒動とは、一八六四年（元治元年）に、新撰組が勤皇の志士たちを襲って名を上げた事件である。
この事件で桂小五郎が偶然難を逃れたのは有名な話だ。
「この時に、望月亀弥太（もちづきかめやた）という志士が死んでいる」

「誰それ」
「この人はね、勝の主宰する神戸海軍塾の塾生なんだ」
「神戸海軍塾というと、竜馬が塾頭だった？」
「そうだ。そこの塾生たちは、竜馬―勝ラインに絶対の服従を誓っている。まちがっても彼らの意向に添わない行動は取らない。つまり、彼らの精神的支配下にあった望月が倒幕の計画を練っていたということは、勝の意向も倒幕にあったことを示している」
宮田は箸で皿の上のポテトピザを切る。
「次に蛤御門の変」
蛤御門の変とは、同じ一八六四年、長州が天皇を奪おうとした、つまり自分たちが官軍になろうとした事件である。
「この戦で勝は、長州側の安岡金馬（やすおかきんば）に、自分の測量器を貸し与えているんだ」
「え」
「戦争において測量器がどれほど大事か君にも判るだろう」
「それは、」
「もし幕府に知れたら死罪は免れない。敢えてやったということは、勝の意志が倒幕にあったことの決定的な証拠だ」
駄目押しのひと言で松永は宮田の奇説に身を委ねた。
「勝にしたところで危機がなかったわけではない。現に大村益次郎や江藤新平は、西郷が勝に

騙されてるんじゃないかと疑っていたし、勝自身も神戸海軍塾が激徒を養成しているのではないかと幕府に疑われて、一時は江戸蟄居を命じられている。思えば幕府に疑われたこと自体、勝が倒幕の黒幕だったっていう最大の逆証明かもしれないな」

宮田は箸をスプーンに持ち替える。

「宮田さん。あなたは勝を過大評価しているのかもしれないわね」

静香が抵抗を試みる。

「明治維新ほどの大きな変革が、個人の力で成就したなんてありえないわ。あのうねりは、当時自然発生的に湧き起こった〝ええじゃないか〟抜きには考えられないんじゃなくて？」

静香がついに隠し球を出した。

〝ええじゃないか〟は〝おかげまいり〟ともいわれ、数十年に一度自然発生する大衆狂乱である。

攘夷運動のさなかに湧き起こり、世論はこの〝ええじゃないか〟とともに急激に倒幕に傾いていった。

また、二百六十年続いた徳川幕府が崩壊することの不安も、〝ええじゃないか〟という言葉で消し飛ばしている。

「〝ええじゃないか〟が起こったきっかけは何だった？」

「お札よ。空から神社のお札が降ったことがきっかけだったのよ」

「そうか。じゃあそれがキイワードの役目を果たしたのかもしれないな」

「え？」

「勝が村の主要な人物数人にこういう後催眠をかけたとする。『空からお札が降ったら、世直しの踊りを踊りまくれ』。鳶職や火消しに顔の広かった勝だから、屋根の上から札を撒くことぐらい朝飯前だろう」

「あ、あなた、〝ええじゃないか〟も勝の仕業だと？」

「さあ、それは判らない。でも世直しの気運を盛り上げる〝ええじゃないか〟がうまい具合に倒幕運動のさなかに起こるなんて都合がよすぎると思ってね」

宮田は溶けかけたカシスシャーベットにスプーンを差し込んだ。

「江戸城無血開城が終わると、〝ええじゃないか〟はピタッと終息したよ。さて、もういいだろうね？　カシスシャーベットを食べてしまっても」

静香は返事をすることも忘れていた。

奇蹟はどのように
なされたのですか？

松永は緊張していた。
客は例の三人しかいない。
自分がここ一か月仕込んできた策略を実行するときが来たのだ。
「静香さんは、奇蹟を信じますか？」
三谷と宮田が松永に顔を向ける。
「それ、宗教的な意味？」
静香が水割りのグラスを見つめたまま訊き返す。
艶のある声を聞いて松永の背中に快感が走った。
松永は静香を、現代の日本における最高の美女の一人だと考えている。
「そうです。もちろん宗教的な意味です」
「信じないわ、奇蹟なんて。どうしてそんなこと訊くの？」
静香が春めいたブラウスの袖を引きながら言った。
「いえ、宮田さんが、」
松永は、静香と空席ひとつ隔ててジンフィズを飲んでいる宮田を視線でさした。
「イエスの復活は真実だったなんていうもんですから」

「なんですって！」
突如、静香が大声をあげた。
「宮田さん、あなた前からおかしな人だと思ってたけど、とうとう妄想が浮かぶようになったのね」
静香の毒舌を聞き慣れているはずの松永も、やはりハラハラする。
「それはないだろう、早乙女さん。世界の多くのクリスチャンはイエスの復活を信じてるんだから」
「おあいにく様。たとえクリスチャンだろうとイエスの復活を本気で信じてる人なんていやしないのよ」
松永はひそかにほくそ笑んだ。
自分の策略が功を奏したようである。
宮田と静香は過去に五度、この店で歴史に関する議論を戦わせている。
そのそれぞれがおもしろく、特に宮田は邪馬台国の所在地や聖徳太子の正体、あるいは明智光秀謀叛の動機について、過去にいかなる学者、作家も推理・指摘できなかった新説を提示している。
ところが松永は一か月前、過去のすべての宮田の説を凌駕するかとも思われる新説を、宮田本人の口から聞いたのである。
その説を以てまた、静香と歴史バトルを戦ってほしい。

そのために松永は大がかりな準備をしてきたのだ。
「たいていの神学者はこういってるわ。――イエスが奇蹟を行ったかどうかは大した問題ではない。重要なのは、イエスが奇蹟を行ったことを大勢の人間が信じたことだ――つまりこれは、イエスが奇蹟を行いはしなかったことの言い訳よ」
「なるほど」
宮田はジンフィズを舐めるように飲んでいる。
「でも、どう考えてもイエスの復活は実際にあったとしか考えられないんだけどな」
「考えるのは自由なんですけど、お願いだからその話題をあたしと三谷先生に振らないでいただけます？　百物語につき合うほどあたしたちヒマじゃないのよ」
「神話や伝説というのは普通、長い年月をかけて創られていくものだろう？　アーサー王伝説しかり、出雲神話しかり」
宮田は静香の言葉を意に介さず話を続ける。
「ところがイエスの復活伝説だけは、彼の死後ただちにできあがってる。おかしいと思わないか？」
「ただちにできたなんてどうして判るのよ」
「パウロの書簡にそうあるからさ」
「さあ、そんなこと書いてあったかしら」
「見てみましょうか」

口に出したのは松永である。
「見てみる？　松永さん、聖書持ってるの？」
「いえ。ちょっとした仕掛けを作ったんですよ」
松永はカウンターの上を片づけて何やら怪しげな装置を据えつけた。
「なんなの？」
「後ろを見てください」
三人が後ろを振り向くと、いつのまにか壁に白い布が張られている。
「いきますよ」
松永の掛け声とともに白い布に文字が浮かび上がる。
「まあ」
「新約聖書です」
松永が取り出した怪しげな装置はスライド映写機、白い布はスクリーンのようである。
店内が薄暗いので文字もよく見える。
「すごいものを作ったじゃないか」
「ハードは単純ですけどね。むしろソフトに苦労しました」
「新約も旧約も入ってるの？」
「ええ」
松永が誇らしげにうなずく。

「どこにあるのかしら、パウロの書簡て」
「早乙女さん。いくら君が仏教徒だといっても、旧約聖書と新約聖書の違いぐらいは知ってるんだろう？」
「あなた、誰にものいってると思ってるの」
静香の唇が小さく震えている。
「旧約聖書」とは、イスラエル（ユダヤ）民族の伝説を集めた神話集のようなもので、ユダヤ教の聖典となっている。天地創造神話から、アダムとイヴ、ノアの方舟など、いずれも旧約聖書のなかの説話だ。そこでユダヤ人たちは、未来永劫エホヴァの神だけを信じる契約をエホヴァの神自身と交わす。もちろんイエスが生まれるはるか以前の物語である。
「新約聖書」の方はイエスの生い立ちや言動などをまとめたもので、イエスの死後四十年ほど後に、マルコ、ルカ、マタイ、ヨハネ等によって書かれた。ここでキリスト教徒達は、イエスを仲介とした新しい契約をエホヴァの神と交わす。
旧約、新約という呼び名はあくまでキリスト教側からの呼び名であって、ユダヤ教側は聖書といえば旧約聖書しか認めていない。
「失礼。しかし君がパウロの書簡の在りかが判らないなんていうから、」
「新約聖書に決まってるでしょうが。パウロはイエスの弟子なんだから。あたしはただ松永さんがそれを捜せるかどうかを心配しただけよ！」
新約聖書は主に三つの部分から成り立っている。

イエスの生い立ちや言動を記した福音書（作者はマルコ、ルカ等）、
イエスの死後、弟子たちの布教の苦闘を描いた使徒行伝、
パウロやペテロの書簡を集めた書簡集、である。
「だいじょうぶです。パソコンと連動させて簡単に検索できるんですよ」
松永の装置は思ったより機能がよさそうだ。
「『コリント人への第一の手紙』を出せるかい？」
「お安いご用です」

――コリント人への第一の手紙第一五章――
キリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目に甦ったこと、ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。そののち、五百人以上の兄弟たちに同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数は今も生存している。そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、そして最後に、月足らずに生れたようなわたしにも現れたのである。

「すごいじゃないか」
宮田の言葉に松永は照れている。

宮田は静香に顔を向ける。
「どうだい」
「なにが？」
「甦ったって明記されてるだろ」
「されてるけど、あなたそれ鵜呑みにするの？」
「信じるものは救われるぜ」
「新約聖書って、邪馬台国の時代より二百年ぐらい昔に書かれたんじゃなかったかしら」
「何がいいたいんだ？」
「魏志倭人伝でさえ内容があやふやなのに、それより二百年も前の聖書の記述に、信憑性があるのかしらということよ」
「なるほど」
「魏志倭人伝どころじゃないわよね。あなたによれば西暦七〇〇年前後の日本書紀でさえ、その内容は鵜呑みにできないんですものね」
「でもこれは書簡だぜ。本人が見たってはっきり書いてるんだ。正直者になれと説くキリスト教があからさまなウソを書くかな」
「判らないわよ、そんなこと」
「でも、五百人以上の人間が目撃してるんだ。しかもパウロはイエスの同時代人だ。もしこれがウソだったら簡単にばれてしまうよ」

「じゃあ、あなたは一度死んだ人間が生き返ったなんて本気で信じてるの？」
「いや、そうじゃない。死んだ人間は生き返りはしない」
「どういうこと？　あなた何がいいたいのよ」
「トリックが行われたということさ」
松永は慎重に静香を盗み見た。
宮田の説の大方はすでに聞いている。
人類史を塗り替えるようなとてつもない仮説だが、説得力がある。
だが、歴史の専門家である静香はその説をどう評価するか。
松永はそれが知りたいのである。
「トリック？」
「そう。もしかしたら人類史上最大のトリックがね」
「大げさね」
「よかったら聞かせてくれないか。そのトリックとやらを」
アタリメをようやく食い千切った三谷が口を開いた。
「先生。そのやさしさが徒になるかもしれないんですよ」
「いいじゃないか早乙女君。時間はたっぷりある」
三谷は首を伸ばして宮田に話を促す。
「ありがとうございます、三谷先生」

「君はイエス復活がトリックだというが、いったいイエスはどんなトリックを使って生き返ったんだい？」
「簡単なことですよ。イエスは死んでいなかったんです」
「あなたバカじゃないの。イエスが十字架で死んだことは、イエスが復活したこと以上に確実なのよ」
「だから、それがトリックなのさ」
「どんなトリックなのよ」
「十字架で死んだのはイエスじゃなかった」
「なんですって」
「そうとしか考えられないだろ」
「十字架でイエスが処刑されたのは史実よ」
「だからそれがイエスじゃなかったのさ」
「じゃあ誰なのよ」
「候補者はひとりしかいないだろ？」
開いた口が塞がらないといった体の静香の前に、松永がさりげなく水割りのお代わりを置く。
「2マイナス1イコール1さ」
「何のこと？」
「単純な計算。答えの1が十字架上で死んだ人間の正体さ」

「回りくどい言い方やめなさいよ」
「つまりこういうことだ。イエス処刑に関する死体は全部でいくつある？」
「処刑されたイエスと、（イエスを売った罪の意識から自殺した）ユダ、この二体ね」
「そう。でも死体は実際にはひとつしかなかった」
「なんで判るのよ、そんなこと」
「松永さん。ルカによる福音書第二四章を出してくれ」
松永が装置を操作する。

夜明け前に、女たちは用意しておいた香料を携えて、墓に行った。ところが、石が墓からころがしてあるので、中に入ってみると、主イエスの体が見当たらなかった。

「ご覧の通り、イエスの死体はすでになくなっていた。つまり、二人の人間が死んだのに、死体はひとつしかないんだ」
「ひとりは死んでなかったということかね？」
「そうなんです」
宮田は水割りで喉を湿らせた。
「最初から最後まで死体はひとつしかなかった。それを、イエスの死体として使ったり、ユダの死体として使ったりしていただけなんです」

「いま言っている死体というのは、十字架上で死んだ死体のことかね？」
「そうです」
「十字架で死んだのはイエスだって言ったでしょ」
「ちがう」
「じゃあ誰なのよ」
「判らないかい？」
「判りたくもないわよ」
「簡単なことなんだけど」
「誰なんだい、宮田君」
三谷が宮田に訊いた。
「ユダです」
静香が水割りを吹き出した。
「まさかそのジョークを言うためにあたしの貴重な時間を割いていたんじゃないでしょうね」
「ジョークじゃないよ。真面目な話だ」
「あなた、十字架で死んだのはイエスじゃなくてユダだっていうの？」
「君の理解力には敬意を表するよ」
「もし真面目に言ってるのなら、そうね、今度こそいい先生を紹介するわ。異常心理学の分野では有数の人よ」

「そう考えれば辻褄が合うということさ。十字架で死んだあと埋葬されたユダの死体を墓から取り出して、それをまたユダの死体として使ったんだ。本来ふたつなければいけない死体がひとつしかないもんだから、ユダの死体が一人二役の大活躍をしたというわけさ」
「誰がそんな七面倒臭いことしたっていうのよ」
「十二使徒に決まってるだろ」
「十二人が共謀してユダを嵌めたっていうの？」
「ユダが抜けてるから十一使徒だけど、そうか、イエスを含めれば十二人になるね」
「そんなことあるわけないでしょ。もし十字架にかけられたのがユダなら、なぜユダはそのことを十字架上で言わなかったのよ」
「このトリックはそもそもユダが仕組んだものだからさ」
宮田はなぜか寂しげな笑みを浮かべている。
「まったくあなたってよくへ理屈を思いつくもんね。なんでユダが、十二使徒が、イエスまでが、そんなことしなければならないのよ」
「つまり動機だね？」
「動機？　そんなたいそうなもんじゃないわよ」
「イエスの教団は、復活を演じなければならない状況に追い詰められていたからさ」
「勝手に話すすめないでくれる？」
「そもそも君は、イエスがなぜ処刑されたのか知ってるのかい？」

「さあ。なにか悪いことでもしたんでしょ」
宮田は首を横に振った。
「どうやら根本的なことから話さなきゃならないようだな」
松永は操作の合間に宮田の前にも水割りを置く。
「いくらキリスト教に詳しくないといっても、イエスが固有名詞でキリストが普通名詞だということぐらいは知ってるんだろ？」
代々仏教徒の松永は宮田に聞くまでそのことを知らなかった。
彼はイエスが苗字でキリストが名前だと思っていたのである。
イエスは固有名詞だが、キリストは救世主という意味の普通名詞である。
「三つ数えるまでにその減らず口をやめないと脳天叩き割るわよ」
松永は静香の言葉に一瞬、思考が止まる。
「失礼。しかしイエスの処刑の理由が〝なにか悪いことをした〟なんていう認識じゃあ、」
「あたしはねえ、宗教的な意味でなにか悪いことをしたんじゃないかって言ったのよ」
「そうか。それを聞いてひとまず安心したが」
宮田は水割りを喉に流し込む。
「君の言う通り、イエスの犯した罪はユダヤ教の律法（トーラ）を冒瀆したことだ」
三谷が同意の意味で相槌を打つ。
「この時代のユダヤ人はイエスも含めて全員ユダヤ教徒なんだけど、その中にもいろいろ宗派

があってね。サドカイ派とパリサイ派というふたつの宗派がユダヤ教の主流派だった」
静香は松永から三色ソーセージを受け取る。
「サドカイ派とパリサイ派は律法を厳守するいわば保守派だった。この律法というのはね、安息日には排泄もしてはいけないなんていうばかげたものだよ」
「知ってるわよ」
「ところがイエスはこの律法を敢然と無視した」
「安息日に病人を癒したりね」
「ほう。少しは知ってるじゃないか」
「バカにしないでよ」
「これはね、われわれから見るとなんでもないようなことだけど、保守派にとってみれば、働くことを禁じられている安息日に病人を癒すなんてことは、冒瀆以外のなにものでもなかったんだ」
「それで、冒瀆罪で処刑されたってわけでしょ」
「そうだ」
「でも、ユダヤ教徒だったイエスがどうして律法を無視したのかしら」
イスラエルに生まれたイエスももちろんユダヤ教徒だった。
「それってぼくの知識を試してるのかい？」
「さあね」

「まあいいだろう。説明しよう。ユダヤ教徒にとって最も大切な律法を無視したところにイエスの天才性があるんだが、ぼくはイエスがエッセネ派だったことも忘れてはいけないと思う」
「エッセネ派？」
「そう。もちろんイエスがエッセネ派だっていうのはぼくの推論にすぎないけれど」
「エッセネ派ってなによ」
「教義があまりにも異端だからサドカイ派やパリサイ派に追い出されてしまったユダヤ教の一宗派さ」
「異端ってどういうこと？」
「彼らは洗礼という特異な入信の儀式を持っていた」
「洗礼が特異なわけ？」
「そうだよ。これはユダヤ教のサドカイ派やパリサイ派にはないものなんだ」
「それ、聖書に載ってるの？」
「聖書には書かれていない。エッセネ派のことが広く知られるようになったのは死海文書の発見からだよ」
「死海文書……」
「一九四七年に、死海の畔のクムランの洞窟から発見された、エッセネ派が書いたと思われる写本だよ」
松永はすでに宮田から死海文書についての話を聞いている。

その際に、死海の大きさが琵琶湖の一・五倍もあることを初めて知った。
「それ、聖書？」
「聖書の原版の一部と考えていいだろうね。死海文書の中には旧約聖書イザヤ書と本質的にまったく同じ写本が出てきているから」
宮田は水割りを飲む。
「この死海文書を書いた人たちは、バロウズやデュポン・ソメール等の多くの学者達によってエッセネ派と断定されているから、ぼくもエッセネ派として話を進めるよ」
「その点についてだけは異存はないわよ」
「じゃあいくけど、エッセネ派の指導者は〝義の教師〟と呼ばれていた」
「義の教師……」
「うん。で、死海文書によるとこの義の教師は、エルサレムのユダヤ教主流派から迫害を受け、十字架にかけられて死んでいる」
静香は宮田の言ったことの意味を噛み締めるように沈黙した。
「しかもエッセネ派の信者たちは処刑された義の教師がやがて復活すると信じていた」
「復活……」
「そればかりじゃない。エッセネ派の信者たちは自分たちの教団を〝新しき契約〟と呼んでいたんだけど、この言葉はまさしく新約聖書の新約と同じ意味だよ。なおかつ義の教師を信奉する者たちは、世の終わりが迫っていて、義の教師を信じた者だけが救われると信じていた」

「つまりあなたは、エッセネ派と原始キリスト教団がイコールだっていいたいの？　義の教師イコール、イエスだと」
「イコールというか、エッセネ派が原始キリスト教団の母体になったのだと思う。デュポン・ソメールも同じ意見だよ。まずいことにね」
「何がまずいのよ」
「まずいだろう？　イエス以前、もしくは同時期にイエスと同じような伝説があっちゃ」
「さあ、関係ないわね。あたくし仏教徒ですから」
「まあいい。で、いよいよ動機の説明だけど」
宮田は静香を見つめた。
「イエスの教団――当時の彼らに自分たちがキリスト教だという認識はなかったからね。自分たちはあくまでユダヤ教の中のエッセネ派だと思ってた――は、律法（トーラ）無視の罪でパリサイ派からつけ狙われていた。このままだとイエス処刑は時間の問題だ」
「で？」
「一方、ユダはユダで、イエスは処刑されなくてはならないと真剣に思い込んでいた」
「また判らないこと言うわね」
「エッセネ派は義の教師の復活伝説を持っていたって言っただろ？」
「義の教師イコール、イエス……」
「そう。イエスがいったん処刑されて復活しなければ、自分たちの教義は嘘ということになっ

てしまう」
「嘘でもいいじゃないの」
「でも、遅かれ早かれイエスはパリサイ派によって処刑されてしまうんだよ。どうせ処刑されるんなら、義の教師の伝説に則った方がいい」
「たとえそうだとしても、イエスが処刑されればいいじゃない。なんでユダが身代わりにならなければいけないのよ」
「イエスが天才だったからさ」
三谷は黙々とアタリメと格闘している。
「ユダヤ教においてはエホヴァの神は恐ろしい神だった。しかもユダヤ民族だけの神だったんだ。ユダヤ民族以外は皆殺しにしてしまえなんて旧約聖書に出てるからね。でもイエスはその残酷な神の概念を、やさしい慈悲の神に変えたんだ」
「イエスの基本概念は愛……。そんなことゾロアスター教徒だって知ってるわよ」
「だからイエスは天才なのさ。イエスによる方向転換がなかったらキリスト教の広まりはなかった筈だ。それほどの天才を死なせてはいけないと、ユダは真剣に思ったに違いない」
「だからといって、どうしてユダが犠牲にならなければいけないのよ」
「ユダがこの計画を思いついたからだろう。言いだしっぺが犠牲になるのは心理的にいっても当然だろ？」
「ユダってそんなにリーダーシップがあったのかしらね」

「十二使徒の中じゃイエスに次ぐナンバー2だろう」
「そんなことないでしょ。ユダは裏切り者なのよ」
「それはユダを含めた十二使徒の芝居に君（あるいは全人類）がまんまと騙されてるのさ」
「どうしてそんなことが言えるわけ？」
「ユダはイエスの教団の会計を任されていたんだぜ」
「会計を……」

——ヨハネによる福音書第一三章——
ユダが金入れを預かっていた。

「うん。実は十二使徒のメンバーは無学な人たちばかりだった。ペテロにしろヤコブにしろガリラヤの漁師だからね。現代はどうか知らないけど、この時代の漁師たちはみんな素朴な人たちばかりさ。そんな中で会計を任されていたということは、おそらくユダはインテリだったんだろう。旧約聖書やエッセネ派の教典にも通じていたに違いない」
静香はさりげなく生ハムを注文する。
「ユダはもともとエッセネ派の幹部だったんだと思う。そこへイエスが加わった。ユダはすぐにイエスの天才に気がついた。ユダヤという狭い地域にこだわっていたユダヤ教を、イエスなら全世界に広められると直感した。だから、パリサイ派から迫害の手がイエスに伸びはじめた

ときは夜であった。

――ヨハネによる福音書第一三章――

ユダは一切れの食物を受け取ると、すぐに出ていった。

「でもね、ユダは最後の晩餐の途中で隠れ家を飛び出しているんだよ」

宮田が水割りのお代わりを頼もうとすると、すでに松永は新しいグラスを差し出していた。

と答えている」

もちろん警備隊に尋問されたペテロは『イエスなんて人は知りません。わたしは無関係です』

山に向かった。そこへユダから場所を教えられた神殿警備隊がやってきてイエスを逮捕した。

「そう。これはペテロの裏切りといえる。そのあと夜になってイエス一行は町を出てオリーブ

「ペテロが神殿警備隊に『イエスを知っているか?』って訊かれたときの話ね」

いと言うだろうことまで予言している」

でイエスは、ユダが自分を裏切ることを予言している。それに加えて、ペテロが自分を知らな

「この日は有名な最後の晩餐があった。隠れ家で、イエスと十二使徒が食事をしたんだ。そこ

「これがなにか?」

連れ、たいまつやあかりや武器を持って、そこへやってきた。

からである。さてユダは、一隊の兵卒と祭司長やパリサイ人たちの送った下役どもを引き

ユダはその所をよく知っていた。イエスと弟子たちがたびたびそこで集まったことがある

そこには園があって、イエスは弟子たちと一緒にその中に入られた。イエスを裏切った

を教えている。ヨハネによる福音書第一八章を出してくれ」

「イエス裏切りの場面さ。ユダはイエスを裏切って、パリサイ派神殿警備隊にイエスの居場所

「なにそれ」

「ユダはなぜ、イエスの居場所を知っていたのか?」

「たとえば?」

「そう。新約聖書にはさまざまな疑問点があるからね」

「疑問点?」

「でもこう考えれば、新約聖書のなかの疑問点がすべて解消される」

「おもしろいお話ですけど、全部あなたの推測にすぎないんじゃなくて?」

「その通りだ」

クによって一挙に解決したとおっしゃるわけ?」

ッセネ派は信頼を失ってしまう。というふたつの切羽詰まった難題を、ユダの計画したトリッ

い。(2)また、エッセネ派の伝説である義の教師の復活を、なんとしても実現しなければエ

「つまりあなたは、(1)パリサイ派によって処刑確実な天才イエスを、なんとしても守りた

ときに、なんとしてもこの人を守らなければならないと思ったんだ」

「そのユダがどうしてイエス一行の居場所を知ってるんだい？」
「あなたって本当にバカね。ヨハネによる福音書第一八章をよく見てごらんなさいよ。ユダはその場所をよく知っていたのよ。最後の晩餐の後にそこへ行くことがあらかじめ決められてたんじゃなくて？」
「夜中にかい？」
「夜中？」
「そう。イエスがオリーブ山で逮捕されたのは夜中だよ。普通、夜中に山なんて登るかな」
「イエスは最後の晩餐の席で予知能力を発揮したんでしょ。イエスはその予知能力で、今日ユダが自分を裏切ることを知っていた。だからその日の食事が最後だってことも感じていて、最後の日だから、なにかの儀式として山に登ったんじゃないの？」
「君はイエスの超能力を信じてるのか？」
「それは……」
「ユダが自分を裏切ることが判っていたのは、超能力と考えるより、それが計画されたことだったからと考えるほうが自然じゃないかな」
静香は口にした生ハムを思わず呑み込んだ。
「ペテロの裏切りの予言もそうだ。これらは予言ではなくて、計画の再確認と考えれば納得がいく」

静香の表情が真剣なものになっている。それは、生ハムをよく味わわないうちに呑み込んでしまったことを残念がっているようでもあった。
「だって聖書に『予言した』って書いてあるんでしょ？」
「聖書の記述を言葉通りにとってはいけないと言ったのは君の方だよ」
「う」
静香は今度はこんにゃくサラダを喉に詰まらせたようだ。
「聖書の記述はなんらかの暗示と捉えるのが妥当だろうね」
「計画されたことにしたって、どうしてイエスは山になんか登ったのよ」
「隠れ家を提供してくれた人に迷惑をかけたくなかったからだろう」
宮田は静かに答えた。
「宮田君の言うことを聞いていると、本当にイエスとユダの死体入れ替えトリックが行われたかのような錯覚に陥りそうだ」
三谷が冷静な意見を言う。
「錯覚じゃないんです。超能力を信じるよりよっぽど合理的な解釈ですよ」
「でも、あなたの説には致命的な欠点があるわね」
「へえ。そうかな」
「だってそうでしょ？　いくらユダがイエスを生かす計画を立てても、当のイエスがそれを許すかしら」

「当時の宗教家にとって死は今よりずっと身近なものだった。だからユダの特攻隊的な覚悟は充分納得できる」
「あたしはイエスの心境を言ってるのよ！」
静香が本領を発揮しはじめた。
「旧約聖書の列王記下にはこういう話が載っているよ。モアブの王が戦に勝つためにわが子を犠牲に捧げたと」
「わが子を？」
「当時の感覚じゃ珍しくないさ。旧約聖書創世記にしたって、アブラハムがエホヴァの神にわが子を犠牲に捧げようとした話が載っている。つまりわが子でさえ神のためには捧げてしまうぐらいの人たちだから、弟子の一人を捧げたところで驚くにはあたらないだろう？」
「なるほど。たしかにそうだ」
「先生」
「われわれ農耕民族には理解できないかもしれないけど、ユダヤ民族の神というのはもともと羊などの生きた動物を生贄にすることを慣習としてきたんだ。ユダ自身も自分が尊い生贄になることに宗教的な喜びさえ感じていたに違いない」
静香は溜息をついた。
「どうして弟子たちは誰ひとりとしてイエスを助けに行かなかったのか」
「え？」

「なに、聖書のもうひとつの謎さ」

――マルコによる福音書第一四章――

弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った。

「しょうがない弟子たちね」
「いや、そういう問題じゃない。イエスの弟子たちというのはみんなイエスの処刑後に教義のために殉死するような強い信念の持ち主たちだよ。そんな強い人たちの行動としてはこの記述は腑に落ちないと思わないかい？」
「あなた何が言いたいの？　まさか弟子たちがイエスを見捨てて逃げ去ったのも計画のうちだったなんて言いだすんじゃないでしょうね」
「そのまさかだ」
三谷が考え込んでいる。
「イエスの超能力を信じるかどうかで解釈が違ってくるのかな？」
「そうです。イエスがあらかじめユダやペテロの裏切りを知っていたのは、超能力のせいなのか、それとも計画されたことだったからなのか」
「あなたはどうせ計画されたことだって言うんでしょうね」
「もちろんだ」

「でも、現実問題として、はたしてそんなことが可能かしら?」
「どういうことだい?」
「たとえばイエスの死体。あなたの説だとユダの死体ってことになるんでしょうけど、それを墓から勝手に掘り出すなんてできるのかしら。神殿警備隊が見張りをしていなかったの?」
「衆議会の議員であるヨセフという人物が、突然ユダヤ知事を訪ねて、イエスの死体を引き取りたいと申し出ている。イエスの死体はこの議員の所有している墓地に埋葬された」
「じゃあ、ますます掘り出すのは困難じゃない」
「ところがルカによる福音書にそのヨセフという人物についてこういう記述がある」
松永が宮田と息の合ったところを見せてその箇所を映し出す。

——ルカによる福音書第二三章——
ここに、ヨセフという議員がいたが、善良で正しい人であった。この人はユダヤの町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいた。彼は議会の議決や行動には賛成していなかった。

「つまりこの人物はイエスの信者だった」
「ふん」
「なぜこのヨセフという人物はわざわざイエスの死体を引き取ったりしたんだろう」

——ルカによる福音書第二三章——
この人がピラトの所に行って、イエスのからだの引取り方を願い出て、それを取りおろして亜麻布に包み、まだだれも葬ったことのない、岩を掘って作った墓に納めた。

「イエスの死体を自分の管理下に置きたかったからなのかな?」
「その通りです。この死体入れ替えトリックにはどうしてもヨセフという人物の協力が不可欠だったんです」
「ユダが自分の死を懸けてまでイエスを守ろうとしたなんて信じられないわ」
「イエスは神殿警備隊に捕まった時こう呟いている」

——マルコによる福音書第一四章——
聖書の言葉は成就されなければならない。

「あたくしユダのことを言ってるんですけど」
「イエスとユダは入れ替わってたんだから、これはユダの言葉じゃないか」
「あ、そうか」
そう言ってから静香はバツが悪そうに水割りを一気飲みした。

「でも、この言葉は意味不明なんだ。新約聖書なんてもちろん無かった時だからここでいう聖書は旧約のことだけど、旧約にはイエスが捕まるなんてことが書いてあるわけないだろう?」
「書いてあるわよ」
「旧約ができた時はイエスは生まれてなかったんだぜ」
「予言として書いてあるのよ」
「ぼくにはこじつけに思えるね。それよりここでいう聖書の言葉というのは、エッセネ派の伝説のことだと考えて初めて意味が通じる」
静香は三谷のアタリメに手を伸ばす。
三谷は少しむっとする。
「エッセネ派の伝説は成就されなければならないとユダが思い詰めていたということかしら」
「そう考えて初めてこの言葉がぴたりとはまるんだ」
宮田の顔には説明を終えた安堵感のようなものさえ漂いはじめている。
「無理ね」
静香の口許に妖艶な笑みが浮かぶ。
それを見た松永の背中に電流のようなものが走る。
「なにが?」
「無理なのよ」
「だからなにが」

「ユダがイエスの代わりに十字架にかけられたってお話」
「何を言ってるんだ。それが可能だってことをさんざんぼくが説明しただろう?」
「でも、無理なんですもの」
「無理じゃないさ」
静香がこらえ切れなくなったという体で笑いだす。
「はっきり言ってくれないか。いったいどこが無理なんだ」
「ごめんなさい。からかうつもりはなかったの。でも、あなたが本気で話してるみたいだったから、あたしもつい本気で聞いてる振りなんかしちゃって」
三谷が困ったような顔をしている。
「最初っから無理でしょ。こんな話」
「どうして」
「いい? イエスは有名人なのよ。エルサレムにはイエスを知ってる人が大勢いるわ。その人たちの目をどうやって欺くのよ!」
静香は宮田に恨みでもあるかのような口調で言葉を叩きつけた。
松永ははっとした。
仏教徒の松永が見落としていたあまりにも根源的な矛盾点。
さすがの宮田もこれには反論の余地はないものと思われた。
「なんだ。そんなことか」

宮田は静香の口調も意に介さないかのように平然と水割りを飲んでいる。
「イエスは君が思ってるほどの有名人だったのかな」
「どういうことよ」
「君はイエスの宣教活動期間が二年間にも満たなかったのを知っているか？」
「あら、そうだったかしら。意外と短いのね。でもそれがどうかして？」
「イエスが生まれたのはガリラヤだ。二年間の伝道の場もガリラヤが主だった」
新約聖書によればイエスの生誕の地はベツレヘムとなっているが、これは、「ユダヤ民族のメシアはベツレヘムに生まれる」という伝説に由来するにすぎない。
実際にはイエスは「ナザレのイエス」と呼ばれているように、ガリラヤ地方のナザレという村で生まれたのだ。
「でもエルサレムにも来たじゃない。エルサレムで当然多くの人間に伝道した筈だわ。その大勢の人間を欺くなんて、どう考えたって無理よ」
たしかにそうだ。
松永の心に虚脱感が漂う。
やはりこのトリックは、宮田の勇み足だったのか？
「イエスはある方法でその無理をやり遂げたのさ」
「どんな方法よ」
「変装ですか？」

「イエスは生身の人間だ。ルパンや二十面相じゃない。変装で大勢の人間の目を欺くなんて無理だよ」
「十字架上のユダがずっと顔を隠していたとか」
「聖書にはそんな記述はないよ」
「じゃあ、いったいどうやって大勢の人間の目を欺いたんです」
「イエス一行がエルサレムに来たとき、すでにイエスとユダが入れ替わっていたとしたら？」
「なんですって」
「ここで念のためにイエスの伝道活動を振り返ってみようか」
松永が三人に均等に水割りを置く。
「イエスは紀元前四年頃ガリラヤ地方のナザレという村に生まれた」
「そう考えて差し支えないだろう」
三谷が解説者ふうの口調で言う。
「父親はヨセフという大工で、母親はマリア。兄弟は何人いたか不明。西暦二八年頃、イエスは家を出て、死海畔のヨハネ教団に身を投じ、ヨハネから洗礼を受ける」
「イエスが洗礼を受けたの？」
「知らなかったのか？」
「し、知ってるわよ」
「ところがこのヨハネというのがおそらくエッセネ派だったんだろうね。ユダヤ教主流派に目

をつけられて捕らえられ、獄中で死んでしまった」
「それでイエスが跡を継いだの？」
「いや。この事件をきっかけにイエスはガリラヤに帰ってしまったんだ」
「まあ」
「イエスはガリラヤで伝道活動に入る。だからイエスの活動地域はエルサレムではなくてガリラヤなのさ」
「でも、エルサレムにも行くんでしょ」
「行くことは行くけど、その行き方がちょっと変なんだ」
「宮田君は宮清め事件のことを言ってるのかい？」
「そうなんです」
「何なのよ、その宮清め事件っていうのは」
「イエスはエルサレムに入って三日目に、ユダヤ教のシンボルである神殿で暴挙を働いたんだ」

――マルコによる福音書第一一章――

彼らはエルサレムに来た。イエスは宮に入り、宮の庭で売り買いしていた人々を追いだしはじめ、両替人の台や、鳩を売る者の腰掛けをくつがえし、また器ものを持って宮の庭を通り抜けるのをお許しにならなかった。

「これはイエスのユダヤ教に対する宣戦布告だ」
「どうしてもともとユダヤ教信者のイエスがユダヤ教に宣戦布告するの？」
「ユダヤ教の古くさい律法（トーラ）を打破したかったからさ」
静香は誰よりも早く水割りを飲み乾している。
「だからといって、イエスがユダヤ教をすべて否定したわけじゃない。ユダヤ教の唯一神であるヤハウェ（エホヴァ）のひとり子なんだからね、イエスは」
「そんな基本的なことはどうでもいいから先を続けて」
「結局この事件がイエス逮捕のきっかけになったんだけど、何か変だと思わないか？」
「なによ」
「イエスらしくないということさ。両替人の台や、鳩を売る者の腰掛けを覆すなんて」
「酔っぱらってたのかしら」
「この時すでにイエスとユダが入れ替わってたのさ」
「あなた講釈師みたいにお話が上手ね」
「この行動は、イエスの博愛主義からするとどうもそぐわない。わざとらしさが感じられる」
「わざとだというの？」
「そうだ。ユダが、逮捕されるためにわざとやったんだ」
「どうしてそんなことが言えるわけ？」

「そもそもイエスがなぜガリラヤからエルサレムに来なきゃならなかったのか、考えてみればいい」
「なぜなのよ」
「ガリラヤじゃ、それこそイエスは有名人だったからさ」
あっと松永は小さな声を出した。
イエスとユダの入れ替えは、誰もがイエスの顔を知っているガリラヤでは不可能だ。だから彼らはガリラヤからエルサレムに移動する必要があった。
「イエス一行は、あらかじめイエスとユダを入れ替えてエルサレム入りしたんだ。そこで予定どおり宮清め事件を起こす。その後、四月十三日、最後の晩餐において計画の最終確認をして、イエス（つまりユダ）逮捕へともってゆく」
「福音書によると最後の晩餐は三部に分かれているね」
「そうです。ひとつはイエスがパンと葡萄酒とを取って『これは自分のからだ、自分の血である』と言った聖体の秘儀。第二はイエスが自分の逮捕を予言する部。第三はユダの裏切りとペテロの裏切りが予言される部」
「これは、」
「そう。第一部は十三人は一心同体であるという確認。第二部、第三部は計画の確認と考えれば説明がつく」
「ユダの役をやったのは誰なの？」

「イエスだろ」
「イエスがそんな役を引き受けるかしら」
「当然、葛藤があっただろう。だが最後はやっぱりユダに説得された」

——ヨハネによる福音書第一三章——
イエスは彼（ユダ）に言われた、
「しようとしていることを今すぐやるがよい」

「これはユダがイエスに言ったと読み替える必要がある」
「その後イエス（ユダ）一行はオリーブ山に行って、ユダ（イエス）の先導する神殿警備隊に捕まるんだね」
「そうです。でもここでも彼らは解せない行動をします」

——マタイによる福音書第二六章——
（イエスは）それから弟子たちの所に帰ってきて、言われた、
「まだ眠っているのか、休んでいるのか。見よ、時が迫った」
「オリーブ山に行って弟子たちは全員眠ってしまうんです」

「たしか遠藤周作の著作の中にも〈彼等がなぜ眠りこけてしまったのかは私にもよくわからない〉という記述があった筈だね」
「そうです。でもこれは、イエス（ユダ）を逮捕させるため、と考えれば説明がつくんです」
三谷は考え込んでいる。
「そして予定どおりペテロがイエスを否定します」

――マルコによる福音書第一四章――

「たしかにあなたは彼らの仲間だ。あなたもガリラヤ人だから」
しかし彼は「あなた方の話しているその人のことは何も知らない」と言い張って、激しく誓い始めた。するとすぐにわとりが二度目に鳴いた。ペテロは、「にわとりが二度鳴く前に三度わたしを知らないというであろう」と言われたイエスの言葉を思い出し、そして思いかえして、泣き続けた。

「これは、計画の遂行とともに、イエスの身代わりになって捕まったユダを思って泣いたんだろう」
「そしてイエスは捕まり、翌日、十字架にかけられるわけか」
「ねえ。あたし決定的なこと思い出しちゃったわ」
静香が満を持して発言した。

「たしかユダって、イエスが処刑される前に死んだんじゃなかったかしら」
松永は再びはっとした。
それが本当なら、死体入れ替えのトリックは意味をなさなくなる。
「それ、マタイによる福音書に書いてあるんだろ」
「決定的じゃない」
「使徒行伝には、ユダは生き延びてイエスを売った報酬で土地を買ったあと死んだって出てるぜ」
「どっちが本当なの？」
「四つある福音書のうちユダの消息に触れたものがマタイによる福音書だけだということは、ユダの消息についてはかなり意図的にぼかされてると考えていいと思う」
松永はなぜかほっとした。
「なぜ意図的にぼかされたのか」
「それは、生き延びたユダ（つまりイエス）の正体を知られたくなかったから」
松永が唐突に口を挟んだ。
「その通りだ」
「じゃあお訊きしますけど、生き延びたイエスはその後なにをしたっていうの？」
「ステファノになった」
「なにそれ」

「ステファノはイエス処刑後にキリスト教団に加わった使徒のひとりさ」
「だから何者なのよ。そのステファノという奴は」
「遠藤周作の『キリストの誕生』という本に、彼のことがこう紹介されている」

ステファノが原始キリスト教団の発展のために果したあまりに大きな役割を決して軽視できぬ筈である。それまでエルサレムのなかで対立者であるサドカイ派に怯えつつ、ほそぼそと宣教していた使徒たちを彼は根底からゆさぶった男なのである。
しかしこのステファノの経歴も年齢も過去の職業もまったく、わからない。

「それだけであなたはステファノなる人物がイエスの変名だと断定してしまうわけ？」
「ステファノもイエスと同じように最後はユダヤ教のシンボルであるエルサレムの神殿を否定する発言をして、ユダヤ人たちに殺されたと聖書には出ている」

――使徒行伝第七章――
「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、彼（ステファノ）は眠りについた。

「これはイエスの死を描いた、ルカによる福音書と酷似している」

――ルカによる福音書第二三章――
そのときイエスは言われた。「父よ、彼らをお許しください」

「だからどうだっていうのよ」
「使徒行伝を書いたのはルカなんだぜ。つまりルカはステファノがイエスであると知ってたんだ。だから彼はイエスとステファノを同列に扱うことによって、真実を後世に残そうとしたんだ」
ユダが自分の身代わりになって処刑された後、イエスはステファノになった。
そしてイエスと名乗ったとき以上の情熱をもってキリスト教布教に邁進した。
そして、最後はやはり処刑された。
松永はこれで説明されたのではないかと思った。
十字架で処刑されたのがイエスではなく、実はユダであったことが。
「イエス一行がエルサレム入りする直前に、マルコはこういう記述を残している」

――マルコによる福音書第九章――
イエスは、ただ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変わり、その衣は真白く輝き、どんな布さらしでも、それほ

どに白くすることはできないくらいになった。

「今の君ならこれが何を表しているか判るだろう」
「エルサレム入りする直前に、イエスとユダが入れ替わったことを表しているんだね？」
静香の代わりに三谷が答える。
「そうです。同じ章の少し後にはこういう記述もあります」

それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤを通って行ったが、イエスは人に気付かれるのを好まれなかった。

「つまりガリラヤではイエスは有名人だからね。すでにユダとの入れ替えを終えた自分に気づいてほしくなかった」
宮田は水割りを飲み乾した。
「なにげなく読み流していた聖書の記述に、たいへんな真実が隠されていたというわけか」
三谷も水割りを飲み乾す。
「あなた、もしそれが本当なら、世界史がひっくり返るわよ」
静香も水割りを飲み乾す。
「ユダはぶどう園の出身じゃないかと思うんだ」

「ぶどう園？　この期に及んでなに変なこと言いだすのよ」
「いや、ユダはイスカリオテのユダと呼ばれているんだけど、昔からこのイスカリオテという言葉の意味は解明されていない」
「そうだね。ある学者はイスカリオテとは地名だといい、ある学者は短剣を表しているなどという」
「そうです。結局のところ、言葉が古すぎて学者たちにも判らないんですよ」
「君はイスカリオテがぶどうを表すと考えているのかい？」
「ええ」
「その根拠は？」
「ヨハネによる福音書の記述です」
松永が宮田の意を汲んでスクリーンに聖書の一節を映し出す。

――ヨハネによる福音書第一五章――
わたしは誠のぶどうの木、わたしの父は農夫である。

「これ、イエスの言葉なんだけど、おかしいと思わないか」
「おかしいわね。イエスの父は大工なんだから」
「そう。この言葉を説明できない学者たちは、これを単なる比喩として片づけている。でも、

この時すでにイエスとユダは入れ替わってるんだから、この言葉をユダの言葉として考えれば矛盾しない」
「それが、ユダをぶどう園出身だと考える根拠なの？」
「そうだよ。そう考えて初めて、聖書最大の謎を理解することができる」
「聖書最大の謎？　何のこと？」
「最後の晩餐における、イエスの最も有名なセリフさ」

――マルコによる福音書第一四章――

一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取れ、これはわたしの体である」また杯を取り、感謝して彼らに与えると、一同はその杯から飲んだ。イエスはまた言われた、「これは、多くの人のために流すわたしの契約の血である。あなた方によく言っておく。神の国で新しく飲むその日までは、わたしは決して二度と、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない」

「これのどこが謎なのよ」
「いいかい。この時すでにイエス（ここには身内しかいないからユダに入れ替わってはいないよ）は、自分が翌日処刑されることを予言していたんだよ」
「そうよ」

「だったらこの言葉はおかしくないかい？〈神の国で新しく飲むその日までは、わたしは決して二度と、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない〉」
「なんで？」
「翌日死ぬんなら、わざわざ〈決して二度と、ぶどうの実から造ったものを飲むことをしない〉なんて言う必要ないだろ？」
「言われてみればそうね」
「これは、イエスが処刑されないで生き延びる計画だったことを表してるんじゃないかな」
静香と三谷は、自分の飲み物がなくなっていることにも気づいていないかのようだ。
「そしてこの決意は、自分の身代わりに死にゆくユダへの思いも表している」
「そうか。ユダがぶどう園出身だから、ユダを象徴するぶどう酒を二度と口にしない……」
「そうです。聖書には、これだけの真実が隠されているんです」
言葉を失った静香と三谷の前に、松永が無言でワインを出した。

参考書籍

「悟りを開いたのはいつですか？」
『釈尊のさとり』増谷文雄（講談社学術文庫）
『仏教誕生』雲井昭善（平河出版社）
『ブッダの世界』玉城康四郎・木村清孝（ＮＨＫブックス）
『釈尊の生涯』中村元（東京書籍）
『ブッダ入門』中村元（春秋社）
『お釈迦さま百科』（大法輪選書）
『般若心経詩訳』菊村紀彦（読売新聞社）

「邪馬台国はどこですか？」
『邪馬台国の秘密』高木彬光（角川文庫）
『新説邪馬台国の謎殺人事件』荒巻義雄（講談社文庫）
『新版卑弥呼の謎』安本美典（講談社現代新書）
『卑弥呼の金印探し』大川誠市（徳間書店）
『日本人の起源』埴原和郎編（朝日選書）
『魏志倭人伝他三篇』石原道博編訳（岩波文庫）
『日本地名ルーツ辞典』池田末則・丹羽基二監（創拓社）
『井上靖詩集』清岡卓行編（彌生書房）

「聖徳太子はだれですか？」
『聖徳太子はなぜ天皇になれなかったのか』遠山美都男（大和書房）
『聖徳太子はいなかった』石渡信一郎（三一新書）
『聖徳太子の正体』小林惠子（文春文庫）
『神々の体系―深層文化の試掘』上山春平（中公新書）
『日本書紀』上・下　宇治谷孟（講談社学術文庫）

「謀叛の動機はなんですか？」
『信長の戦国軍事学』藤本正行（ＪＩＣＣ出版局）
『信長と天皇』今谷明（講談社現代新書）
『天皇と天下人』今谷明（新人物往来社）
『織田信長―中世最後の覇者』脇田修（中公新書）
『信長公記』奥野高広・岩沢愿彦校注（角川文庫ソフィア）

『自殺の心理学』高橋祥友（講談社現代新書）
「維新が起きたのはなぜですか？」
『明治維新の舞台裏』石井孝（岩波新書）
『江戸開城』海音寺潮五郎（新潮文庫）
『龍馬逝く』会田雄次他（ワニ文庫）
『西郷隆盛』猪飼隆明（岩波新書）
『大久保利通―維新前夜の群像[5]』毛利敏彦（中公新書）
『氷川清話』勝海舟　勝部真長編（角川文庫）
『小説新潮』一九九八年四月号「人生通」谷沢永一（新潮社）
『催眠の科学』成瀬悟策（講談社ブルーバックス）
「奇蹟はどのようになされたのですか？」
『聖書物語』山室静（現代教養文庫）
『イエスの生涯』遠藤周作（新潮文庫）
『キリストの誕生』遠藤周作（新潮文庫）
『死海写本の謎を解く』E・M・クック（教文館）
『新約聖書』日本聖書協会編

※その他、新聞、雑誌の記事などを参考にさせていただきました。執筆された方々にはこの場を借りてお礼申しあげます。ありがとうございました。
なお、仏典訳文などは、主に各参考書籍中の引用文を使用させていただきましたが、作者の判断で傍点を付加している場合があります。
また、『魏志倭人伝』読み下し文は、岩波文庫版をテキストとした筆者のオリジナルですが、高木彬光氏、荒巻義雄氏の読み下し文を参考にさせていただきました。

付記

邪馬台国はどこにあったのか？
明智光秀の謀叛の動機は何だったのか？
イエス復活の真相は？

私がこれらの歴史上の謎に対する私なりの仮説を、行きつけの酒場のマスターに語ったのは、もう二年も前のことになります。

マスターは私の荒唐無稽な説にいたく感心してくれて「学界に発表するべきだ」とまで言ってくれたのです。

もちろん私は私の奇説が、学問的にどの程度の価値を有しているものか、まったく自信がなかったので、論文にまとめて学界に発表するという提案は一笑に付しました。

ところがマスターはなおも食い下がり「ならば小説という形で発表してみてはどうか」と第二案を出してきたのです。

小説ならばいかに荒唐無稽な説だろうが、誰に文句を言われる筋合いもないというわけです。

私はマスターの熱意にほだされた格好で承諾してしまいました。

実際の執筆は、マスターの知人で小説を書いているKさんという方にお願いしました。

したがって著作権はKさんに属しますが、内容の不備（たとえば歴史的事実の誤認、論理上の誤り等）があった場合、その責任はすべて私にあることを明記しておきます。

最後に、この本の創作に携わった者のひとりとして、すべての読者の方々に深く感謝いたします。

宮田六郎

解説

（本書の内容に触れています）

橋本直樹

個人的にぜひ言及しておきたい作品に、鯨統一郎さんの「邪馬台国はどこですか？」があります。面白く、興味深く読みました。ストレートに邪馬台国東北論を展開している作品で、小説としての仕掛けや工夫があるわけではなく、最初から受賞はちょっと難しいなと思いましたが、黙って落とすには忍びないものもありました。

——宮部みゆき氏／第三回創元推理短編賞選評（創元推理14）より

本書は、第三回創元推理短編賞の一次選考を通過し、その最終選考において、従来の歴史ミステリのカテゴリーを一新した斬新な手法と、肩の凝らないスマートな論理で歴史の考察に破天荒な一石を投じつつも、賞の性格上惜しくも受賞を逃した快作「邪馬台国はどこですか？」をメインに、同一の登場人物によるシリーズ物として新たな五作品を加えた、日本ミステリ史上他に類例を見ない風変わりな作品集である。

本書の刊行に至る発端は、二年前の春に遡る。

東京創元社が主催する鮎川哲也賞で四年、新たに創元推理短編賞が開設されてからはそちらで三年、私が賞の予備選考（下読み）に携わるようになって、実に七年の歳月が経過していた。例年四月の初めには、段ボール箱いっぱいの応募原稿が届く。その瞬間から正味三週間、寝ても覚めてもミステリ浸けの日々が始まる。賞の開設当初は応募数も少なく、それこそ春の新刊本を漁る片手間に読み終え、悠然と予備選考会に臨んでいたものだが、年を追い、賞が浸透するとともに応募総数は増え続け、下読みの作業は次第にハードになっていった。加えて一連の千枚本ブームによる応募者の総ペダンチック症候群が規定枚数をはるかに超える長編群をもたらし、ともすると寝る時間を完全にコントロールしなければ無事選考会当日を迎えられなくなってしまうこともあった。

予備選考の担当が短編賞に移ってからは、なんと三週間で百二十本の作品と格闘することもあり、私としては、年中行事として最も楽しみな、それでいて相当な覚悟を要する春のイベントとなっていた。

肝腎の中味だが、大学や高校、予備校を舞台にした恋愛がらみの青春ミステリであったり、あるいは嵐の山荘パターンであったりと、大学ミステリ研の機関誌の域を出ないものが数多く見受けられてはいた。しかし、年を追うごとに、従来の探偵小説のイメージを覆す斬新な作品が着実に増え、プロット一つとっても、「あーまたか」と言いたくなるようなものは減少して

いった。

このように、応募作品の水準は格段に向上し、多様化し、今日に至っている。

そこで本書『邪馬台国はどこですか?』である。

忘れもしない一九九六年の応募原稿の中に、不思議な作品が含まれていた。

九六年といえば、あの『推理短編六佳撰』が刊行された翌年にあたる。これは、第二回創元推理短編賞の候補に秀作佳作が並んだため、結果的に受賞作が決まらなかった故の産物であった。最終選考に残った六編を収録して作品そのものの面白さとクオリティーの高さを提供するとともに、選考過程から個々の作品についての評価を本選委員の座談会形式で綴っている。ちなみに『六佳撰』は、ミステリ作家を目指して投稿を重ねる人達の間で、単に秀逸なアンソロジーであるという以上に、短編小説創作の解説書的な意味合いも強く、非常によくできたテキストとなっていると聞く。

表題作「邪馬台国はどこですか?」は、『六佳撰』の勢いもそのままに、三月末の締め切りまでに投じられた三百を超える応募の中の一編であった。

何だかんだ言いつつも、私自身それまでに数百本のまだ見ぬ強豪、完全なルーキーのバージンノベルに触れた経験があり、そうした作品たちの本選での評価、その後の作者のブレイクぶりを具に感じていた。しかしながら、「邪馬台国はどこですか?」は何と評価してよいか思案せざるを得ない作品で、しばし当惑したことが記憶に新しい。

予備選考委員というのは、応募作品の評価選考をすると同時に、編集者から選考者としての資質を常に試されるという何とも過酷な役回りを担っている。因果なもので、自分の推した作品が本選考においてそれ相当の評価を得て当然、仮に不評でも浴びようものなら直ちに予選委員としての存在価値が疑問視される。意欲的かつ優れた作品を、下読みの段階で、個人的な趣味ではじいたり見落としたりしようものなら、その場でお役御免となることは必至である。

原稿の応募者と違いリライトや次年度の出直しが許されないだけに、予行演習なしのぶっつけ本番、まさに一球かぎりの真剣勝負である。

「邪馬台国はどこですか?」を読み終えた時の私自身の素直な評価は、「判定不能」というなんとも歯切れの悪いものであった。

面白い。確かに面白い。しかし……これを歴史ミステリと捉えて良いのであろうか?

本選に推すべきか推さざるべきか?

この判断が、自身の予選委員としての資質評価に直結することを十二分に理解していた私は、正直な話、いささか二の足を踏んだ。

本選に残った作品は、ある一定の基準をクリアし、複数の目が評価するところの「受賞に足る何か」を持ち合わせた作品ということになる。はたして太刀打ちできるか? 迷いに迷った挙句、私は本選に推すことにした。いざとなったら惚けるしかない。他の選考委員から顰蹙を買うことを想定し、言い訳を山のように用意して予備選考会に臨んだ。何が幸いするかわからない、本作は最終選考まで駒を進めたのである。

結果としてこの年は、伊井圭氏の「高塔奇譚」が受賞した。他にも新麻聡氏の「五つのバーコード」、瀬尾こると氏の「西方より来りし葡萄、砂漠にてみどりなす物語」（ともに『創元推理16』所収）といった強者が顔を揃えた中、選者の宮部みゆき氏が本作にかなりいい選評を出していたことが、自分のことのように嬉しかったものだ。

私は基本的に歴史ミステリというジャンルの作品を好んでは読まない。理由は明白。どんなに身近で、かつ、誰でも知っている歴史上の人物、あるいは事件等を題材にしたところで、極度に掘り下げられた史実の咀嚼と分析、時代背景からの類推と幾多のサブストーリーの理解が、作品を楽しむ上での必要不可欠な事項であり、題材となった史実に精通した研究者こそが愉しめる類の娯楽である。まさに「選ばれし者」のみが享受できる会員制の賭博場のようなものだと思っている。

何も知らない、特別な知識も史学研究の経験も技術もない一般の読者は、著者の構想数箇年に及ぶ取材の成果をこれでもかと押しつけられ、訳のわからないまま歴史的に新たな考察というラスト、つまり探偵小説としてはあまり意味のない予定調和に着地させられてしまう。読者の側に作者と比べ合う知恵が求められているわけでなく、衝撃のラストが待っているわけでもない。極めて淡々とした歴史解釈に落ち着く場合がほとんどで、早い話が「素人さんは黙って見とれ！」であるという印象が強い。

歴史ミステリというジャンルについては、宮部氏も先述の選評の中で触れている。

本来、歴史ミステリは、俗にいうミステリ読みの人々のみならず、年齢も広範なより多くの読者に愛され読みつがれるジャンルではあるが、手を出す作家は少ないというのである。

氏はこの要因を「取材が難しく、調べたことを消化するための専門的な知識の蓄積が必要であるうえに、今度はそれを読者向けに易しく書きおろす文章技術も不可欠と、あまりにもハードルが高いから」と分析している。全くの同感。

これは、歴史ミステリの成立要件として、極めて長い期間をかけた取材と研究、文献資料の総ざらいが必要とされ、作者自身の相当な理解なくしては刊行されるレベルには到底届かない、極めて専門性の高い作品が求められることに起因している。つまり構想より十数年の歳月をかけて書き上げた作品が、歴史学者、研究者、郷土史家たちの手で一刀両断にされ、「史実の理解が足りん」だとか「明らかな取材不足」といった烙印を押されるリスクが高い、つまり採算の合わないジャンルだという歴然とした事実があるからであろう。

こうした事情で、作者自身が採算を度外視して、採りあげた題材に相当な興味を持ち、研究の対象として、半ばライフワークのように捉えていなければ、作品として最後まで書ききることは至極難しい、要するに仕事として割の合わないジャンルだといえる。

ここが、百パーセントのフィクションで構築されていても、雰囲気で読ませることができれば、小うるさい専門家から内容については何らお咎めのない時代小説と、決定的に異なる部分であろう。

こうした背景が、構造的に歴史ミステリ書きが輩出されることを拒み、また既成作家の進出

を妨げて、慢性的な歴史ミステリ不足という現実に繋がってくる。

鯨氏は、そうした書き手としては実にとっつきにくいジャンルへ、全く別の発想から隙間を埋めるように、スマートに滑り込んできた。

本書は、異質も異質。歴史ミステリの研究者向けの楽しみ方、あるべき姿を根底から否定し、笑い飛ばすことからすべてが始まっている。

女王卑弥呼を擁した邪馬台国の比定地に、九州あるいは畿内という二つの説があることは中学で習う程度の古代史の常識。邪馬台国が東北にあったなどとは誰ひとり考えもしない。

しかし、鯨氏はそんな与太話をしゃあしゃあと飛ばす。小説である以上、鯨氏の生み出した登場人物が、無茶苦茶な理論、ウルトラ与太話を展開させるわけだが、これがまたたまらない。

正体不明の青年が、飛び抜けた美貌の持ち主、世紀の才媛と周りから持ち上げられているお高い女にさりげなく議論をふっかけ、その天まで昇りそうな鼻をへし折るという痛快なストーリーが、全編の基調となっている。

舞台は、とあるダイニングバー。四人の登場人物は、バーのカウンターから一歩も離れない。

主人公は、鯨氏そのものといえる宮田六郎。何をやっている男なのかは今ひとつわからないが、彼が明晰で柔軟な頭脳と優秀なディベート術に恵まれた、ある種の天才であることはすぐに伝わってくる。そしてこの宮田が独特の歴史解釈とともにバーにトラブルを運んでくるのである。

その戯言を受けてたつのが、美形で気の強い文学部助手、早乙女静香。日本史、西洋史、東

洋史の三つを網羅しなければ歴史の本質は見えてこないと、新たな歴史学である「世界史」という区分を構築した彼女は、美貌と若さ溢れる才媛中の才媛。気の強さときたら、あの惣流・アスカ・ラングレーも顔負けである。

そして彼女の師である私立大学文学部教授、日本古代史を専攻するダンディかつ温厚な紳士、三谷敦彦。

しんがりは、静香に押されっぱなしの人のよいバーテンダー、松永。ちなみに彼の作るカクテル、特に振りものは、全くもって自信なさげであるが、フードは結構そそられる。度重なる宮田と静香の論争で歴史に興味を持ち始めている。

各編は、毎度毎度、宮田がどこからともなく持ち出す理論に端を発する。通常の歴史ミステリにおいて、主人公が時間と空間を派手に飛び回り、資料と文献を徹底的に洗い、やっとのことで辿り着くはずの時代考証の綻びを、本書は、冒頭でぶちかます。

現代社会に生きるごく普通の登場人物たちが、飲みながら喰いながら、単なる飲み屋の馬鹿話として机上の空論を戦わせ、はるかな先人たちの営為に様々な角度から考察を加え、一般常識とされる史実に全く異なった解釈を導き出してしまおうという魂胆だ。

時にそれは「ブッダは悟りを開いていない」であったり、「本能寺の変は信長の自殺装置」であったり、「明治維新を起こしたのは勝海舟」であったり、極めつきは「聖徳太子と推古天皇が同一人物」であったり、とまさに無茶苦茶の極み。眉をひそめる学者も多かろう。相方の静香はといえば、ありとあらゆる資料を持ち出して対抗するが、最後には宮田のアクロバティ

ックな屁理屈による見事な着地と落ちに完全に封じ込められてしまう。そこに提示されることは単なる詭弁か？　はたまた真の歴史か？

どこからどこまでが綿密な時代考証と文献の精査から導き出された堅実な解釈で、どこからどこまでが作者の思いつきなのか、いつの間にやらわからなくなってくる。その時点で読者は、鯨統一郎氏のマジックという掌に遊ぶ孫悟空と化しているのである。

この曖昧かつ一見いい加減に思える屁理屈の向こうには、毎回毎回、読者の想像を凌駕する衝撃のラスト（落ち）が用意されており、創作落語としても立派に通用しそうな味わいと勢いがある。

こうしたキャラクターの飲み屋論争についつい引き込まれ、いつの間にやら自分も参加しているように錯覚する私たち読者には、このゲームを彼らと楽しむために、さほどの予備知識も特別な知識も必要とはされない。着の身着のままで来て頂戴！　ってな感じである。

単なる馬鹿話と侮るなかれ。読者は、冒頭の奇天烈な歴史解釈を喰らった瞬間に、現代のあわただしい日常にあって、瞬時にタイムトラベラーとなる。心は、いつの間にやら作者の仕掛けたレールを滑り出し、数百、数千年という時の流れを一気に遡る。「んな、馬鹿な！」と笑い飛ばしていたはずが、イメージはいつしか馬鹿話から離れられなくなり、どんどん膨らんでゆく……なんとも不思議な感覚に陥るのである。

この極めてお手軽な感覚。全く新しいタイプの歴史ミステリの誕生といえよう。鯨氏はこれまでの重厚かつ長大なイメージを払拭し、敷居の高さを取り払った。

史実という素材を、あくまでライトな感覚で調理し、誰にでも手軽に楽しめる全く新しいタイプのエンターテインメントとして提供した本書は、まさにエポックメイキングな作品集といえよう。

おそらく、この『邪馬台国はどこですか？』については、一読した全国の研究者、マニア、学生、郷土史家たちから非難の声があがることだろう。しかし、それこそが作者の思うつぼ。そこに鯨統一郎文学の真骨頂があることは論を俟たない。

本書『邪馬台国はどこですか？』の刊行は、鯨統一郎氏の卓越したセンスと光る才能に着目した編集部の伊藤詩穂子氏が、作者と二人三脚で熟成させてきた賜である。彼女の積極的な仕掛けがなかったら、異端の秀作として認められつつも、第三回創元推理短編賞の、ちょっと気になった応募作のひとつというままに、日の目を見ることがなかった可能性は大いにある。どこの新人賞でも毎年必ず出現する幻の傑作、究極の楽屋ネタとなったことだろう。

じっくりと時間をかけて咀嚼・反芻され練り上げられた作品群は、その制作過程において作者の急速な文章力の進歩をも呼び込み、この度、めでたく世に出されることとなった。

現在のミステリ界の流れにおいて、本書は一九九八年のミステリ界に一撃を加える核弾頭であり、ノーマークの新人として育て上げられた、東京創元社の隠し玉である。

今回、文庫書き下ろしという、新人作家のデビュー作としてはいささか変則的なスタイルをとっているが、これもまた〝仕掛け〟であることは言うまでもない。鮎川哲也賞、創元推理短

編賞の歴史において発掘され、蓄積されてきた新しい才能は、今まさに出陣の時を待っているようだ。鯨統一郎氏を皮切りに、次々と送り込まれて行くことだろう。

ニュージェネレーションの編集者である伊藤氏が新たな試みとして送り込む第一弾が、この破天荒な『邪馬台国はどこですか?』であることは、同じ時代に生きている私としては痛快なことこのうえない。ともかくも、下読みを務めた作品の船出にあたって、一入の感慨を禁じ得ない今日このごろである。

検印
廃止

著者紹介
本書がデビュー作。

邪馬台国はどこですか?

1998年5月29日　初版
2005年2月25日　21版

著者　鯨　統一郎（くじら　とういちろう）

発行所　(株)東京創元社
代表者　長谷川晋一

162-0814/東京都新宿区新小川町1-5
電　話　03・3268・8231-営業部
03・3268・8203-編集部
振　替　00160－9－1565
工友会印刷・本間製本

乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社までご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。
©鯨統一郎　1998 Printed in Japan

ISBN4-488-42201-2　C0193

〈エッグ・スタンド〉へようこそ

EGG STAND◆Tomoko Kanou

掌の中の小鳥

加納朋子

創元推理文庫

◆

涼しげな声のバーテンダーが切り回す
カクテルリストの充実した小粋な店
〈エッグ・スタンド〉の常連は、
不思議な話を持ち込む若いカップルや
何でもお見通しといった風の紳士など個性派揃い。
そこで披露される謎物語の数々、
人生模様のとりどりは……。
巧みな伏線と登場人物の魅力に溢れた
キュートなミステリ連作集。

◆

収録作品＝掌の中の小鳥，桜月夜，自転車泥棒，
できない相談，エッグ・スタンド

本格ミステリの巨匠が生んだ安楽椅子探偵

WISDOM OF THE NAMELESS BARTENDER

太鼓叩きはなぜ笑う

鮎川哲也

創元推理文庫

◆

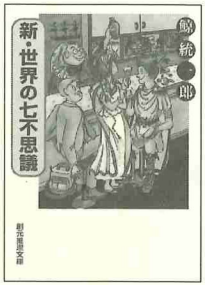
しがない私立探偵の「わたし」は元刑事
おんぼろ事務所に文句をつける肥った弁護士は
「わたし」を名探偵だと思っているが、さにあらず
請け負った仕事が難航すると「わたし」は西銀座の
バー〈三番館〉へ出かけ、事件の経過を話す
グラスを磨きながら聴いていたバーテンは
極めて控え目に質問を挟み
ひたすら謙遜して真相を喝破するのだ！
本格ミステリの巨匠が生んだ安楽椅子探偵
三番館のバーテン氏ここに登場

◆

〈三番館シリーズ〉続刊　サムソンの犯罪／ブロンズの使者／
材木座の殺人／クイーンの色紙／モーツァルトの子守歌

『邪馬台国はどこですか？』姉妹編

NEW SEVEN WONDERS OF THE WORLD◆Toichiro Kujira



新・世界の七不思議

鯨 統一郎

創元推理文庫

◆

来日している古代史の権威ジョゼフ・ハートマン教授は、
同じく歴史学者である早乙女静香と
京都へ旅行しようとしてはキャンセルの憂き目に遭い、
毎晩うらぶれたバーで飲むことに。
しかし、バーテンダー松永の供する酒肴を味わいつつ
聴く宮田六郎と静香の歴史検証バトルは、
不満を補って余りある面白さであった。
アトランティス大陸、ストーンヘンジ、ピラミッド、
ノアの方舟、始皇帝、ナスカの地上絵、モアイ像——
常識に囚われない柔軟な発想で、幾つもの世紀を超えた
“不思議”に迫る、斬新奇抜なミステリ連作集。
好評を博した奇想天外なデビュー作品集
『邪馬台国はどこですか？』の姉妹編、ここに登場！